岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第389集

野尻（のじり）Ⅲ遺跡発掘調査報告書

一般農道整備事業（野尻地区）関連発掘調査

㈶岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

野尻（のじり）Ⅲ遺跡発掘調査報告書

一般農道整備事業（野尻地区）関連発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、旧石器時代をはじめとする数多くの貴重な遺跡や重要な文化財が残されております。先人たちが創造し、遺してきたこれら多くの文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私たち県民一人ひとりに課せられた大切な責務であります。

その一方で、社会資本の充実を目指した地域開発等も県民の切実な願いであり、「埋蔵文化財の保護・保存」と「開発」という相容れない要素を持つ事業の、調和のとれた施策が今日的課題となっております。財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとって参りました。

本書は、岩手県二戸地方振興局二戸農村整備事務所による一般農道整備事業（野尻地区）に関して、平成12年度に発掘調査を実施した野尻Ⅲ遺跡の調査結果についてまとめたものであります。遺跡は平糠川左岸の河岸段丘面上に立地しており、調査の結果、縄文時代後期から晩期を中心とした遺跡であることが明らかになりました。石囲炉を伴う竪穴住居跡が確認されたほか、縄文時代後期から晩期の縄文土器をはじめとし、土偶や土製円盤、未製品ながらペンダント型の石製品等の遺物が出土しており、当該地域の歴史や周辺の遺跡との関連性を考える上で貴重な資料を提供することができました。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに県民の埋蔵文化財に対する関心と理解をより一層深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご支援を賜りました岩手県二戸地方振興局二戸農村整備事務所や一戸町教育委員会をはじめとする多くの関係機関、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成13年９月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　村　上　勝　治

例　言

1．本報告書は岩手県二戸郡一戸町平糠字野尻22番ほかに所在する野尻Ⅲ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、一般農道整備事業（野尻地区）に伴い、岩手県教育委員会生涯学習文化課と二戸地方振興局二戸農村整備事務所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として行った緊急発掘調査である。

3．岩手県遺跡登録台帳における番号と調査時の遺跡略号は以下の通りである。

遺跡番号・・・・・・ＪＥ６９―０３０２

遺跡略号・・・・・・ＮＪⅢ―００

4．調査期間・調査面積・調査担当者は以下の通りである。

調査期間	平成12年８月１日～平成12年８月31日
調査面積	１，１２５㎡
調査担当者	菅原靖男・村木　敬

5．室内整理期間と整理担当者は以下の通りである。

室内整理期間	平成12年12月１日～平成13年３月31日
整理担当者	菅原靖男・村木　敬

6．本報告書の執筆・編集は菅原靖男が担当した。

7．遺物の分析・鑑定及び保存処理にあたっては次の機関に依頼した。（敬称略）

赤色顔料分析鑑定	岩手県立博物館
石質鑑定	花崗岩研究会

8．委託業務にあたっては次の方々に委託した。（敬称略）

基準点測量	株式会社　藤森測量設計

9．土層及び土器の色調観察には農林水産省農林水産技術会議監修の「新版標準土色帖」を参考にした。

10．遺跡の調査成果は平成12年度分の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第370集「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」に公表したが、本書の内容が優先するものである。

11．発掘調査においては一戸町教育委員会をはじめ、多くの地元の方々に、室内整理作業においては当埋蔵文化財センターの期限付作業員の方々にご協力をいただいた。

12．本遺跡から出土した遺物及び調査にかかわる資料は岩手県立埋蔵文化センターに保管してある。

目　次

序

例言

〔本　文〕

Ⅰ．調査に至る経過 …… 2

Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2
　1．遺跡の立地 …… 2
　2．遺跡周辺の地形と地質 …… 2
　3．遺跡の基本層序 …… 4
　4．周辺の遺跡 …… 4

Ⅲ．調査の方法と室内整理 …… 10
　1．野外調査の方法 …… 10
　2．室内整理の方法 …… 11

Ⅳ．検出された遺構と遺物 …… 12
　1．概要 …… 12
　2．竪穴住居跡 …… 12
　3．土坑 …… 12
　4．柱穴状土坑群 …… 20
　5．出土した遺物 …… 21

Ⅴ．まとめ …… 50

Ⅵ．分析・鑑定結果 …… 55

報告書抄録

職員一覧

〔図　版〕

第1図　遺跡の位置及び遺跡周辺の地形図 …… 1
第2図　遺跡周辺地形分類図 …… 3
第3図　遺構配置図・基本土層柱状図 …… 5
第4図　周辺遺跡分布図 …… 7
第5図　1号竪穴住居跡及び石囲炉 …… 13
　　1号・2号・3号・4号・5号・6号・7号土坑、柱穴状土坑（P1～P6）

第６図　８号・９号・10号・11号土坑、柱穴状土坑（Ｐ７～Ｐ10）…… 15
第７図　11号・12号・13号・14号・15号土坑、柱穴状土坑（Ｐ11～Ｐ13）…… 17
第８図　15号土坑、柱穴状土坑（Ｐ14）…… 18
第９図　16号・17号土坑、柱穴状土坑（Ｐ15～19）…… 19
第10図　遺物包含層出土土器(1)　…… 27
第11図　遺物包含層出土土器(2)　…… 28
第12図　遺物包含層出土土器(3)　…… 29
第13図　遺物包含層出土土器(4)　…… 30
第14図　遺物包含層出土土器(5)　…… 31
第15図　遺物包含層出土土器(6)　…… 32
第16図　遺物包含層出土土器(7)　…… 33
第17図　遺物包含層出土土器(8)　…… 34
第18図　遺物包含層出土土器(9)　…… 35
第19図　遺物包含層出土土器(10)　…… 36
第20図　遺物包含層出土土器(11)　…… 37
第21図　遺物包含層出土土器(12)　…… 38
第22図　遺物包含層出土土器(13)　…… 39
第23図　遺物包含層出土土器(14)　…… 40
第24図　遺物包含層出土土器(15)　…… 41
第25図　土器出土量分布図　…… 53

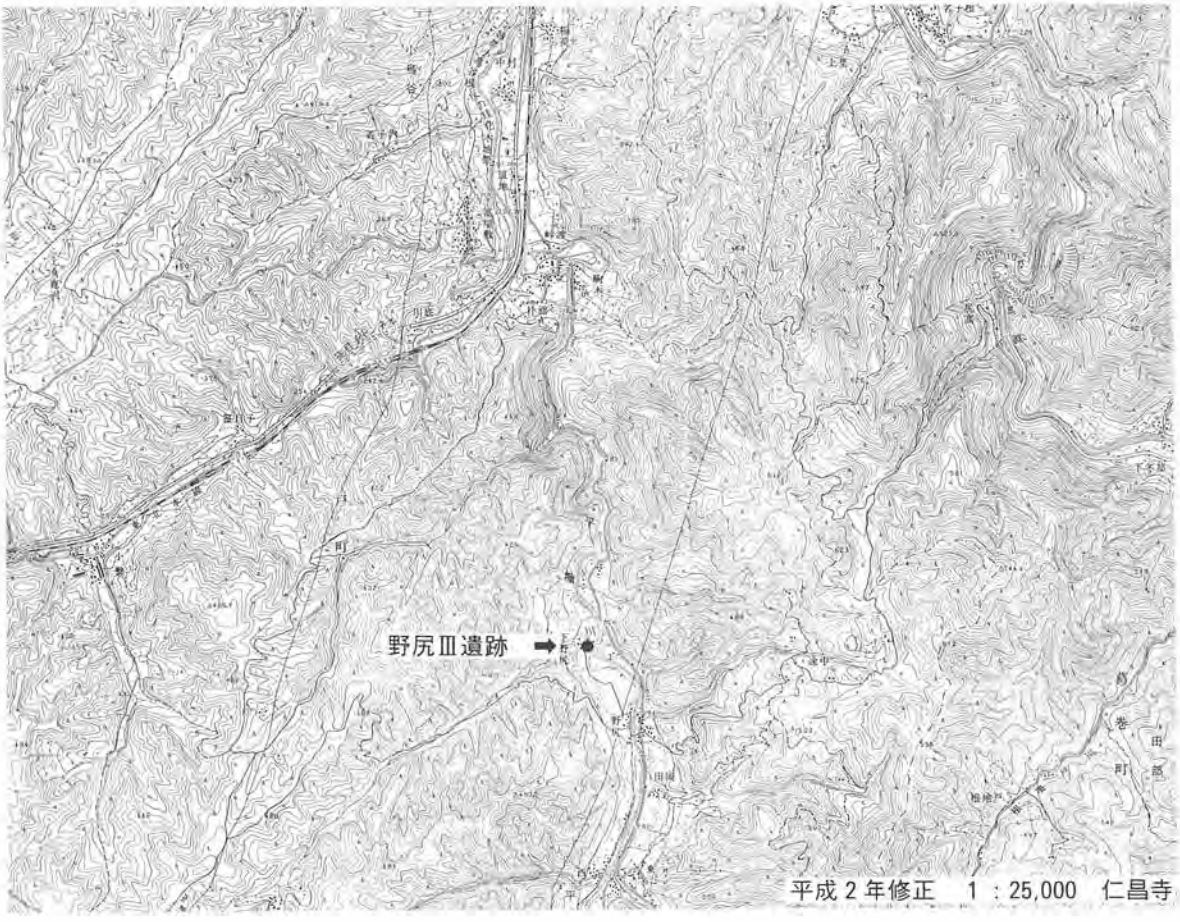
〔写真図版〕

写真図版１　遺跡周辺の様子　…… 61
写真図版２　検出遺構・遺物出土状況　…… 62
写真図版３　遺物包含層出土土器(1)　…… 63
写真図版４　遺物包含層出土土器(2)　…… 64
写真図版５　遺物包含層出土土器(3)　…… 65
写真図版６　遺物包含層出土土器(4)　…… 66
写真図版７　遺物包含層出土土器(5)　…… 67
写真図版８　遺物包含層出土土器(6)　…… 68
写真図版９　遺物包含層出土土器(7)　…… 69
写真図版10　遺物包含層出土土器(8)　…… 70
写真図版11　遺物包含層出土土器(9)　…… 71
写真図版12　遺物包含層出土土器(10)　…… 72
写真図版13　遺物包含層出土土器(11)　…… 73
写真図版14　遺物包含層出土土器(12)　…… 74
写真図版15　遺物包含層出土土器(13)　…… 75
写真図版16　遺物包含層出土土器(14)　…… 76

写真図版17　遺物包含層出土土器(15) …… 77
写真図版18　遺物包含層出土土器(16) …… 78
写真図版19　遺物包含層出土土器(17)・土製品 …… 79
写真図版20　遺物包含層出土石器・石製品 …… 80

〔表〕

第１表　周辺の遺跡一覧１（小鳥谷・平糠地区）…… 8
第２表　周辺の遺跡一覧２（平糠・小繋地区）…… 9
第３表　柱穴状土坑一覧 …… 20
第４表　土器観察表１ …… 42
第５表　土器観察表２ …… 43
第６表　土器観察表３ …… 44
第７表　土器観察表４ …… 45
第８表　土器観察表５ …… 46
第９表　土器観察表６ …… 47
第10表　土器観察表７ …… 48
第11表　土製品観察表１ …… 48
第12表　土製品観察表２ …… 48
第13表　石器・石製品観察表 …… 49
第14表　出土土器数量表 …… 54



第１図　遺跡の位置及び遺跡周辺の地形図

Ⅰ．調査にいたる経過

野尻Ⅲ遺跡は「一般農道整備事業野尻地区」の施行に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査することとなったものである。

当事業は、農業車両通行の安全を確保し、農産物及び生産資材の運搬流通の改善を図り、地域農業の振興と農村の生活環境の改善を図る目的として行っている農道整備事業である。事業者である岩手県二戸地方振興局二戸農村整備事務所では、事業の実施に先立ち岩手県教育委員会に対し、事業区域内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会では、現地踏査により埋蔵文化財の存在を確認し、平成10年11月25日に埋蔵文化財の内容把握のため試掘調査を実施した。試掘の結果、縄文時代後期中葉～後半の土器片などが発見されたことから、工事着手に先立ち発掘調査が必要である旨、平成10年11月30日付教文第922号により二戸地方振興局二戸農村整備事務所に通知した。

通知を受けた二戸農村整備事務所では、岩手県教育委員会からの平成11年度埋蔵文化財発掘調査に係る事業集約の問い合わせに対し、調査を実施してほしい旨の回答をした。

回答を受けた岩手県教育委員会は、二戸地方振興局に対し、平成11年３月２日付け教文第1251号「平成11年度埋蔵文化財発掘調査事業について」によって、平成11年度に発掘調査を実施し、実際の調査は、㈶岩手県文化振興事業団が担当する旨を通知した。

しかし、他で実施される発掘調査との関係により、平成11年度の発掘調査が見送られたため、改めて平成12年度発掘調査を行うこととなった。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

１．遺跡の立地

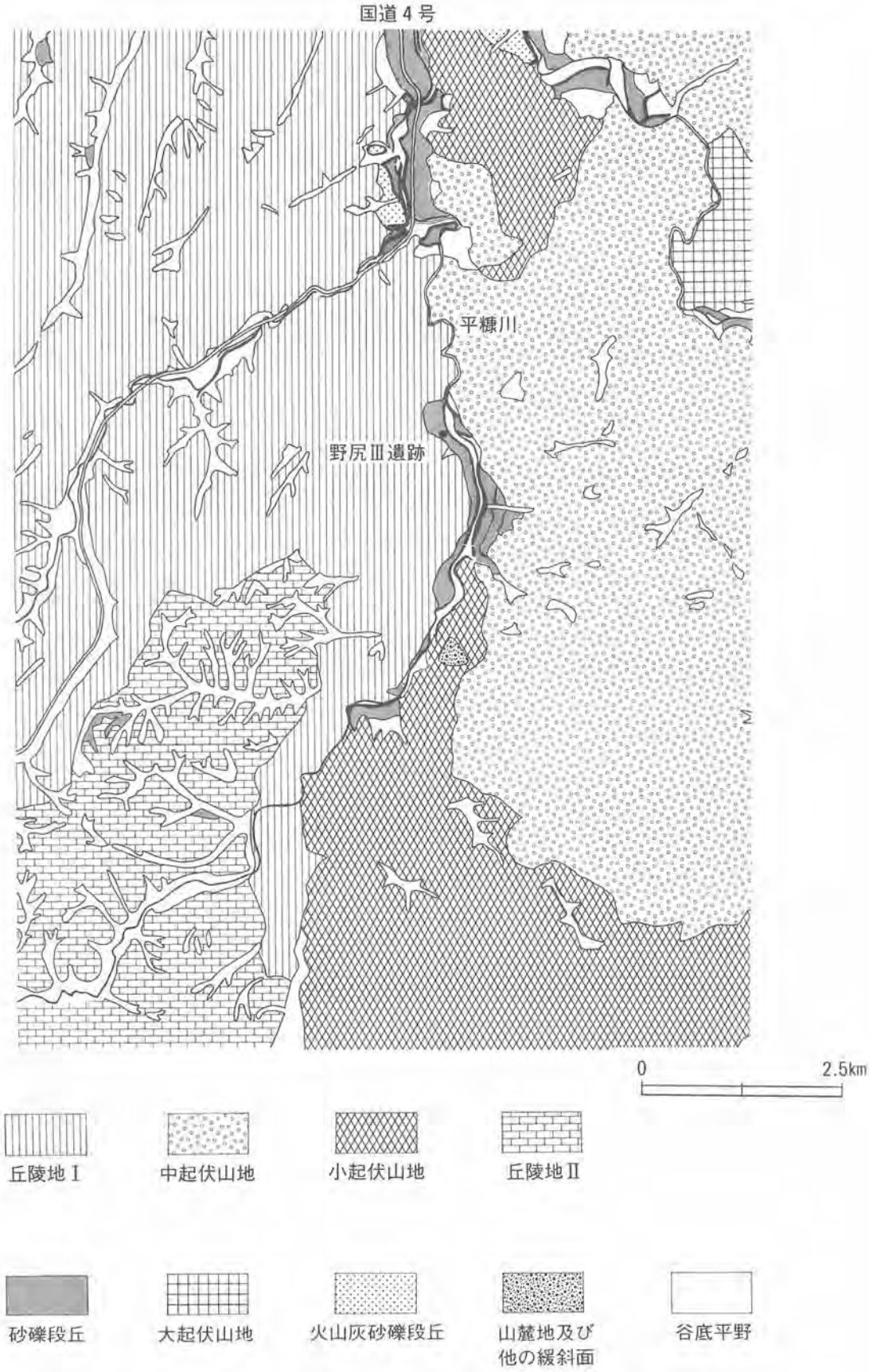
野尻Ⅲ遺跡の所在する二戸郡一戸町は岩手県北部に位置し、北は二戸市、東は九戸郡九戸村・岩手郡葛巻町、南は岩手郡岩手町、西は二戸郡浄法寺町の１市３町１村に接している。面積は300.11㎢、人口約17,100人（2001年１月１日現在）ほどの町である。

野尻Ⅲ遺跡は第１図に示すようにＪＲ東北本線小繋駅の東約4.5kmに位置し、馬淵川の支流の一つである平糠川左岸の河岸段丘上に立地している。国土地理院発行の２万５千分の１地形図「仁昌寺」ＮＫ－54－18－12－３（八戸12号－３）の図幅に含まれ、北緯40度７分18秒、東経141度19分３秒付近に位置する。標高は約270ｍで、現況は畑地および水田である。

２．遺跡周辺の地形と地質

遺跡の所在する一戸町は葛巻町南部の小屋瀬付近に源を発する馬淵川（142km）が、支流の平糠川（25km）・小繋川（11km）・女鹿川（10km）・小井田川（9.5km）・龍頭川（小友川・二ツ石川16.5km）と合流して町の北部中央をゆるく蛇行しながら北流し、小規模な段丘群や谷底平野を形成している。これらの台地や低地は耕地として利用されており、主要な集落もこの地形面に立地している。

国道４号やＪＲ東北本線など主要交通路は、中央部を南北に通っている。南の奥中山付近は馬淵川と北上川の分水界をなし、十三本峠（485ｍ）は国道４号の最高地である。また、北の二戸市境の旧道である奥州街道の波打峠は交叉層で知られている。



第２図　遺跡周辺地形分類図

今回調査した野尻Ⅲ遺跡は地形区分図の丘陵地Ⅰと中起伏山地に挟まれ、平糠川によって開析された砂礫段丘上に位置している。平糠川の両岸には極狭い範囲で谷底平野がみられるが、本遺跡は砂礫段丘と谷底平野との境界付近にあり、調査区の東側は平糠川に向かって比較的急な傾斜で下がっている。

3．遺跡の基本層序

今回の調査区は南側から中央部にかけて傾斜し、さらに北側の水田部で沢に沿って傾斜していくという階段状をしていること、水田、畑地は耕作の影響を多く受けていることなどにより基本層序は一様ではない。調査区南側で耕作等の影響をあまり受けていない最も状態の良い部分で確認した層序は以下の通りである。

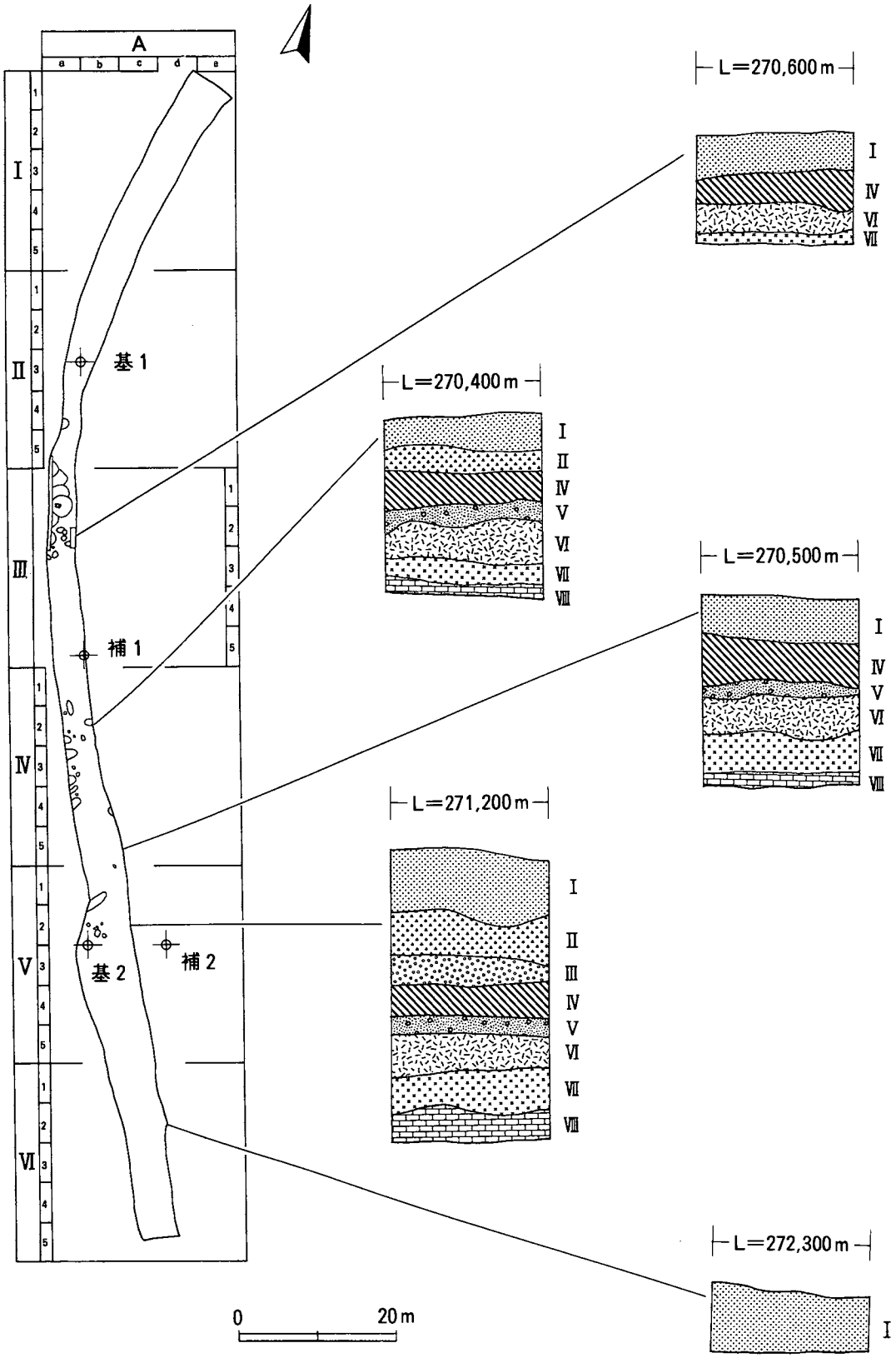
Ⅰ層：10YR2／3　黒褐色土　粘性やや強　締まり強　（現耕作土である）
Ⅱ層：10YR2／1　黒色土　粘性並　締まり並　（本層下部に火山灰が確認できる）
Ⅲ層：10YR2／1　黒色土　粘性並　締まりやや強　（Ⅱ層より若干色調が明るい）
Ⅳ層：10YR1.7／1　黒色土　粘性やや強　締まり強　（第１文化層の遺物包含層と思われる）
Ⅴ層：10YR2／1　黒色土　粘性やや強　締まりやや強　（第１文化層の遺構検出面である）
Ⅵ層：10YR2／2　黒褐色土　粘性やや強　締まりやや強　（中掫火山灰が確認できる）
Ⅶ層：10YR2／1　黒色土　粘性やや強　締まり強　（径１～５㎜の褐色粒子が確認できる）
Ⅷ層：10YR3／4　暗褐色土　粘性強　締まり強　（径５～30㎝の礫が確認できる　第２文化層の遺構検出面である）

4．周辺の遺跡

平成11年１月現在で岩手県内には約10,800ヶ所の遺跡が確認されており、そのうち一戸町内には503ヶ所が存在している。さらに本遺跡が所在する平糠地区とその近隣の小鳥谷地区、小繋地区には69ヶ所の遺跡が確認されている。野尻Ⅲ遺跡のある平糠地区は標高250～480ｍで、一戸駅周辺の盆地の130～200ｍに比較してかなり高い地域であり、従って奥中山地区ほどではないが積雪・気温の差は大きい。

平糠地区の中心を流れる平糠川は奥中山地区を水源とし北流しており、大志田・八木沢・高間木・平糠・田ノ岡・野尻と平糠川に沿って四つ役層が部分的に平坦部を形成している。現在この平坦部を中心に宅地と耕地が散在しており、遺跡もまたここに集中している。この平坦部の遺跡の時代（時期）は縄文時代前期（東遺跡）、縄文時代中期（東遺跡）、縄文時代後期（田ノ岡・田ノ岡Ⅱ・東・大志田Ⅳ遺跡）、縄文時代晩期（野尻・高間木・東・東Ⅱ・田ノ岡Ⅱ遺跡）、弥生時代（東Ⅱ遺跡）、古代（東遺跡）である。また、平糠川の支流が作ったＶ字谷上流部の狭い平坦部にも落合遺跡（縄文時代後期・晩期）、東Ⅴ遺跡（縄文時代後期・晩期）、東Ⅵ遺跡（縄文時代後期・晩期）、東Ⅶ遺跡（縄文時代晩期・平安時代後半）などの遺跡の分布が見られる。

平糠地区は、地形や標高が近隣の小鳥谷地区や小繋地区とはかなり異なっているが、小鳥谷・小繋地区で最も遺跡数の多い縄文時代後期・晩期の遺跡は、当地区の「平糠川沿いの平坦な部分」、「平糠川支流の山の中の狭い平坦部」の両立地条件の遺跡より出土している。また、小繋地区内の平糠川沿岸で古代の遺跡はまったく発見されていないが、東Ⅶ遺跡で土師器片が確認されている。古代の遺物の分布は一戸地区に比較にならないほど少ないようである。



第 3 図　遺構配置図・基本土層柱状図

平糠地区最北端の田ノ岡Ⅱ遺跡から駒木遺跡の間は典型的なＶ字谷で、山峡という感じであるためかその間２km以上平糠川沿岸には遺跡はまったく見あたらない。川岸や平坦部の背部は急斜面な所が多く、古生層から成っていて表土が浅く岩石の露出多く、現在ほとんどが山林・原野となっている。

平糠地区は標高約300～700ｍの山々に四方を囲まれ、川沿いの数少ない平坦な場所に遺跡が集中している地域といえよう。一方、落合遺跡や東Ⅶ遺跡のある標高470～490ｍというかなり高地にも遺跡の分布が見られるが、このような高い場所は、現在山林となっている所が多く、当然未確認の遺跡も多いことが予想される。

〈参考・引用文献〉

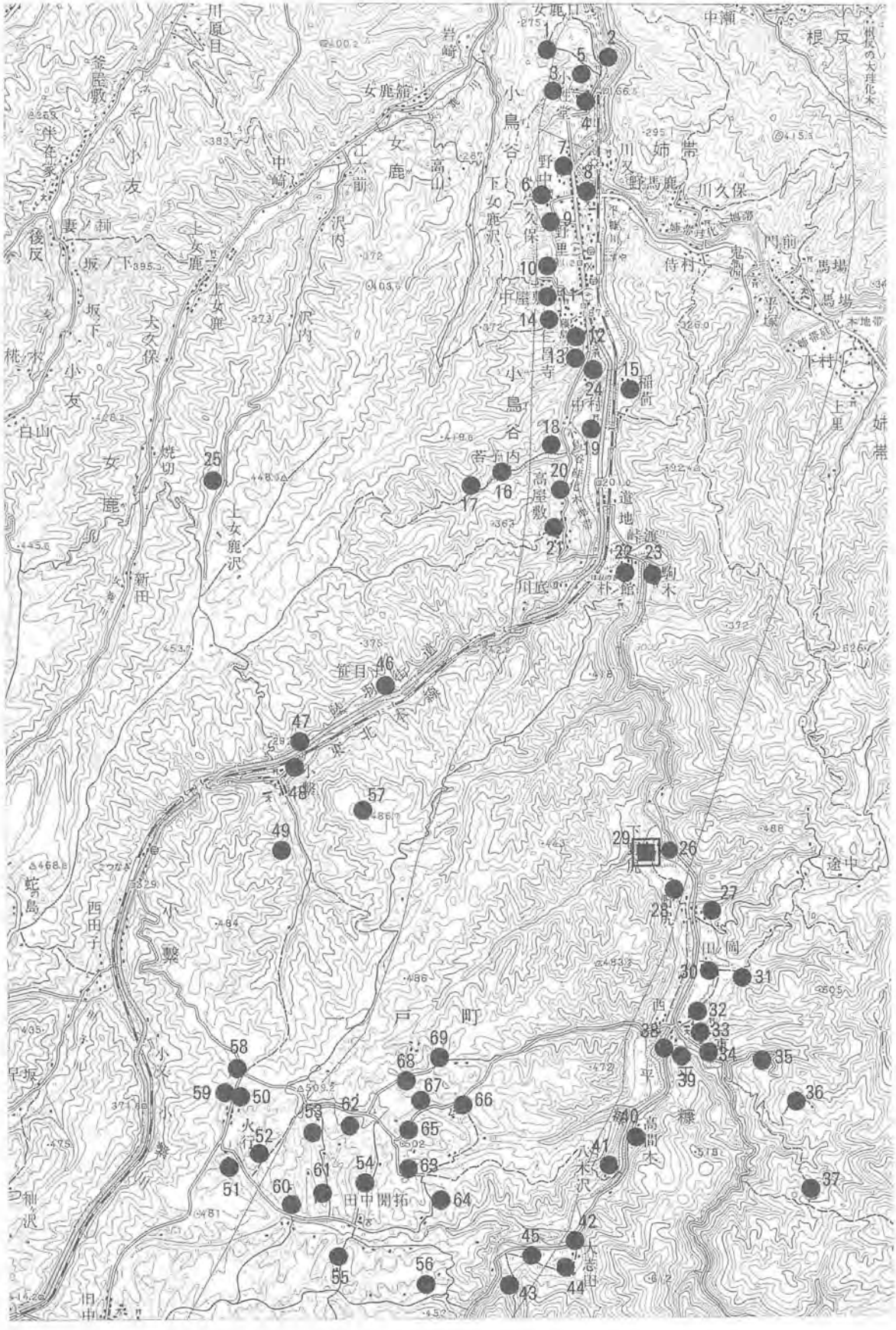
(1) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　「小井田Ⅲ遺跡発掘調査報告書」　岩文埋文報告書第85集

(2) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　「堀切・竹林遺跡発掘調査報告書」　岩文埋文報告書第107集

(3) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　「親久保Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡発掘調査報告書」　岩文埋文報告書第116集

(4) 一戸町教育委員会　「一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」　一戸町文化財報告書第１集

(5) 一戸町教育委員会　「一戸町の遺跡（Ⅳ）―― 平成５年度町内遺跡詳細分布調査報告書 ――」　一戸町文化財報告書第35集


女鹿口
中瀬
根反
川原目
岩崎
釜屋敷
半在家
女鹿舘
小友
中崎
女鹿
高山
小鳥谷
下女鹿沢
川久保
姉帯
野馬鹿
川久保
後反
妻ノ神
坂ノ下
上女鹿
大女保
沢内
桃木
坂下
小友
白山
女鹿
焼切
上女鹿沢
新田
中屋
野里
侍村
鬼渕
門前
馬場
馬場
平塚
下村
上里
姉帯
冒寺
小鳥谷
稲荷
中村
苦内
高屋敷
道地
峠渡
川底
朴館
駒木
笠目
盛岡北本線
蛇島
西田子
小繋
戸町
田中開拓
途中
西
平
高間木
八木沢
早坂
仙沢
旧中
火行

第4図　周辺遺跡分布図

No.	遺　跡　名	種　別	時　代　等／備　考
1	女鹿口Ⅱ	散布地	縄文・弥生・平安／ 縄文土器（早・前・後）　土師器
2	小姓堂	散布地	縄文／縄文土器（晩）
3	小姓堂Ⅱ	散布地	縄文・平安／縄文土器（後・晩）
4	小姓堂Ⅲ	散布地	縄文／縄文土器（草・中・後）
5	小姓堂Ⅳ	散布地	縄文／
6	穴久保	散布地	縄文？／
7	野中	散布地	縄文・古代／ 縄文土器（晩）・土師器
8	野里	散布地	縄文／縄文土器（晩）　土偶　ミニチュア土器
9	野里上	散布地	縄文／
10	野里上Ⅱ	散布地	縄文／
11	中屋敷上	散布地	縄文／縄文土器（晩）
12	仁昌寺	散布地	縄文・弥生／縄文土器（後・晩）　弥生土器
13	仁昌寺Ⅱ	散布地	縄文／縄文土器（中・後・晩）　石棒
14	仁昌寺Ⅲ	集落跡	縄文／縄文土器（晩）
15	稲荷	散布地	縄文／縄文土器（後・晩）
16	若子内	散布地	縄文／縄文土器（後・晩）
17	若子内Ⅱ	散布地	縄文／縄文土器（晩）
18	若子内Ⅲ	散布地	縄文／縄文土器（後・晩）
19	中村	散布地	縄文／縄文土器（後）
20	古屋敷	散布地	縄文／縄文土器（中・晩）　石鏃
21	高屋敷	散布地	縄文／縄文土器（後・晩）
22	朴館	散布地	縄文／縄文土器（中・晩）
23	駒木	散布地	縄文／縄文土器（後）
24	五月館	城館跡	中世／堀　平場
25	焼切Ⅳ	散布地	縄文／縄文土器（中・後）
26	田ノ岡Ⅱ	散布地	縄文／縄文土器（後・晩）
27	田ノ岡	散布地	縄文／縄文土器（後）　石棒　石斧
28	野尻Ⅱ	散布地	縄文／縄文土器（晩）
29	**野尻Ⅲ**	散布地	縄文／縄文土器（後・晩）土偶　土製円盤　**報告遺跡**
30	東	散布地	縄文・弥生／縄文土器（前・後・晩）　弥生土器
31	東Ⅶ	散布地	縄文・平安／縄文土器（晩）　土師器
32	東Ⅱ	散布地	縄文／縄文（晩？）
33	東Ⅲ	散布地	縄文／縄文土器（中）
34	東Ⅳ	散布地	縄文／縄文土器（晩）
35	東Ⅴ	散布地	縄文／縄文土器（後・晩）
36	東Ⅵ	散布地	縄文／縄文土器（後・晩）

第１表　周辺の遺跡一覧１（小鳥谷・平糠地区）

No.	遺　跡　名	種　別	時　代　等／備　考
37	落合	散布地	縄文／　平糠金山側
38	高間木	散布地	縄文／縄文土器（晩）
39	平糠館	城館跡	中世～／堀切　平場
40	高間木Ⅱ	集落跡？	縄文／縄文土器（後）
41	岩木	散布地	縄文／
42	大志田	散布地	縄文／縄文土器（後）　壺形土器　片口形土器
43	大志田Ⅱ	散布地	縄文／
44	大志田Ⅲ	散布地	縄文／
45	大志田Ⅳ	散布地	縄文／縄文土器（後）
46	下平	散布地	縄文／縄文土器（晩）
47	下平Ⅱ	散布地	縄文／縄文土器（後・晩）
48	下平Ⅲ	散布地	縄文／縄文土器（後・晩）
49	小繋	散布地	縄文／縄文土器（後・晩）
50	東火行Ⅳ	散布地	奈良・平安／土師器
51	東火行Ⅴ	散布地	縄文・続縄文／縄文土器（後）　北海道系土器
52	東火行	散布地	縄文／縄文土器（晩）
53	名子根	散布地	縄文／縄文土器（後）
54	名子根Ⅹ	散布地	縄文／
55	名子根ⅠⅩ	散布地	縄文／
56	道白	散布地	縄文／縄文土器（前）
57	新館	蝦夷館？	中世／
58	西火行墳墓	中世墳墓	中世／人骨・古銭
59	西火行	散布地	奈良・平安／土師器
60	東火行Ⅲ	散布地	縄文／
61	東火行Ⅱ	散布地	縄文／
62	名子根	散布地	縄文／
63	名子根Ⅶ	散布地	縄文／
64	名子根Ⅷ	散布地	縄文／石鏃
65	名子根Ⅵ	散布地	縄文／
66	名子根Ⅴ	散布地	縄文／
67	名子根Ⅳ	散布地	縄文／
68	名子根Ⅲ	散布地	縄文／
69	野尻	散布地	縄文／

第２表　周辺の遺跡一覧２（平糠・小繋地区）

Ⅲ. 調査の方法と室内整理

1. 野外調査の方法

(1) 調査の概要

今回の調査は調査区の西側を並行して走る一般農道の整備に伴うものであるが、盛土による工法を採用することにより検出面以下が保護されるとの理由から、遺跡の内容確認調査だけを行った。調査の内容は、遺構の検出作業と遺物の出土状況等の把握である。よって、この調査では遺構の精査は一切行わず、検出された遺構の配置を図化し、出土した遺物から遺跡の時期を確認したのみである。

(2) 調査区のグリッド設定

今回の調査は野尻地区の一般農道の脇をＳ字状に細長く調査することになったため、平面直角座標（第Ｘ系）を用いて調査区全体を見通せる２点を基準点として設定した。基準点の座標は次の通りである。

基準点１	Ｘ＝13,635.000	Ｙ＝41,195.000	Ｈ＝270.011ｍ
基準点２	Ｘ＝13,705,000	Ｙ＝41,175.000	Ｈ＝270.267ｍ

グリッドの設定にあたってはこの基準点１と基準点２を結んだ線を基準線とし、これを基に一辺25×25ｍの大区画を設定した。この区画の北西端を基準として南西方向に向かってはⅠ、Ⅱ、Ⅲ…Ⅵの数字を付し、北東方向に向かってはＡ、Ｂ…のアルファベットを与えＩＡ区、ⅡＡ区と表した。さらにこの大区画を一辺５×５ｍの小区画に細分し、南西方向へは１～５、北東方向へはａ～ｅの数字とアルファベットをつけてＩＡ２ｃ区やⅢＡ３ｂ区のように表現した。

(3) 粗掘りと遺構検出および遺構の命名

検出面までの深さと層序の確認のために調査区に沿うかたちで15ヶ所のトレンチを設定した。その結果ⅢＡ区では表土（現耕作土）を除去した段階で石囲炉を伴う竪穴住居や数基の土坑が確認されたため、この面で人力による遺構の検出を行った。一方、ⅣＡ区～ⅥＡ区ではトレンチを設定した際、遺物がまったく出土せず、遺構も確認できなかったことから重機（バックホー）を使用して表土除去を行い、その後は人力による遺構検出を行った。

検出された遺構の命名については検出順に１号竪穴住居跡、２号土坑、３号柱穴状土坑（Ｐ３）としている。

(4) 遺構の精査と実測および遺物の取り上げ

本来なら検出された遺構について４分法、２分法を用いて精査を行うところであるが、既述のような事情から精査を行っていない。遺構の平面図および調査区は調査期間との兼ね合いから平板測量を用いて行った。実測図は竪穴住居跡は１／20、石囲炉１／10、それ以外は１／40、１／80で適宜作成した。出土した遺物についてはグリッド毎に層位を記して取り上げ、必要に応じて写真撮影を行ったが、調査の都合上、複数のグリッドについてまとめて取り上げてしまったものもある。

(5) 写真撮影

野外での写真撮影は35mm判カメラ２台（モノクロ、カラー・リバーサル）と６×７cm判カメラ１台を使用した。遺構の平面、遺物の出土状況、調査区全景等の撮影を行ったが、遺構によっては６×７cm判のカメラを使用しなかったものもある。また、調査終了間際に行う空中撮影は今回は行っていない。

2．室内整理の方法

(1) 作業手順

室内整理は、現場で残った遺物の水洗、出土地点・層位を記入する注記から始め、遺物の仕分け、接合・復元、拓本作成、写真撮影、実測、遺物実測図のトレースの順に行った。遺構の実測図については点検・合成の後にトレースを行い、図版・写真図版の作成を順次進めた。

(2) 遺構

遺構配置図は、発掘調査時に作成した実測図を基に１／400の縮尺図を作成し、１／800で掲載している。各遺構図面には一部縮尺を変更したものもあり、それぞれにスケールを付している。また、平面図中の矢印は北方向を示している。

(3) 遺物

遺物は土器、土製品、石器、石製品を掲載している。土器については時期毎に大別し、グリッド毎に掲載し、石器については器種毎に分類し掲載している。掲載遺物の実測図は土器・土製品が１／３、石器・石製品は１／２、写真図版は１／２を原則としているが、それぞれに異なっているものもあり、その際には個々に縮尺を明記している。また、遺物番号は図版、写真図版とも共通で、番号順の掲載を心がけたが、スペースの関係上、一部番号順に配列されていないものもある。

Ⅳ．検出された遺構と遺物

1．概要

今回の調査で検出した遺構は、石囲炉を伴う竪穴住居跡１棟、土坑17基、柱穴状土坑19基である。遺物は、縄文時代中期後葉～縄文時代晩期中葉にかけての土器、土製品（土偶１点、土製円盤１点）、石器、石製品が出土している。土器の大半は縄文時代後期後葉～縄文時代晩期初頭の土器で、次いで縄文時代晩期前葉～中葉、縄文時代中期後葉～縄文時代後期前葉の順に多く出土している。既述の通り本遺跡は遺構の精査を行っていないため遺構の詳細な時期については不明であるが、出土した遺物と遺構が検出された層位から判断して縄文時代後期後葉～縄文時代晩期初頭にかけてのものと、それより古い時期のものとに分類できる。また、出土した遺物は全て遺物包含層から出土したものとして扱っている。

2．検出された遺構

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡

〈位置・検出状況〉調査区のⅢＡ１ａ～ⅢＡ２ａ区にかけて位置し、Ｖ層において黒色土の広がりとして検出した。本遺構は現在の耕作土を除去した時点で石囲炉が確認されたものであり、これまでの耕作によって上部は削平されてしまったものと思われる。

〈重複関係〉４号土坑、５号土坑と重複関係にあり、本遺構の方が新しい。

〈規模・平面形〉遺構の西側が調査区域外へ延びるため規模、平面形の全容は不明である。検出された規模は2.96m×2.74mで、平面形は円形をしていると思われる。

〈炉〉30～50cm程の礫を６個用い、西側をやや開いて円形に組んでいる。礫の周辺で焼土や炭化粒は確認できなかったが、礫自体に熱を受けた痕跡が認められたため石囲炉と判断した。

(2) 土坑

1号土坑

〈位置・検出状況〉 ⅡＡ４ａ区に位置し、Ｖ層において黒色土の広がりとして検出した。今回調査した範囲の中では最も北に位置する遺構であり、これより先の水田部分から北側は平糠川に向かって流れる沢の影響を受けており遺構は確認できなかった。

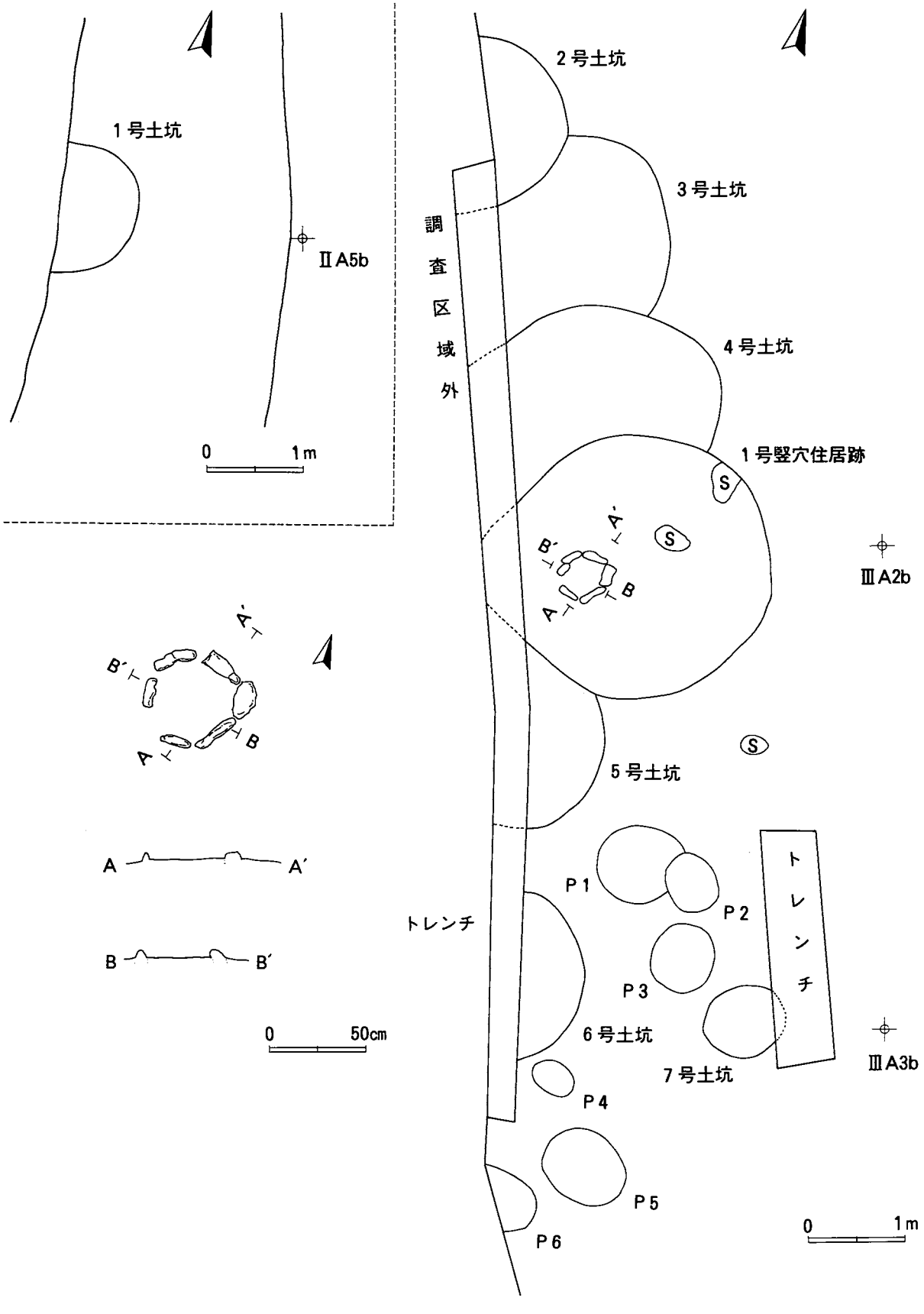
〈規模・平面形〉西側が調査区域外へ延びるため規模・平面形の全容は不明であるが、今回確認した規模は1.34×(0.8)mである。

2号土坑

〈位置・検出状況〉ⅡＡ５ａ～ⅢＡ１ａ区に位置し、Ｖ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉３号土坑と重複関係にあり、本遺構の方が新しい。

〈規模・平面形〉西側が調査区域外へ延びるため規模・平面形の全容は不明である。今回確認規模は1.78×(1.22)mである。



第5図　1号竪穴住居跡、1号～7号土坑、柱穴状土坑（P1～P6）

3号土坑

〈位置・検出状況〉ⅢＡ１ａ区に位置し、Ｖ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉２号土坑、４号土坑と重複関係にあり、本遺構の方が古い。

〈規模・平面形〉西側が調査区域外に延びるほか、他の遺構と重複しているため規模・平面形とも全容は不明である。今回確認された部分の長軸は1.76ｍである。

4号土坑

〈位置・検出状況〉ⅢＡ１ａ区に位置し、Ｖ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉３号土坑、１号竪穴住居跡と重複関係にあり、３号土坑より新しく、１号竪穴住居跡より古い。

〈規模・平面形〉西側が調査区域外に延びるほか、他の遺構と重複しているため規模・平面形とも全容は不明である。今回確認された部分の長軸は2.60ｍである。

5号土坑

〈位置・検出状況〉ⅢＡ２ａ区に位置し、Ｖ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉１号竪穴住居跡と重複関係にあり、本遺構の方が古い。

〈規模・平面形〉西側が調査区域外に延びるほか、他の遺構と重複しているため規模・平面形とも全容は不明である。今回確認された部分の長軸は1.16ｍである。

6号土坑

〈位置・検出状況〉ⅢＡ２ａ区に位置し、Ｖ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈規模・平面形〉西側が調査区域外に延びるため規模・平面形の全容は不明である。今回確認された規模は1.76×(0.66)ｍである。

7号土坑

〈位置・検出状況〉ⅢＡ２ａ区、調査区の東側に位置し、Ｖ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈規模・平面形〉東側の一部がトレンチによって壊されているため規模・平面形の全容は不明である。今回確認された規模は(0.86)×0.74ｍである。

8号土坑

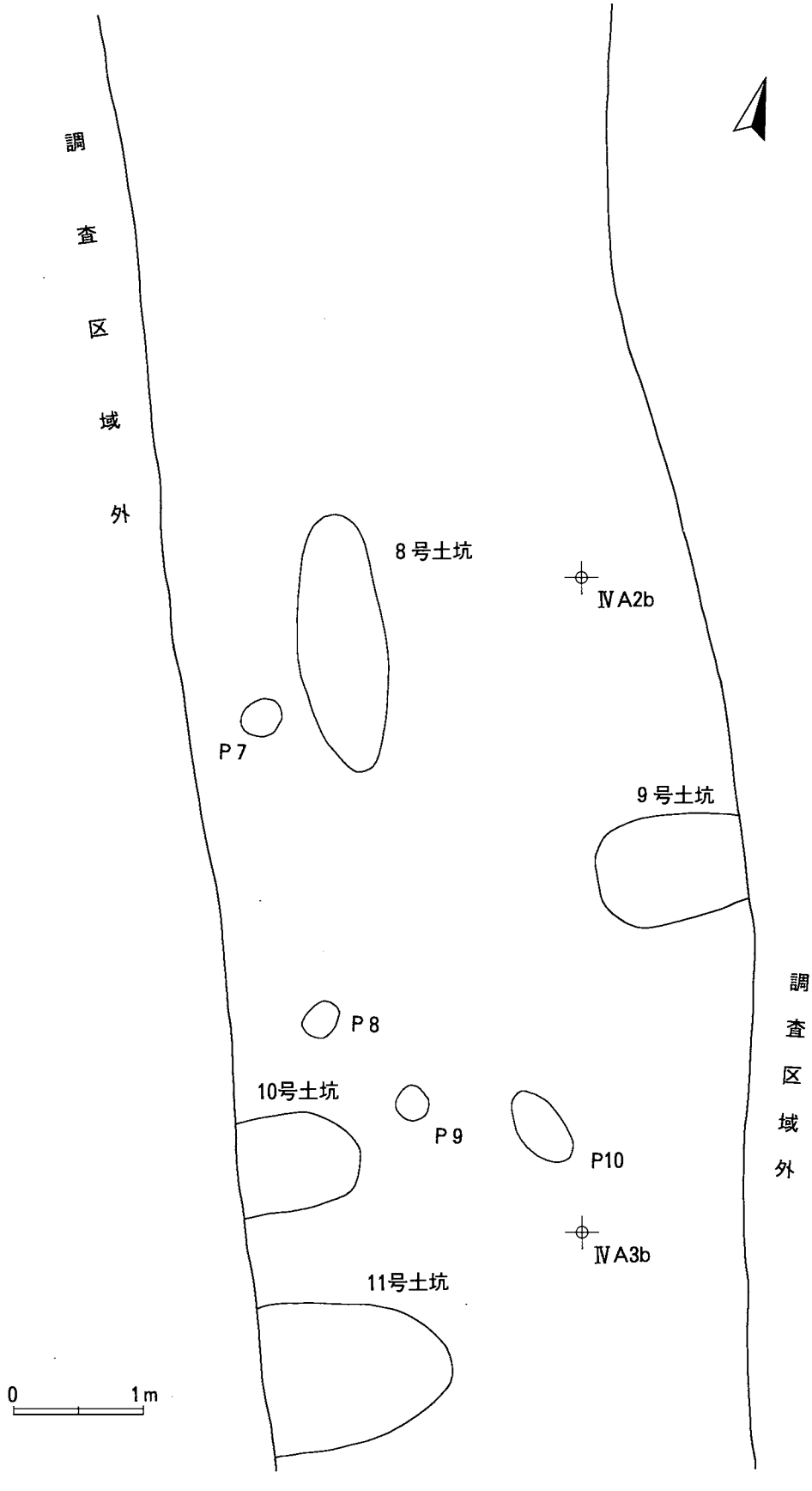
〈位置・検出状況〉ⅣＡ１ａ～ⅣＡ２ａ区にまたがって位置し、Ⅷ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈規模・平面形〉2.00×0.70ｍで北北西－南南東に長軸を持つ長楕円形をしている。形状から縄文時代の陥し穴である可能性も考えられる。

9号土坑

〈位置・検出状況〉ⅣＡ２ｂ区、調査区東側に位置し、Ⅷ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈規模・平面形〉東側が調査区域外へ延びるため、規模・平面形の全容は不明である。今回確認された規模は(1.14)×0.80ｍである。



第6図　8号～11号土坑、柱穴状土坑（P7～P10）

10号土坑

〈位置・検出状況＞Ⅳ Ａ ２ ａ区に位置し、Ⅷ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈規模・平面形〉西側が調査区域外へ延びるため規模・平面形の全容は不明である。今回確認された規模は(0.96)×0.74ｍである。

11号土坑

〈位置・検出状況〉Ⅳ Ａ 3 ａ区に位置し、Ⅷ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈規模・平面形〉西側が調査区域外へ延びるため規模・平面形の全容は不明である。今回確認された規模は(1.46)×1.16ｍである。

12号土坑

〈位置・検出状況〉Ⅳ Ａ ３ ａ区に位置し、Ⅷ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈規模・平面形〉西側が調査区域外へ延びるため規模・平面形の全容は不明である。今回確認された規模は1.00×0.86ｍである。

13号土坑

〈位置・検出状況〉Ⅳ Ａ ３ ａ～Ⅳ Ａ ４ ａ区にまたがって位置し、Ⅷ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈規模・平面形〉西側が調査区域外へ延びるため規模・平面形の全容は不明である。今回確認された規模は(0.94)×0.48ｍである。

14号土坑

〈位置・検出状況〉Ⅳ Ａ ４ ａ区に位置し、Ⅷ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈規模・平面形〉西側が調査区域外へ延びるため規模・平面形の全容は不明である。今回確認された規模は(1.30)×0.80ｍである。

15号土坑

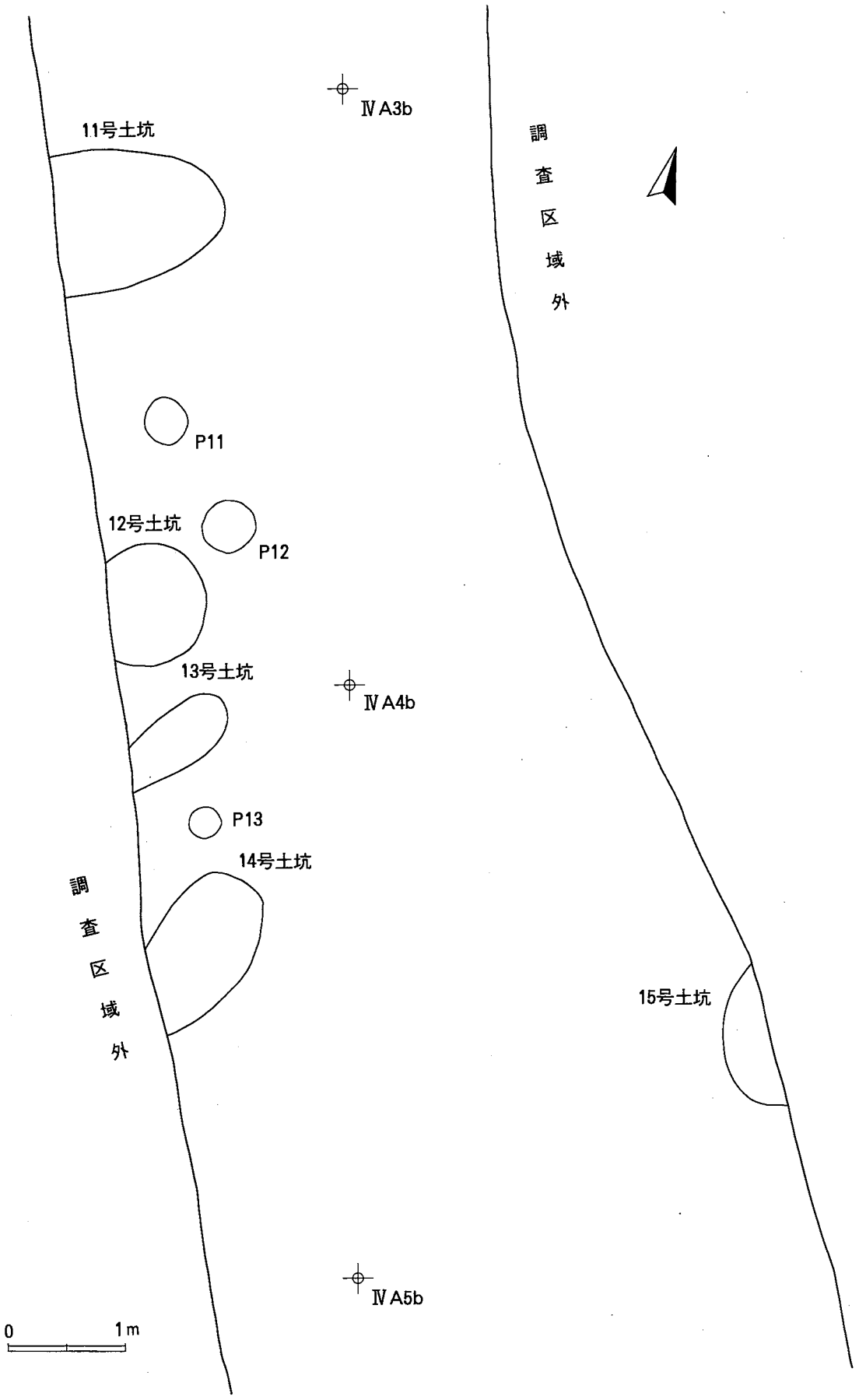
〈位置・検出状況〉Ⅳ Ａ ４ ｂ区に位置し、Ⅷ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈規模・平面形〉東側が調査区域外へ延びるため規模・平面形の全容は不明である。今回確認された規模は1.22×(0.40)ｍである。

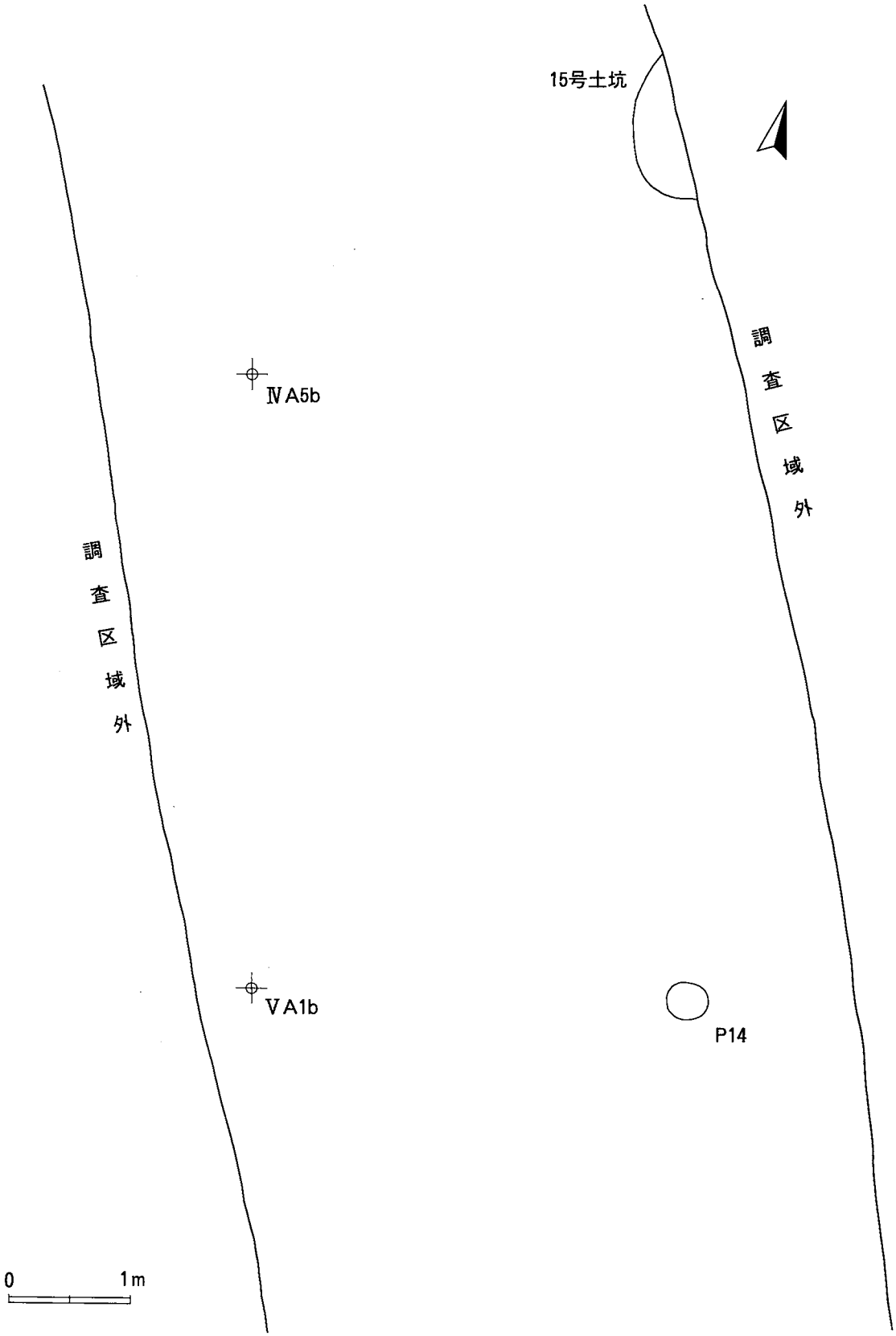
16号土坑

〈位置・検出状況〉Ｖ Ａ １ ｂ～Ｖ Ａ ２ ｂにまたがって位置し、Ⅷ層において黒色土の広がりとして検出した。

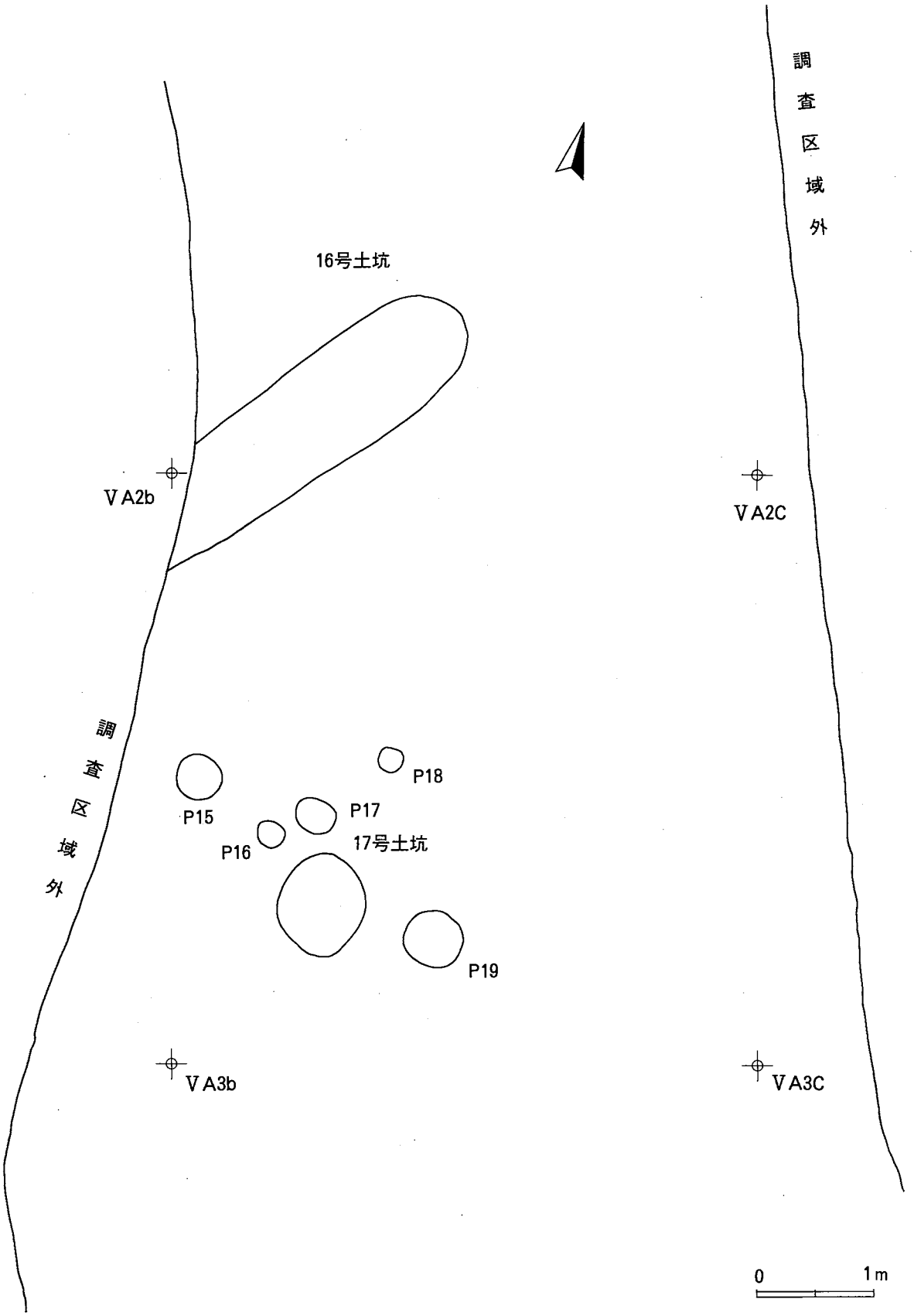
〈規模・平面形〉西側が調査区域外へ延びるため規模・平面形の全容は不明である。今回確認された規模は(2.96)×0.92ｍである。平面形が長楕円形をしていることから縄文時代の陥し穴である可能性も考えられる。



第７図　11号～15号土坑・柱穴状土坑（Ｐ11～Ｐ13）



第８図　15号土坑、柱穴状土坑（Ｐ14）



第９図　16号～17号土坑、柱穴状土坑（Ｐ15～Ｐ19）

17号土坑

〈位置・検出状況〉ＶＡ２ｂ区に位置し、Ⅷ層において黒色土の広がりとして検出した。

〈規模・平面形〉今回確認された規模は0.86×0.76ｍで、楕円形をしている。

(3) 柱穴状土坑

今回の調査では合計19基の柱穴状土坑が検出されたが、場所毎に偏った状況で検出された。その内訳はⅢＡ２ａ～ⅢＡ３ａ区６基、ⅣＡ２ａ～ⅣＡ４ａ区７基、ＶＡ１ｂ～ＶＡ２ｂ区６基である。規模は径70～90㎝程度４基、40～60㎝程度６基、20～30㎝程度９基である。平面形は円形10基、楕円形９基である。

遺構名(Ｐ)	平面形規模(㎝)	形状	位　置	備　　考
Ｐ１	(92)× 82	円	ⅢＡ２ａ	Ｐ２と重複　Ｐ１が古い
2	64 × 52	楕円	ⅢＡ２ａ	Ｐ１と重複　Ｐ２が新しい
3	70 × 70	円	ⅢＡ２ａ	
4	46 × 34	楕円	ⅢＡ２ａ	
5	90 × 72	楕円	ⅢＡ２ａ	
6	72 ×(42)	楕円	ⅢＡ２ａ	
7	32 × 28	楕円	ⅣＡ２ａ	
8	30 × 24	楕円	ⅣＡ２ａ	
9	26 × 24	円	ⅣＡ２ａ	
10	64 × 36	楕円	ⅣＡ２ａ	
11	40 × 36	円	ⅣＡ３ａ	
12	46 × 46	円	ⅣＡ３ａ	
13	26 × 26	円	ⅣＡ４ａ	
14	36 × 30	楕円	ＶＡ１ｂ	
15	38 × 38	円	ＶＡ２ｂ	
16	24 × 22	円	ＶＡ２ｂ	
17	36 × 28	楕円	ＶＡ２ｂ	
18	22 × 20	円	ＶＡ２ｂ	
19	50 × 46	円	ＶＡ２ｂ	

第３表　柱穴状土坑一覧表

3．出土した遺物

(1) 土器について

本遺跡から出土した土器は大コンテナ（T40：30×40×30cm）で約8.5箱である。時期的には縄文時代中期中葉～後葉、縄文時代後期初頭～前葉、縄文時代後期後葉～末葉、縄文時代晩期初頭、縄文時代晩期前葉、縄文時代晩期中葉に属するもので、次のように時期毎に群を設定し、特徴別に分類した。

・1群　…　縄文時代中期中葉～後葉に属すると思われる土器

・2群　…　縄文時代後期初頭～前葉に属すると思われる土器

・3群　…　縄文時代後期後葉～末葉に属すると思われる土器

a類…押圧状の刻み目を特徴とする土器

b類…入組帯状文を特徴とし、口縁部に突起を持つ土器

c類…コブを特徴とする土器

d類…地文のみの土器

e類…無文の土器

f類…詳細の不明な土器と注口土器の注口部のみ

・4群　…　縄文時代晩期初頭に属すると思われる土器

a類…入組帯状文を特徴とし、平口縁もしくは低い畝状の口縁を持つ土器

b類…地文のみの土器

c類…無文の土器

d類…底部・脚部のみ

・5群　…　縄文時代晩期前葉に属すると思われる土器

a類…三叉文（さんさもん）状の文様を特徴とする土器

b類…羊歯状文（しだじょうもん）またはそれに類似する特徴を持つ土器

c類…地文のみの土器

d類…無文の土器

・6群　…　縄文時代晩期中葉に属すると思われる土器

a類…雲形文（くもがたもん）を特徴とする土器

b類…鋸歯状の口縁と沈線を特徴とする土器

c類…平行沈線や横位の沈線を特徴とする土器

d類…地文のみの土器

e類…無文の土器

1群土器（No.1～10）

縄文時代中期中葉～後葉に属すると思われる土器である。いずれも小破片で器形等の復元が可能なものはない。No.1～4はいずれも深鉢の口縁部である。No.1、2、4は折り返し口縁でNo.3は竹管による刺突が施されている。No.5・6は深鉢の体部でそれぞれ大木9～10式、同じく大木8b～9式に相当すると思われる。No.7・8・9・10は全て深鉢の底部であり、外底面には網代痕が確認できる。さらにNo.7には土器製作時についたと思われる指紋が明瞭に残っている。

2群土器（No.11～19）

縄文時代後期初頭～後期前葉に属すると思われる土器である。No.11～13は深鉢、No.14は鉢の口縁部である。No.11・14には部に横位の原体圧痕が確認できる。また、No.12は口唇部にも縄文が施されている。No.13には太めの平行沈線が施されている。No.15は壺の体部～底部である。体部には沈線文が施され、底部には4単位の圧痕が確認できる。蛍沢式土器の影響を受け、十腰内Ⅰ式より古い時期のものと思われるが、本遺跡からの出土はこれ1点のみであるためこの群に納めた。No.16は深鉢、No.17は鉢、No.18は壺の体部である。No.16には縦位の原体圧痕が確認でき、No.17には施文後、太めの沈線文が施されている。No.18は壺？の体部と思われ、渦巻き状の刺突文が施されている。No.19は深鉢の底部で縦位の原体圧痕が確認できる。

3群a類の土器（No.20～36）

縄文時代後期後葉～末葉に属すると思われる土器で、押圧状の刻みを特徴とする一群である。No.20～26は深鉢、No.27～30は鉢のそれぞれ口縁部であり、刻み目のみのものと沈線間に刻みを施したものとに二分される。No.31～35は深鉢、No.36は鉢のそれぞれ体部である。No.31～No.34は横位の沈線間に刻みが施され、No.35は太めの隆帯に刻みを施している。No.36は刻み目のみである。

3群b類の土器（No.37～54）

縄文時代後期後葉～末葉に属すると思われる土器で、入組帯状文を特徴とし、さらに口縁部に突起を持つ一群である。No.37～No.は深鉢、No.46は浅鉢、No.47は鉢のそれぞれ口縁部である。No.37は口唇部に突起の他、押圧状の連続刻み目が施されている。No.39はウサギの耳状の台状突起をしており、No.40・42・43・47は台状突起に刻みが施されている。No.41の台状突起には真上方向から刺突が施され、No.44・45・46は他よりやや肥厚した台状突起をしている。No.48～51は深鉢、No.52・53は鉢、No.54は壺のそれぞれ体部である。No.48・52・53・54は沈線区画による入組帯状文、No.49には焼成後の穿孔、No.51には入組部に焼成前に施された円形の刺突が確認できる。No.50は入組文に櫛歯状の細線文が施されている。

3群c類の土器（No.55～57）

縄文時代後期後葉～末葉に属すると思われる土器で、コブ付き土器の一群であるが、本遺跡での出土量は極めて少ない。No.55は脚付の皿で、口縁部に2個1対のコブが確認できる。また、欠損しているが外底面に4脚の跡が残っている。No.56は深鉢の口縁部であり、台状突起の下部に貼りコブが確認できる。No.57は鉢の口縁部で、横方向からの押圧によって盛り上がった部分をコブに利用している。

3群d類の土器（No.58～92）

縄文時代後期後葉～末葉に属すると思われる土器で、地文のみの土器を一括した。No.58～78は深鉢の口縁部、（略）完形の土器である。No.58・65・73・74・78は平口縁、No.63は平口縁でさらに輪積み痕と焼成後の穿孔が確認でき、No.73にも焼成後の穿孔が確認できる。No.59・69・70・72は口唇部に刻みが施されている。No.60は口唇部に突起があり、上方向からの刺突痕が見られる。No.61・71は口唇部が内傾し、やや肥厚している。No.64・77は煤（すす）の付着が確認でき、No.77には焼成後の穿孔が施されている。No.62・66・67・68・75・76は地文のみで、No.66には焼成前の穿孔が見られる。No.79～89は深鉢、No.90は台付鉢、No.91・92は鉢の体部、底部である。No.79・81・85・89には非結束の羽状（うじょう）縄文が施され、No.88には結束の羽状縄文が見られる。No.80・

82・83・84・86・87・90・92は地文のみであるが、No.83には横位の結束回転文が確認できる。

3群e類の土器（No.93～97）

縄文時代後期後葉～末葉に属すると思われる土器で、無文の土器を一括した。No.93は深鉢の口縁部で煤の付着が見られる。No.94も深鉢の口縁～頸部で、頸部から外反して立ち上がっている。No.95は鉢の口縁部で平口縁である。No.96は深鉢の体部、No.97は壺の頸部で3本の横位沈線が施されている。

3群f類の土器（No.98～111）

縄文時代後期後葉～末葉に属すると思われる土器で、詳細の不明なもの、注口土器の注口部のみ、底部のみを一括した。No.98は香炉の天井部？で三角透かし窓、細沈線文、ボタン状のコブが確認できる。No.99は深鉢の口縁部で「ハ」字沈線が施されている。今回はこの類に分類したが、同じ3群のb類に属するものの可能性もある。No.100も深鉢の口縁部で、平行帯状文が見られる。No.101は台付の浅鉢と思われ、沈線文が施されている。No.102～104は注口土器の注口部である。No.105～108は深鉢、No.109・110は台付鉢の脚部である。No.111は鉢の体部～底部であり地文のみが施されている。

4群a類の土器（No.112～126）

縄文時代晩期初頭に属すると思われる土器で、入組帯状文を特徴としさらに、平口縁もしくは低い畝状の口縁を持つ一群である。No.112～No.116は深鉢、No.117～No.119は浅鉢の口縁部である。No.112・114・118・120・123・125は平口縁、No.113・115・116・117・119・121・122・124・126は低い畝状もしくはそれに類する口縁をしている。No.118については他と様相が異なりもしかすると別の分類に属する可能性もある。

4群b類の土器（No.127～146）

縄文時代晩期初頭に属すると思われる土器で、地文のみの土器である。No.127～140は深鉢で、（略）完形およびその口縁部である。No.141は鉢の口縁～体部である。No.127・128・134・136・137・138・139・140・141は全て平口縁で、No.134には口唇部に突起が見られ、No.138は非結束羽状縄文が施されている。No.129は口唇部に押圧状の圧痕が確認できる。No.130・131・132・135には煤が付着している。No.133は口縁上部端部がナデ調整されている。No.142・143は深鉢、No.144・145は鉢、No.146は壺の体部である。No.142には煤が付着しており、No.143には非結束羽状縄文が施されている。

4群c類の土器（No.147 ～153）

縄文時代晩期初頭に属すると思われる土器で、無文の土器を一括した。No.147深鉢の口縁～体部、No.148～151は鉢、No.152・153は壺の口縁部である。No.147・150は平口縁で粗い磨きがほどこされている。No.148は口唇部に突起があり、さらに体部に低い橋状の把手が見られる。No.149は口唇部に刻みの施された突起がある。No.152は頸部付近に横位の沈線と刺突の痕が確認できる。

4群d類の土器（No.154～163）

縄文時代晩期初頭に属すると思われる土器で、深鉢や鉢の底部および台付鉢の脚部を一括した。No.154の内底面には4ヶ所の押圧状の圧痕が見られる。No.155・156・157は体部に地文のみが確認できる。No.158は脚

部下部に縄文が施され、No.159はコブ状の小突起がついている。No.160・161の脚部は無文で、No.162は丁寧な磨きが施されている。No.163は体部下部に横位の沈線が確認できる。

5群a類の土器（No.164～174）

縄文時代晩期前葉に属すると思われる土器で、三叉文状の入組文を特徴とする一群である。No.164は浅鉢の口縁部で、口唇部には連続する刻みが施されている。No.165～168は鉢の口縁部で三叉状の入組文が施されている。No.169は壺の体部上半で、磨消縄文による剣菱文が施されている。No.170は浅鉢の体部で、磨消縄文と底部付近に平行沈線が施されている。No.171～174は注口土器で、横位の沈線文や浮き彫り的な三叉文系の文様やX字・C字状の文様が施されている。

5群b類の土器（No.175～188）

縄文時代晩期前葉に属すると思われる土器で、羊歯状文またはそれに類似する土器の一群である。No.175～177は深鉢、No.178・179は浅鉢、No.180～187は鉢、No.188は台付鉢である。No.175は口唇部に連続する刻み目があり、口縁上部に段違いの刻みが施されている。No.176は口唇部にB突起と連続する刻み目が見られ、その下に2段の連続する刻みが施されている。No.177は横倒したS字状の幹の内側に刻みを施した羊歯状文である。No.178は口唇部装飾と羊歯状文に類する文様が施されている。No.179は口縁部には連珠文、体部には半浮き彫り的な磨消縄文が施されている。No.180は羊歯状文状の2段の刻み目と沈線が施され、体部は地文のみである。No.181は口唇部に連続する刻み目を持ち、連珠文が施されている。No.182は羊歯状文とその下に横長の列点文が施されている。No.183は口唇部に連続するB突起を持ち、連珠文状の連続する刻み目が見られる。No.184は口唇部にB突起を持ち、横位の沈線が施されている。No.185も口唇部にB突起を持ち、羊歯状文の一部と思われる文様が施されている。No.186は平行沈線と羊歯状文が確認できる。No.187は口縁上部に連珠文状の刻み目が施されている。No.188は台付鉢の体部～脚部で、体部下部には連続する刻み目、脚部下部には縄文が施されている。

5群c類の土器（No.189～195）

縄文時代晩期前葉に属すると思われる土器で、地文のみの土器である。No.189は深鉢の口縁部で口縁上部に磨きが施されている。No.190は鉢で口唇部に連続する小刻み目がある。No.191は鉢の体～底部で、体部は地文のみで、体部下部に沈線が施され、それ以下が丁寧に磨かれている。No.192は鉢の口縁部で、他に比べて薄いのが特徴である。No.193は鉢の体～底部で、非結束羽状縄文が施されている。No.194は鉢の口縁部で、口唇部に連続する刻みが確認できる。No.195は台付鉢の体～脚部で、体部下部に連続する刻み目が施されている。

5群d類の土器（No.196～201）

縄文時代晩期前葉に属すると思われる土器で、無文の土器を一括した。No.196は深鉢の口縁部で口唇部にB突起と連続する刻み目が確認できる。No.197～200は浅鉢の口縁部で、No.199・200は口縁部に平行沈線が施されている。No.201は台付鉢の脚部で外面は比較的丁寧に磨かれている。

6群a類の土器（No.202～214）

縄文時代晩期中葉に属すると思われる土器で、雲形文（くもがたもん）を特徴とする土器である。No.202～206は浅鉢の口縁～体部である。No.202・203・206は雲形文のほか口縁上部に連続する押圧状の刻み目と平行沈線が施されている。No.204・205は雲形文のほか口縁上部に平行沈線が 施されている。No.207は鉢の口縁部で雲形文のほか口唇部に突起を持ち、太めの沈線が施されている。No.208～210は皿の体部～底部で、体部下部や底部に2本の沈線が施されている。No.211は浅鉢の体部、No.212は壺の体部で浮き彫り状の文様が施されている。No.213・214は注口土器で雲形文のほか横位の沈線が施されている。

6群b類の土器（No.215～220）

縄文時代晩期中葉に属すると思われる土器で、口唇部に鋸歯状の刻み目と横位の沈線を特徴とする一群である。No.215～220は全て鉢の口縁部である。No.215は口唇部にB突起を持ち、連続する小刻み目と平行沈線が施されている。No.216も口唇部にB突起を持ち、1本の横位沈線が施されている。No.217にはB突起は見られないが鋸歯状の口唇部と連続する刻み目、平行沈線が確認できる。No.218は口唇部に小突起、頸部～体部にかけて2個1対となるような突起が見られる。No.219は口縁部に2段の連続する刻み目と平行沈線が、No.220は1段の連続する刻み目と平行沈線が施されている。

6群c類の土器（No.221～226）

縄文時代晩期中葉に属すると思われる土器で、横位の沈線を特徴とする一群である。No.221～223は鉢の口縁～体部でいずれも頸部付近に複数の横位沈線が施されている。No.224は壺の口縁～頸部で、頸部付近に連続する押圧状の刻み目と平行沈線、口唇部には外反する小突起とやや大きめの山型の突起が見られる。また、内外面とも比較的丁寧に磨かれている。No.225も壺の口縁～頸部でやはり頸部付近に3本の横位の沈線が施されている。No.226は壺で口縁が外反し、口唇部に刻みと体部上部に平行沈線が施され、比較的丁寧に磨かれている。

6群d類の土器（No.227～229）

縄文時代晩期中葉に属すると思われる土器で、地文のみの土器を一括した。No.227は深鉢の口縁部で太めの沈線以下に縄文が施されている。No.228は台付鉢の体部である。上部と下部にそれぞれ横位の沈線が施され、その間に縄文が施されている。No.229は台付鉢の体部下部～脚部である。体部下部には縄文が、脚部の下端付近には横位の沈線が施されている。

6群e類の土器（No.230～234）

縄文時代晩期中葉に属すると思われる土器で、無文の土器を一括した。No.230は皿の口縁～体部で内外面とも丁寧に磨かれ、非常に薄手の土器である。No.231は浅鉢の口縁部で、内外面が丁寧に磨かれている。さらに口唇部に段が確認できる。No.232は壺の口縁～体部で、口縁の内側、外側両方に沈線が施されている。外面は丁寧に磨かれている。No.233も壺の頸部である。頸部付近に太めの隆帯が施され、その隆帯を区画する橋状の突起が見られる。No.234も壺の頸部～体部である。頸部に連続する押圧状の刻み目が施され、体部は丁寧に磨かれている。

その他の土器（№235～239）

用途不明のミニチュア土器とそれに類すると思われる土器を一括した。№235は縄文時代晩期、№236～239は縄文時代後期のものと思われる。

(2) 土製品について

①土偶（№240）

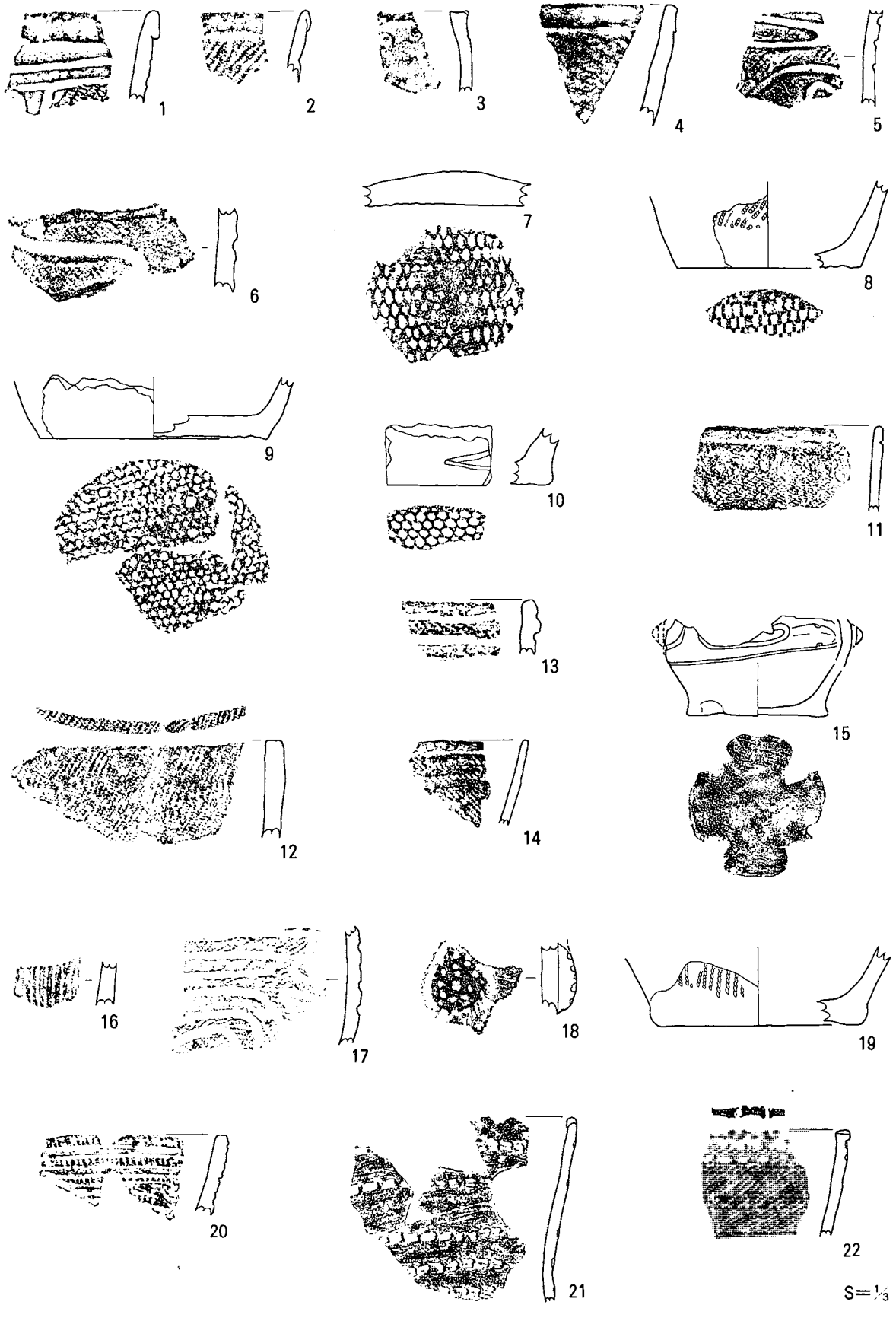
本遺跡から出土した土偶は、調査区ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ区にかけて出土した１点のみである。破損品であるため詳細については不明であるが、部位は胴部もしくは脚部ではないかと思われ、脚部であるとすると比較的大型の土偶になる可能性がある。表面には平行沈線の間に縄文が施文されているほか、破損部から作りが中空であることが確認できる。確認できる残存値は長さ63㎜、幅40㎜、厚さ20㎜、重さ58.61ｇで、時期は縄文時代後期中葉～後葉のものではないかと思われる。

②土製円盤（№241）

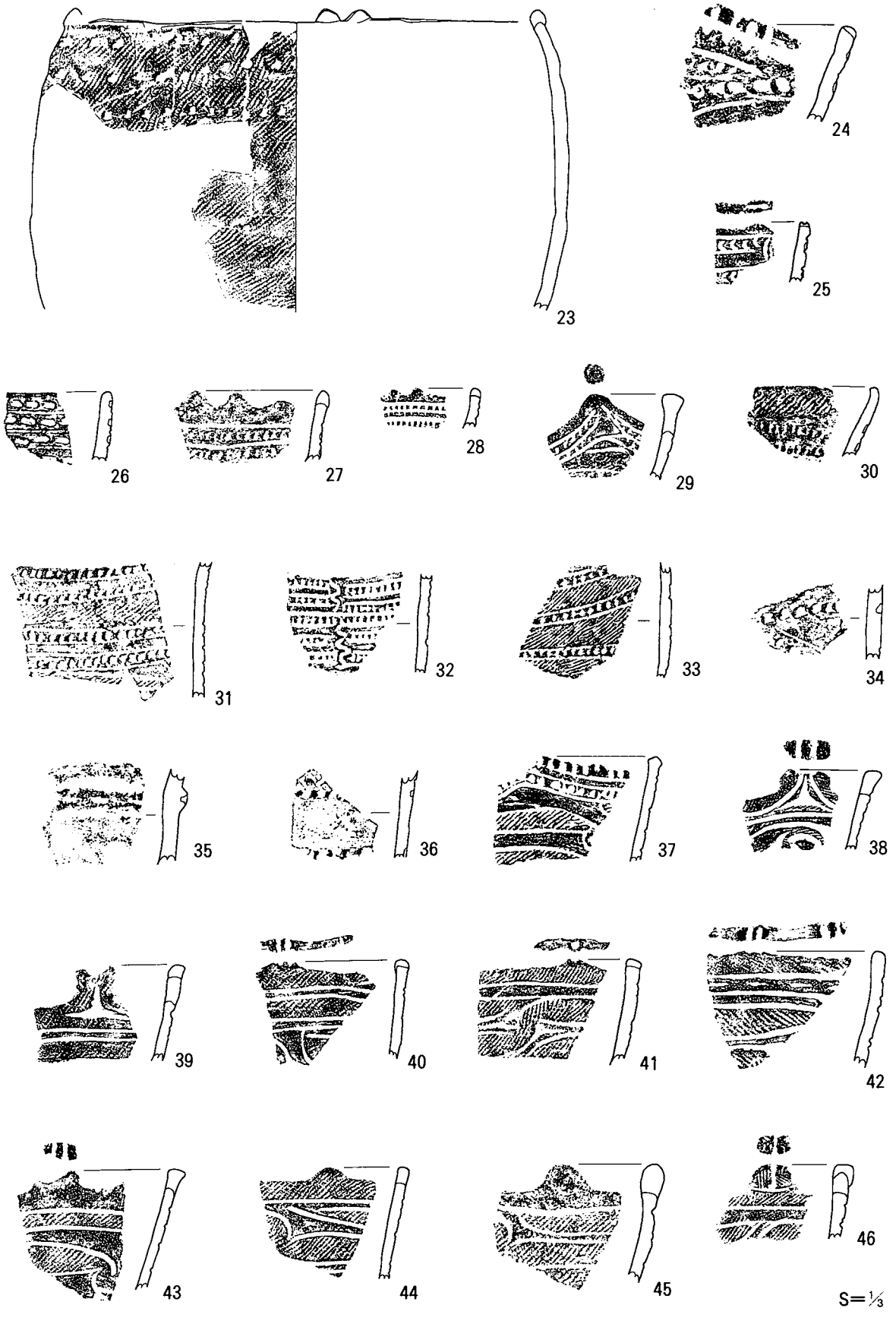
土偶と同様に本遺跡から出土した土製円盤はⅢＡ３ａ区で出土した１点のみである。側縁の調整が打欠段階であることから判断して、破損した土器片の一部を再利用した「再生円盤」と思われ、無孔品である。径は53㎜、厚さ９㎜、重さ27.87ｇで、ＬＲ縄文が施されている。時期についての詳細は不明であるが縄文時代後期後葉～縄文時代晩期前葉あたりまでの範囲に属するのではないかと思われる。

(3) 石器・石製品について

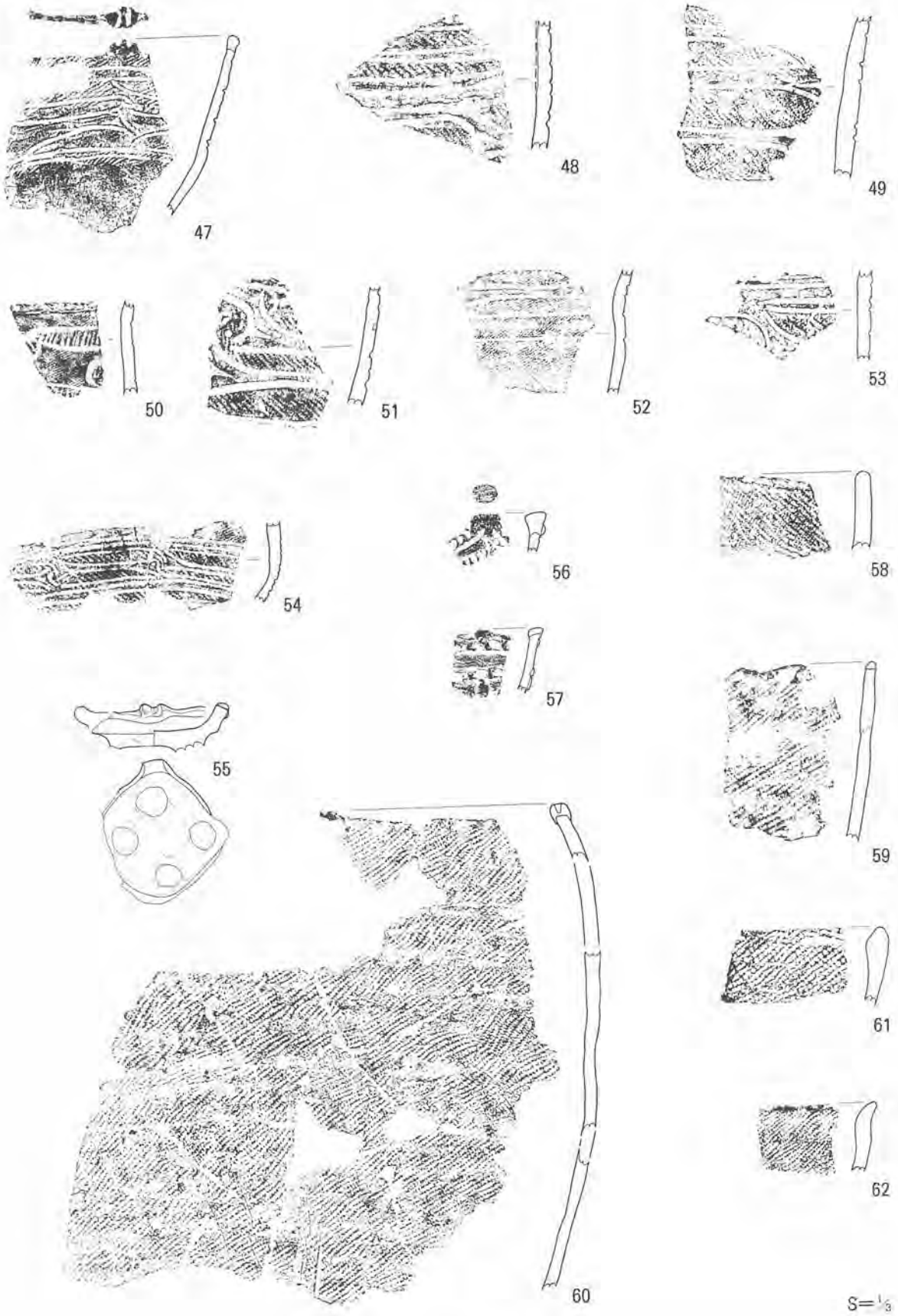
土器に対して石器・石製品の出土量は大コンテナ0.5箱ほどと極端に少ないのが特徴である。そのほとんどが剥片であり、一部に二次加工が見られるものがある。その他では凹石、磨製石斧等が出土している。また、石製品ではペンダント型の未製品１点（№250）と円盤状石製品２点（№251、１点は不掲載）が出土している。ペンダント型の未製品は表と裏から孔をあけようと試みたが位置がずれてしまったため、孔を貫通させずに製作の途中で廃棄してしまった可能性が考えられる。



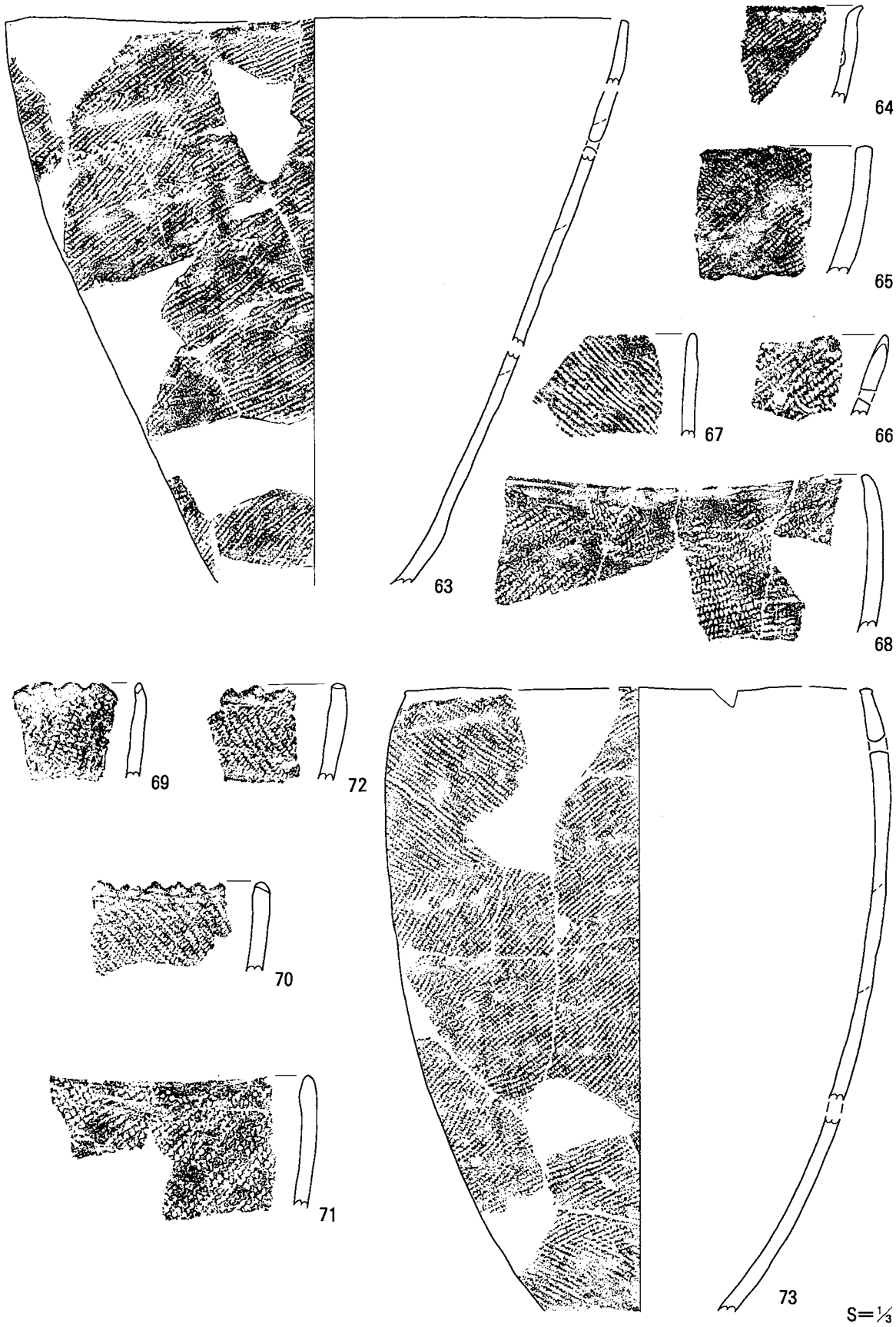
第10図　遺物包含層出土土器(1)



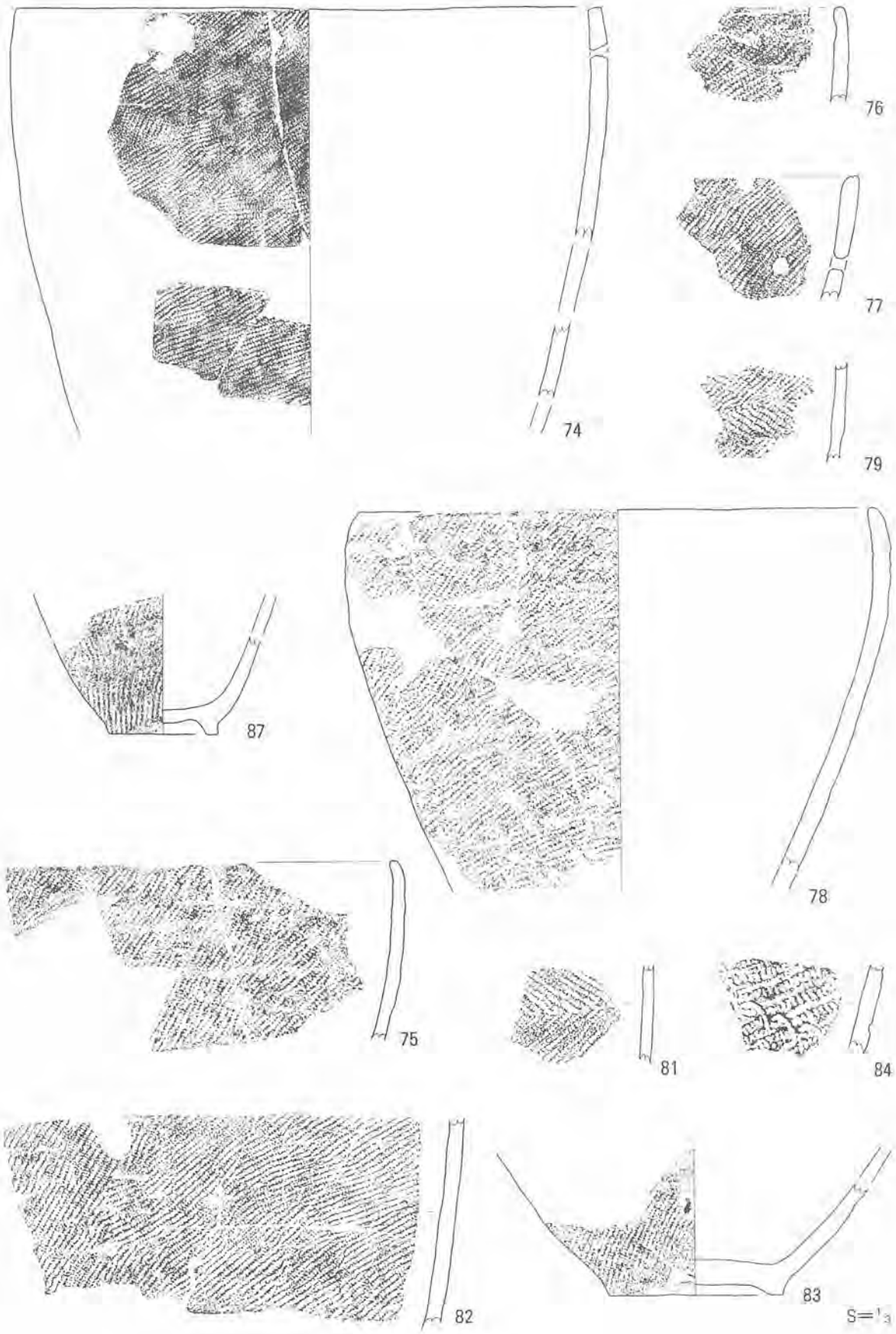
第11図　遺物包含層出土土器(2)



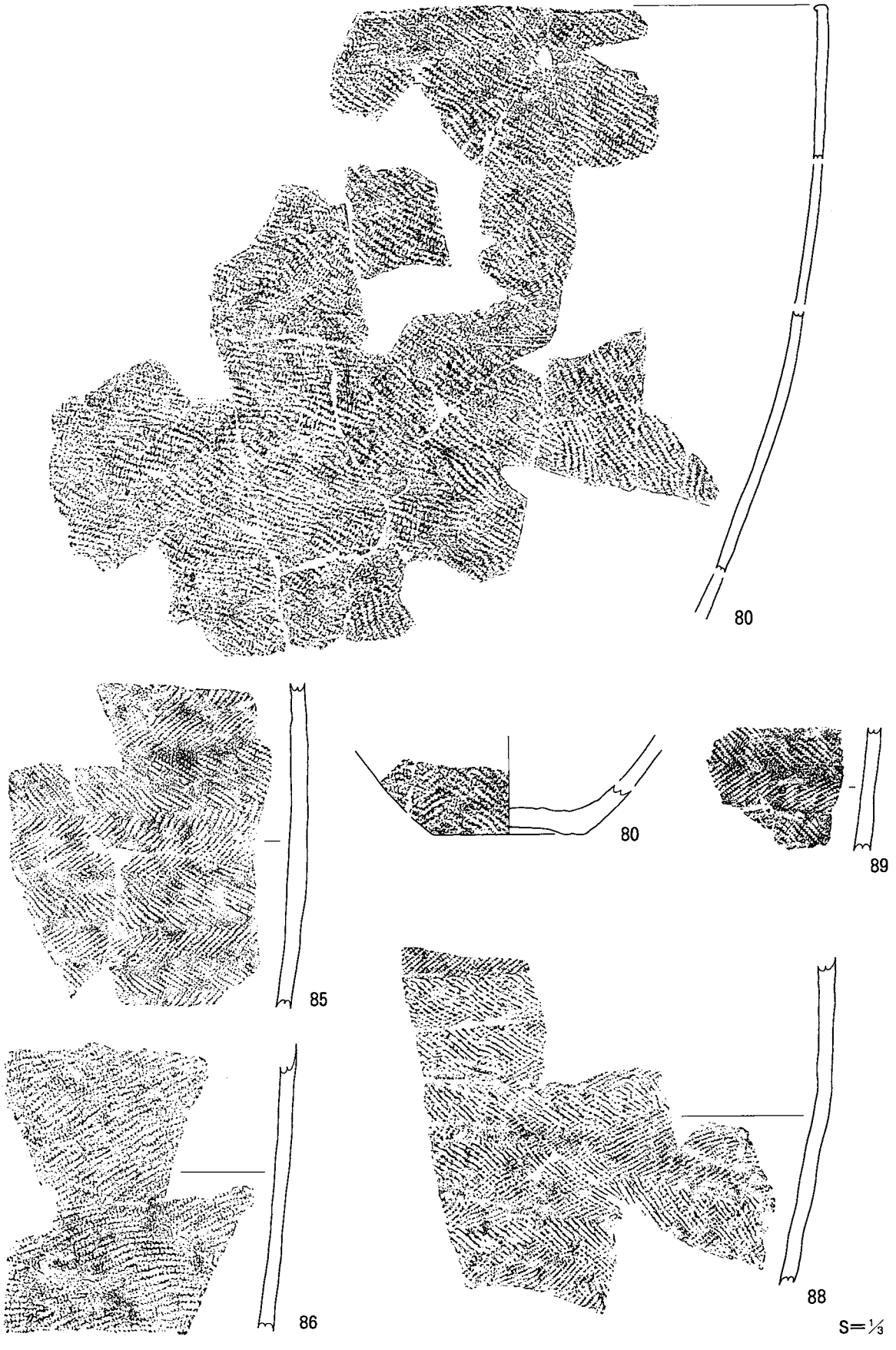
第12図　遺物包含層出土土器(3)



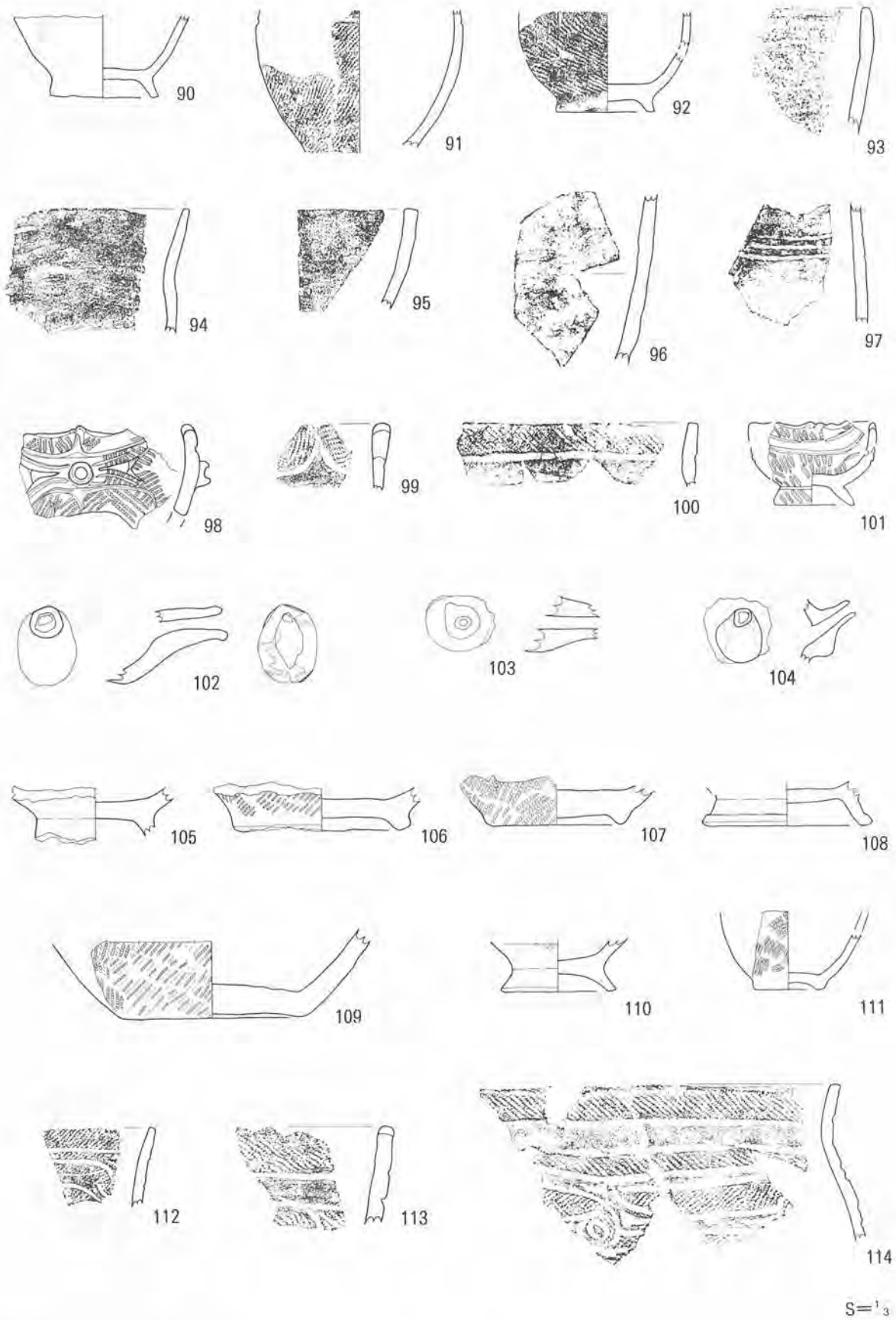
第13図　遺物包含層出土土器(4)



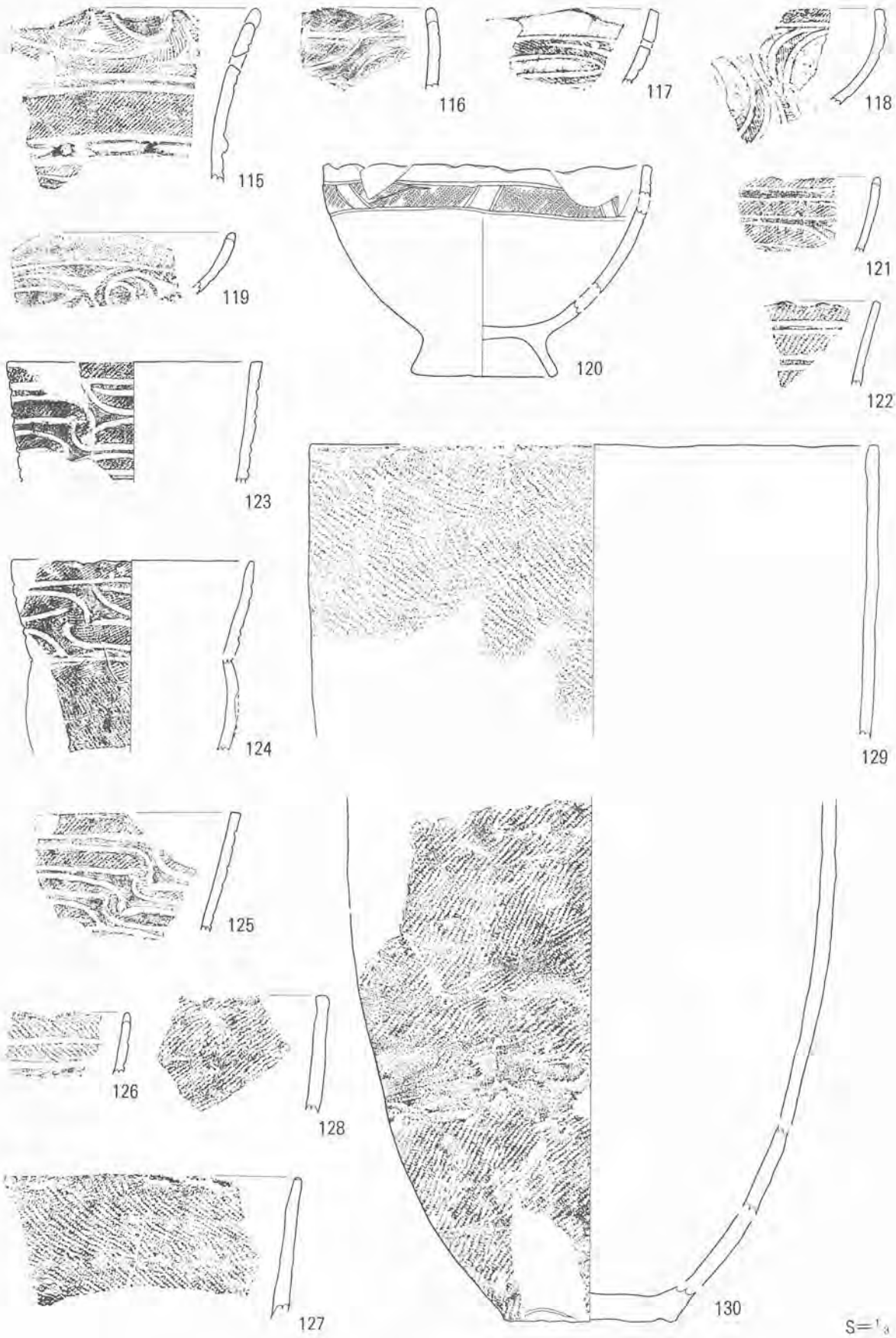
第14図　遺物包含層出土土器(5)



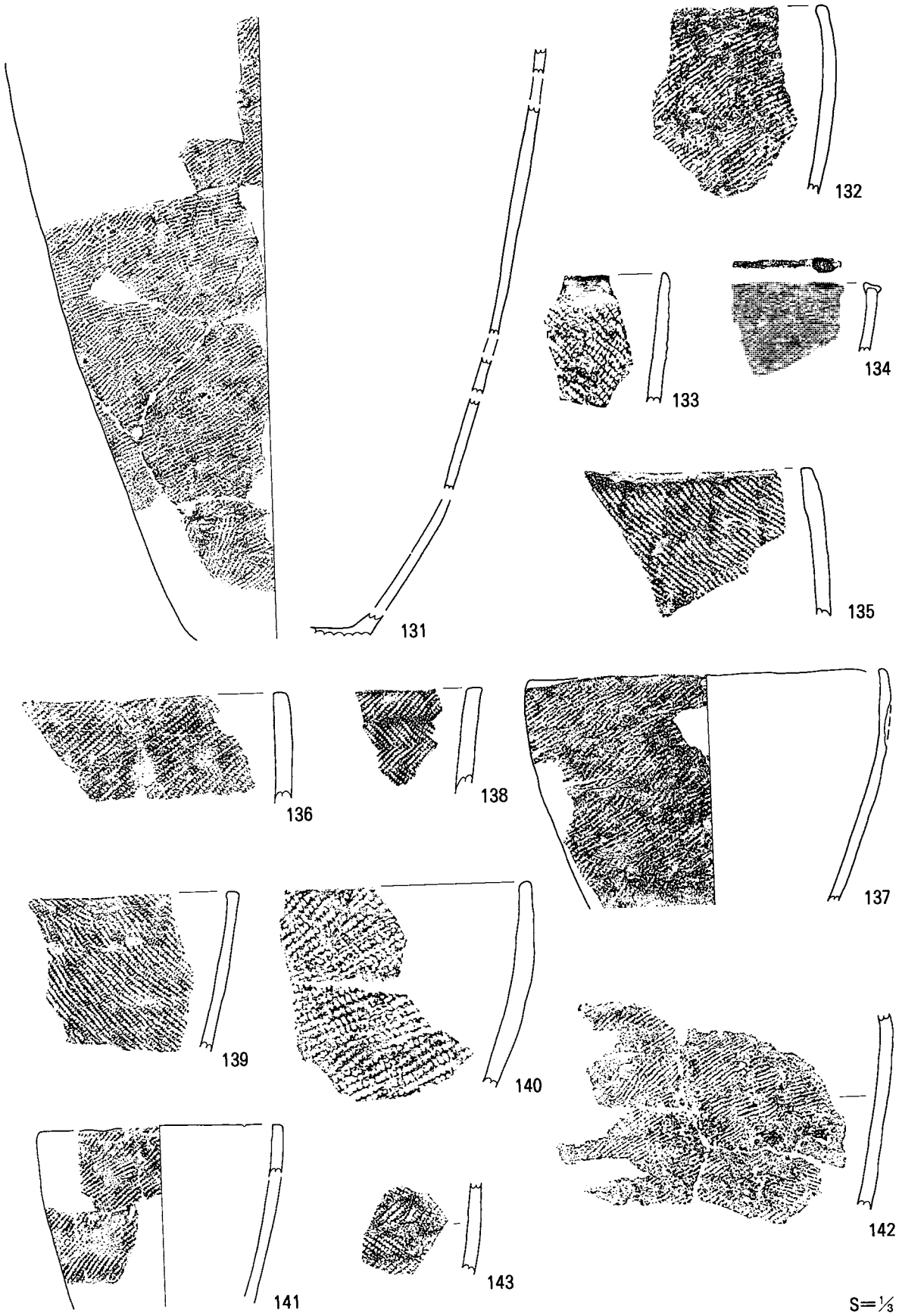
第15図　遺物包含層出土土器(6)



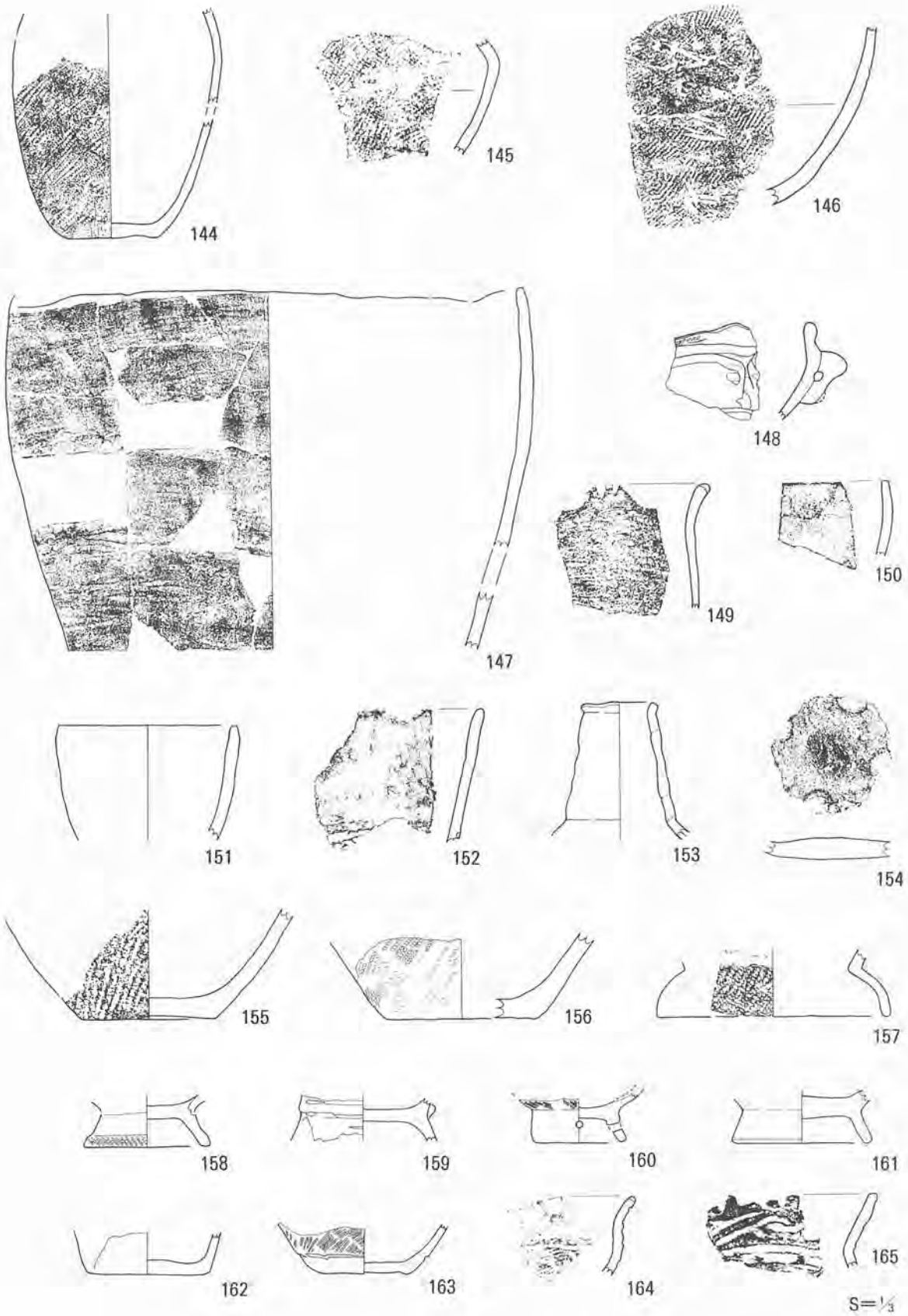
第16図　遺物包含層出土土器(7)



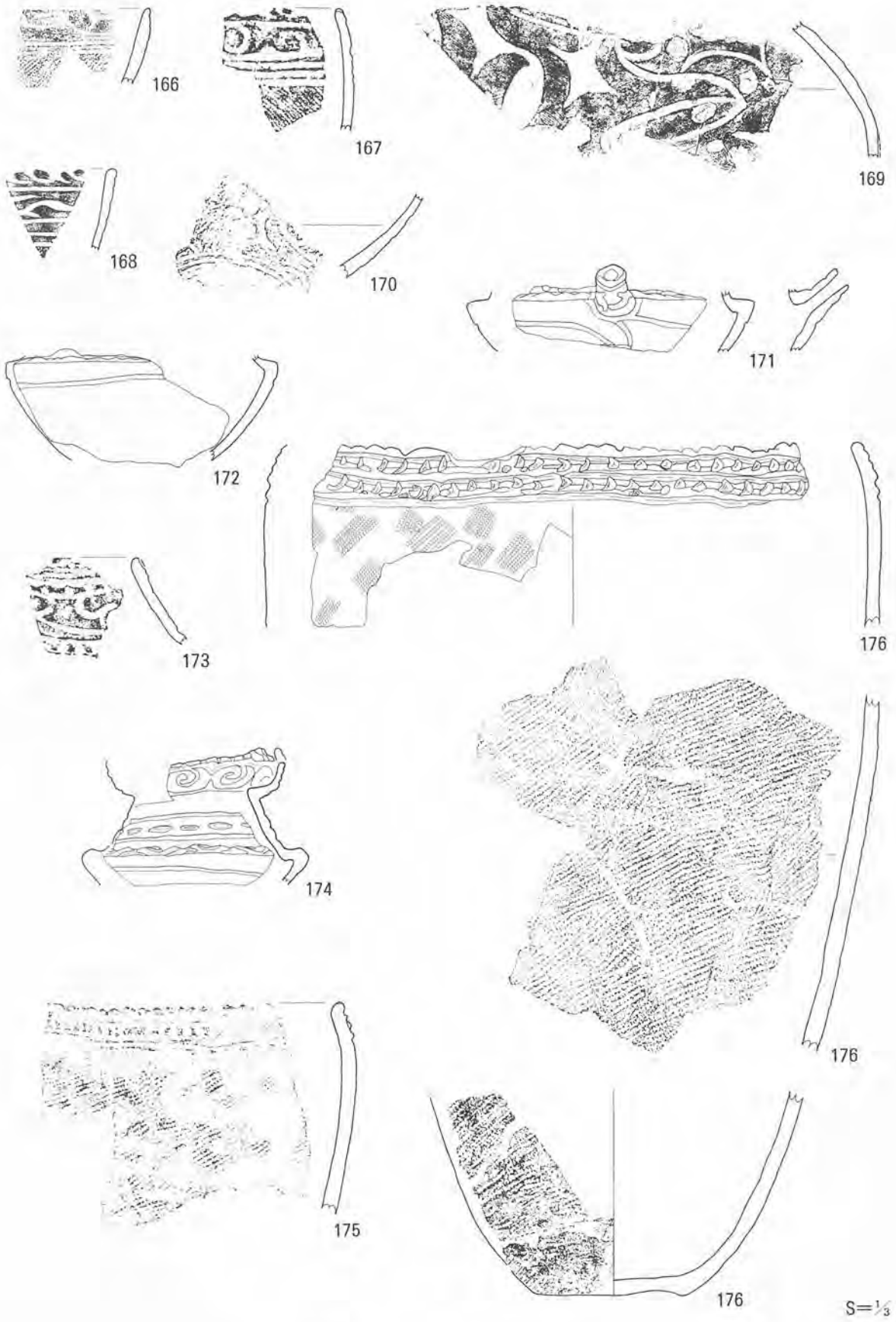
第17図　遺物包含層出土土器(8)



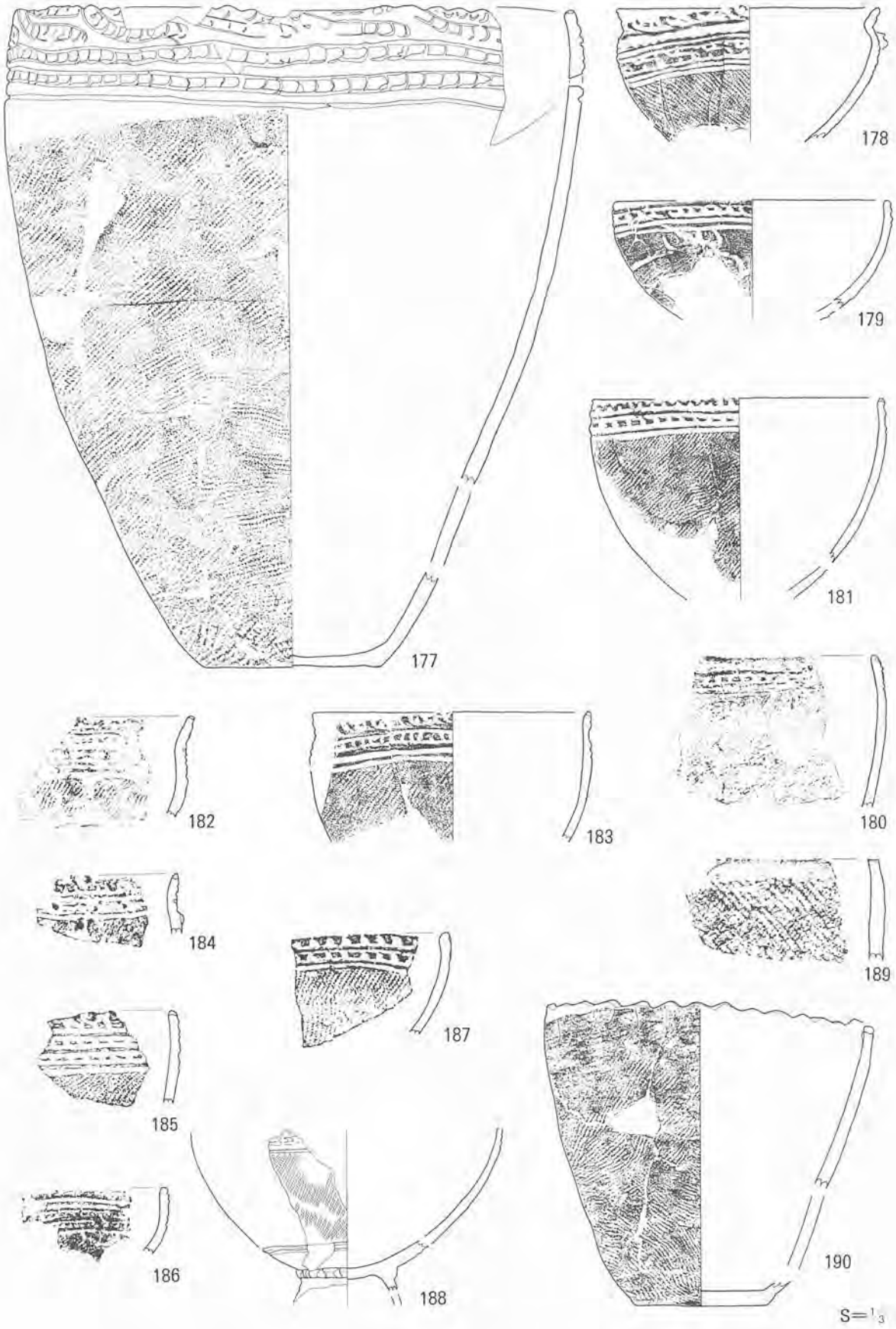
第18図　遺物包含層出土土器(9)



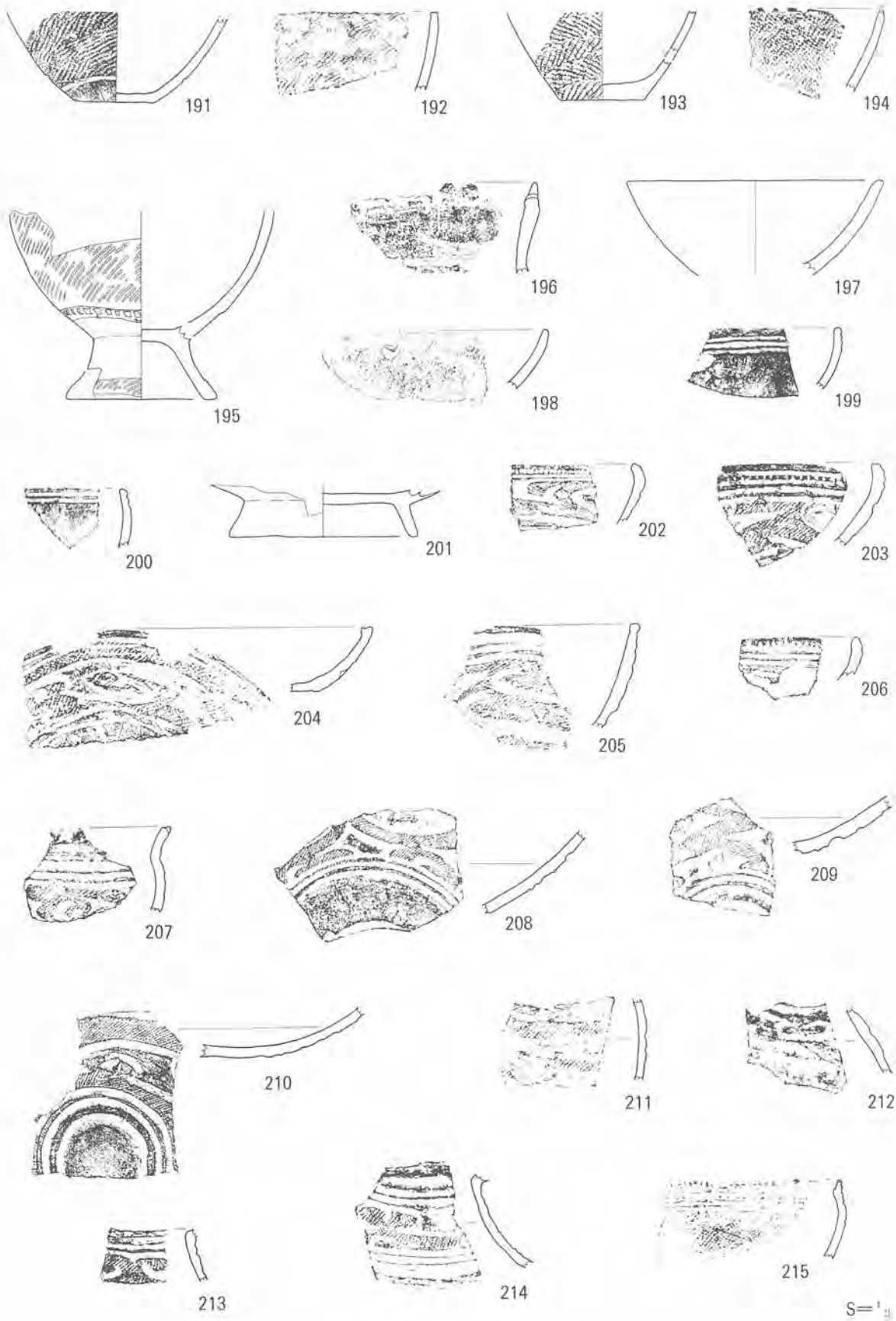
第19図　遺物包含層出土土器(10)



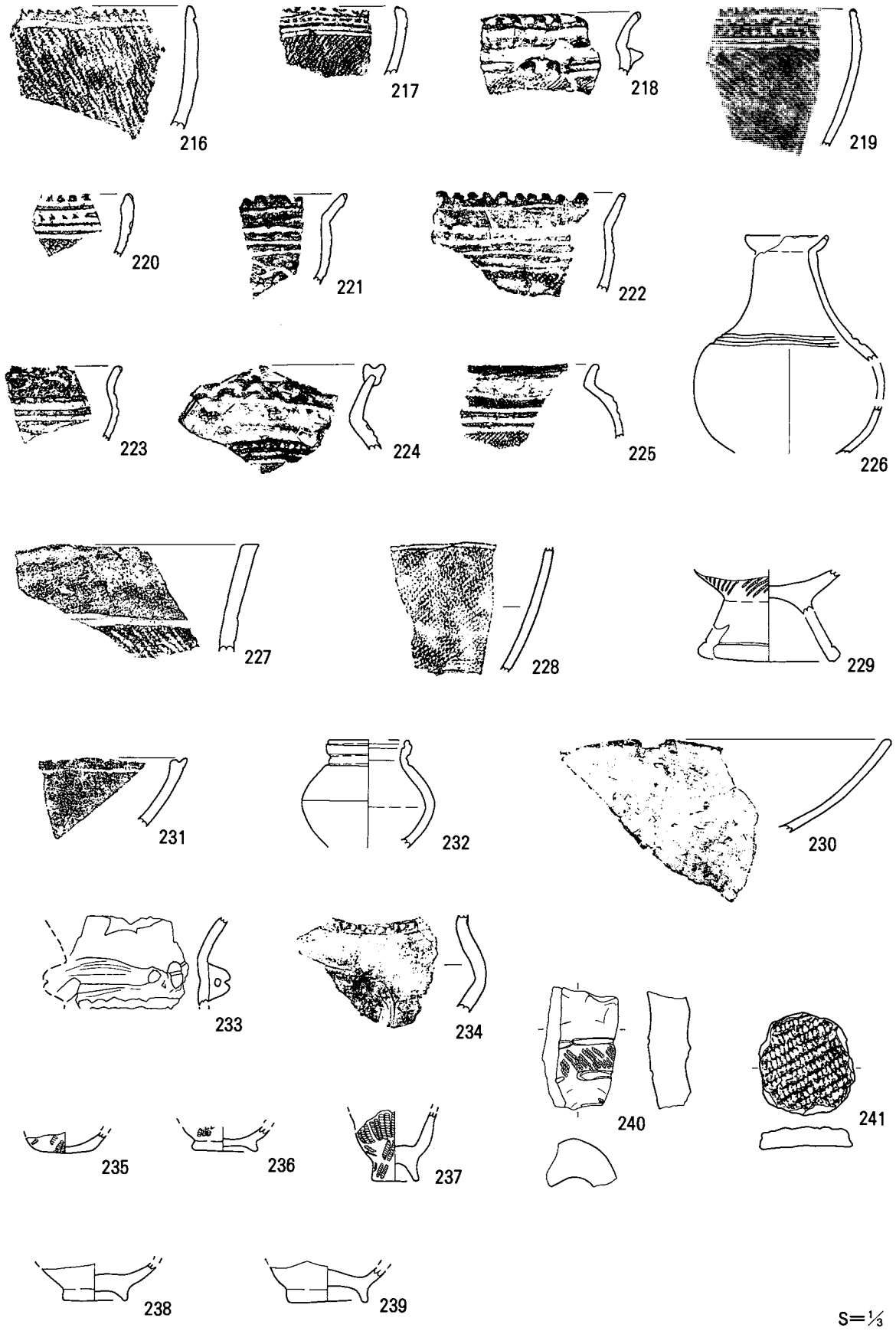
第20図　遺物包含層出土土器(11)



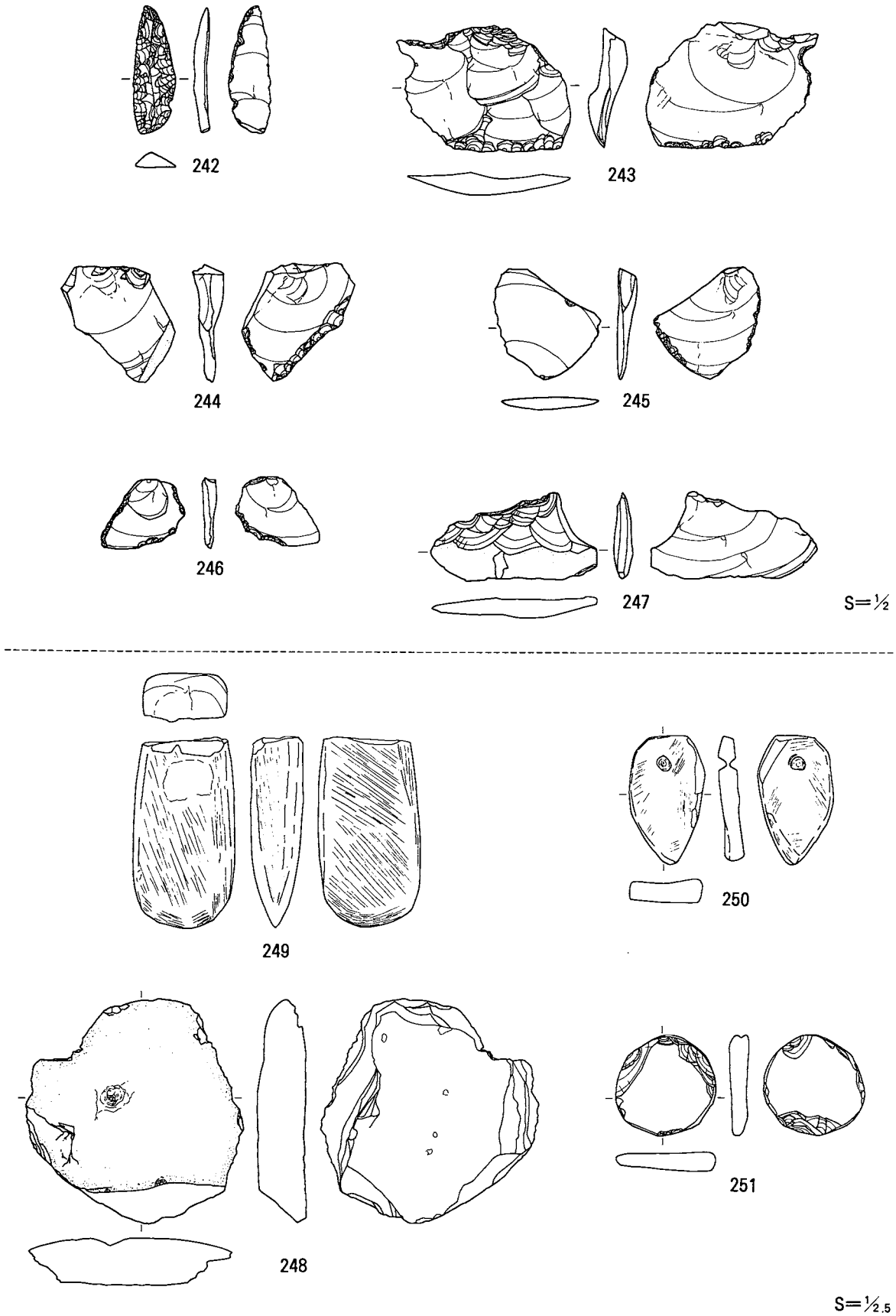
第21図　遺物包含層出土土器(12)



第22図　遺物包含層出土土器(13)



第23図　遺物包含層出土土器(14)・土製品



第24図　遺物包含層出土石器・石製品

第４表　野尻Ⅲ遺跡土器観察表(1)

番号	出土地点	器種	部位	原体	文様の特徴	分類	番号
1	ⅢＡ２ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	折り返し口縁　平行沈線	1	1
2	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	折り返し口縁　地文のみ	1	2
3	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部		竹管による押圧痕	1	3
4	ⅣＡ２ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部		折り返し口縁	1	4
5	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＲＬ	沈線文	1	5
6	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＬＲ	沈線文	1	6
7	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	底部		網代痕　指紋	1	7
8	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	深鉢	底部	ＲＬ	網代痕	1	8
9	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	深鉢	底部		網代痕	1	9
10	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	深鉢	底部		網代痕	1	10
11	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	原体圧痕	2	11
12	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ　口唇部施文	2	12
13	ⅢＡ４ａ　Ⅰ～Ⅱ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	平行沈線	2	13
14	ⅡＡ３ｂ～ⅡＡ４ａ　Ⅰ～Ⅱ層	鉢	口縁部	ＬＲ	原体圧痕（横位）３　スス付着	2	14
15	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	壺	略完形		耳付き（穿孔）　沈線文　底部付近に４単位の圧痕	2	15
16	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	深鉢	体部		原体圧痕（縦位）	2	16
17	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	体部	ＬＲ	沈線文	2	17
18	ⅣＡ２ａ　Ⅳ層	壺	体部		コブに渦巻き状の刺突列	2	18
19	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	深鉢	底部		原体圧痕	2	19
20	ⅢＡ２ａ～ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部		沈線間連続刻目　入組帯状文	３ａ	20
21	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	口～頸部		口唇部突起　押圧状刻目４	３ａ	21
22	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部突起（刻み有り）　上部に押圧痕２	３ａ	22
23	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口～体部	ＬＲ	口唇部コブ（２個１単位？）　口縁部刺突列３段	３ａ	23
24	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部		口唇部連続刻目　連続する押圧状刻目	３ａ	24
25	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部		口唇部突起（刻み目）平行沈線間押圧状刻目（半さい竹管）	３ａ	25
26	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部		平行沈線間押圧状刻目	３ａ	26
27	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部		波状縁　平行沈線　連続刻目２	３ａ	27
28	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部		口唇部突起　平行沈線間押圧状刻目	３ａ	28
29	ⅢＡ３ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部		弁状突起　ハ字沈線　連続する押圧状刻目	３ａ	29
30	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部		連続刻目２	３ａ	30
31	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＬＲ	沈線間に押圧状刻目　入組帯状文	３ａ	31
32	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	体部		沈線間に押圧状刻目　Ｓ字状の連続沈線	３ａ	32
33	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	Ｌ	２本の沈線間に押圧状刻目	３ａ	33
34	ⅢＡ３ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	体部		刺突文　曲線状沈線	３ａ	34
35	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	深鉢	体部		横位の隆帯に横長列点文	３ａ	35
36	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	体部		刺突文	３ａ	36
37	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	波状口縁　口唇部刻目　入組帯状文	３ｂ	37
38	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ？	口唇部突起　ハ字沈線　三角彫去　横位沈線	３ｂ	38

第５表　野尻Ⅲ遺跡土器観察表(2)

番号	出土地点	器種	部位	原体	文様の特徴	分類	番号
39	ⅢＡ３ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部突起　三角彫去　平行沈線	３ｂ	39
40	ⅢＡ３ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部突起（刻み有り）　平行沈線　平行帯状文　入組帯状文	３ｂ	40
41	ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部突起（刺突有り）　平行沈線　入組帯状文	３ｂ	41
42	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	口唇部突起（刻み有り）　横位沈線　横長列点文　入組帯状文？	３ｂ	42
43	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部突起（刻み有り）　平行帯状文　入組帯状文	３ｂ	43
44	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部突起　横位沈線　入組帯状文	３ｂ	44
45	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部突起（肥厚）　入組帯状文	３ｂ	45
46	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	浅鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部突起（刻み目）　横位沈線　入組帯状文	３ｂ	46
47	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	Ｌ	口唇部突起（刻み有り）　入組文	３ｂ	47
48	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＲＬ	入組帯状文	３ｂ	48
49	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＲＬ	入組帯状文　焼成後穿孔	３ｂ	49
50	ⅣＡ２ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	Ｌ	入組帯状文　櫛歯状刻目	３ｂ	50
51	ⅣＡ２ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＲＬ	入組帯状文　穿孔	３ｂ	51
52	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	体部	ＬＲ	入組帯状文	３ｂ	52
53	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	体部	ＬＲ	押位沈線　入組帯状文	３ｂ	53
54	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	壺	体部	ＲＬ	疑似口縁　平行沈線　入組帯状文	３ｂ	54
55	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	脚付皿	口～体～脚部		４脚　口唇部コブ付き	３ｃ	55
56	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部		弁状突起　貼コブ　刺突状刻目	３ｃ	56
57	ⅢＡ３ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部		突起　貼コブ　刺突状刻目	３ｃ	57
58	ⅡＡ３ｂ～ⅡＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	地文のみ　平口縁	３ｄ	58
59	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ　口唇部刻目	３ｄ	59
60	ⅢＡ２ａ～ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	口～体部	ＬＲ	地文のみ　口唇部突起	３ｄ	60
61	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	？	地文のみ　口唇部内傾肥厚	３ｄ	61
62	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	Ｌ	地文のみ　口縁上部やや外反	３ｄ	62
63	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	略完形	ＬＲ	地文のみ　平口縁　輪積み痕　焼成後穿孔	３ｄ	63
64	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ　スス付着	３ｄ	64
65	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ　平口縁	３ｄ	65
66	ⅢＡ３ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ　焼成前穿孔	３ｄ	66
67	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ	３ｄ	67
68	ⅢＡ５ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ	３ｄ	68
69	ⅣＡ１ａ　Ⅰ～Ⅱ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ　口唇部連続刻目	３ｄ	69
70	ⅣＡ１ａ　Ⅰ～Ⅱ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	地文のみ　口唇部連続刻目	３ｄ	70
71	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ　口唇部内傾肥厚	３ｄ	71
72	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	地文のみ　口唇部連続刻目	３ｄ	72
73	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	略完形	ＬＲ・ＲＬ	地文のみ　平口縁　焼成後穿孔	３ｄ	73
74	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口～体部	ＬＲ	地文のみ　平口縁	３ｄ	74
75	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ	３ｄ	75
76	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ	３ｄ	76

第６表　野尻Ⅲ遺跡土器観察表(3)

番号	出土地点	器種	部位	原体	文様の特徴	分類	番号
77	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ　スス付着　焼成後穿孔	３ｄ	77
78	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	口～体部	ＬＲ	地文のみ　平口縁	３ｄ	78
79	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＬＲ・ＲＬ	非結束羽状縄文	３ｄ	79
80	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	深鉢	体・底部	ＲＬ	地文のみ　平口縁	３ｄ	80
81	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＬＲ・ＲＬ	非結束羽状縄文	３ｄ	81
82	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＬＲ	地文のみ	３ｄ	82
83	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	体～底部	ＬＲ	地文のみ	３ｄ	83
84	ⅢＡ３ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＬＲ		３ｄ	84
85	ⅢＡ３ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＬＲ・ＲＬ	非結束羽状縄文	３ｄ	85
86	ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＬＲ	地文のみ	３ｄ	86
87	ⅢＡ５ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	体～底部	ＬＲ	地文のみ	３ｄ	87
88	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＬＲ・Ｒ	結束羽状縄文	３ｄ	88
89	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＬＲ・ＲＬ	非結束羽状縄文	３ｄ	89
90	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	台付鉢	体～脚部	ＬＲ	地文のみ	３ｄ	90
91	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	鉢	体部	ＬＲ	横位沈線	３ｄ	91
92	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	体～底部	ＲＬ	地文のみ	３ｄ	92
93	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部		無文　スス付着	３ｅ	93
94	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口～頸部		無文　口縁部外反	３ｅ	94
95	ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部		無文　平口縁	３ｅ	95
96	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	深鉢	体部		無文	３ｅ	96
97	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	壺	頸部		３本の平行沈線	３ｅ	97
98	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	香炉	天井部？	ＲＬ？	沈線文　三角透かし窓　ボタン状コブ	３ｆ	98
99	ⅢＡ２ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部肥厚　ハ字沈線	３ｆ	99
100	ⅣＡ２ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	平行帯状文　横位沈線	３ｆ	100
101	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	台付浅鉢？	口～体～脚部	ＲＬ	沈線文	３ｆ	101
102	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	注口土器	注口部			３ｆ	102
103	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	注口土器	注口部			３ｆ	103
104	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	注口土器	注口部			３ｆ	104
105	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	底部		無文？	３ｆ	105
106	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	底部	ＬＲ	地文のみ	３ｆ	106
107	ⅢＡ３ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	底部	ＬＲ	地文のみ	３ｆ	107
108	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	底部		地文のみ	３ｆ	108
109	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	台付鉢	脚部		脚部無文	３ｆ	109
110	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	台付鉢	脚部		無文？	３ｆ	110
111	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	鉢	体～底部	ＬＲ	地文のみ	３ｆ	111
112	ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	横位沈線　入組帯状文	４ａ	112
113	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	小波状縁　横位沈線　入組帯状文　平行帯状文	４ａ	113
114	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ・ＲＬ	平行帯状文　入組帯状文	４ａ	114

第７表　野尻Ⅲ遺跡土器観察表(4)

番号	出土地点	器種	部位	原体	文様の特徴	分類	番号
115	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	波状縁　平行沈線　入組帯状文？　横長列点文　焼成前穿孔	４ａ	115
116	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	波状縁　横位沈線　入組帯状文	４ａ	116
117	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	波状縁　横位沈線　磨消縄文	４ａ	117
118	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	口縁部平行帯状文　横位沈線　磨消縄文	４ａ	118
119	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	波状縁　横位沈線　磨消縄文	４ａ	119
120	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	台付鉢	完形	ＬＲ	口縁部押圧状圧痕　平行帯状文	４ａ	120
121	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＬＲ	波状縁　横位沈線　入組帯状文	４ａ	121
122	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＬＲ	波状縁　平行沈線２組　平行帯状文	４ａ	122
123	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	口～体部	ＬＲ	平口縁　入組帯状文	４ａ	123
124	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	口～体部	ＬＲ・ＲＬ	波状縁　入組帯状文	４ａ	124
125	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＬＲ	横位沈線　入組帯状文	４ａ	125
126	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＲＬ	波状縁　横位沈線　平行帯状文	４ａ	126
127	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	深鉢	口～体部	ＲＬ	地文のみ　平口縁	４ｂ	127
128	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	Ｌ	地文のみ　平口縁	４ｂ	128
129	ⅢＡ２ａ～ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	地文のみ　口唇部押圧状圧痕	４ｂ	129
130	ⅢＡ２ａ～ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	略完形	ＲＬ	地文のみ　スス付着	４ｂ	130
131	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	略完形	ＬＲ	地文のみ　スス付着	４ｂ	131
132	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	Ｌ	地文のみ　スス付着	４ｂ	132
133	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ	４ｂ	133
134	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口～頸～体部	Ｌ	地文のみ　口唇部突起　平口縁	４ｂ	134
135	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	地文のみ　スス付着	４ｂ	135
136	ⅢＡ３ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ　平口縁	４ｂ	136
137	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口～体部	ＬＲ	地文のみ　平口縁	４ｂ	137
138	Ⅳａ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ・ＲＬ	非結束羽状縄文　平口縁	４ｂ	138
139	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	地文のみ　平口縁	４ｂ	139
140	ⅢＡ３ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口～体部	ＬＲ	地文のみ　平口縁	４ｂ	140
141	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	鉢	口～体部	ＬＲ	地文のみ　平口縁	４ｂ	141
142	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＬＲ	地文のみ　スス付着	４ｂ	142
143	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	体部	ＬＲ・ＲＬ	非結束羽状縄文	４ｂ	143
144	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	鉢	体～底部	ＬＲ	地文のみ	４ｂ	144
145	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	鉢？	体部	ＬＲ	地文のみ	４ｂ	145
146	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	壺	体部	ＬＲ	地文のみ	４ｂ	146
147	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口～体部		無文	４ｃ	147
148	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部		口唇部突起　横位沈線　耳付き（穿孔）	４ｃ	148
149	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部		無文　突起（刻み有り）	４ｃ	149
150	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部		無文　平口縁	４ｃ	150
151	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	口～体部		無文	４ｃ	151
152	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	壺	口～体部		無文　頸部に平行沈線と刺突	４ｃ	152

第８表　野尻Ⅲ遺跡土器観察表(5)

番号	出土地点	器種	部位	原体	文様の特徴	分類	番号
153	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	壺	口～頸部		無文	４ｃ	153
154	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	深鉢	底部		指押圧状圧痕４	４ｄ	154
155	ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	深鉢	底部	ＬＲ	地文のみ	４ｄ	155
156	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	底部	ＬＲ？	地文のみ	４ｄ	156
157	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	台付鉢	脚部	ＬＲ	地文のみ	４ｄ	157
158	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	台付鉢	脚部	ＲＬ	脚部下部に施文	４ｄ	158
159	ⅣＡ１ａ　Ⅰ～Ⅱ層	台付鉢	脚部		小突起（コブ？）	４ｄ	159
160	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	台付鉢	脚部		脚部無文	４ｄ	160
161	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	台付鉢	脚部		脚部無文	４ｄ	161
162	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	鉢	底部		無文（研磨）	４ｄ	162
163	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	底部	ＬＲ	体部下部横位沈線	４ｄ	163
164	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	浅鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部小刻目　三叉文	５ａ	164
165	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	口～頸部		口唇部Ｂ突起　三叉文	５ａ	165
166	ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＬＲ	平行沈線　三叉文	５ａ	166
167	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＲＬ	口唇部Ｂ突起　浮き彫り状Ｘ字文	５ａ？	167
168	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部Ｂ突起　三叉文	５ａ	168
169	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	壺	体部		剣菱文　同一個体の別破片に赤色顔料付着	５ａ	169
170	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	浅鉢	体部	ＬＲ	横位沈線　磨消縄文	５ａ	170
171	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	注口土器			横位沈線　連珠文	５ａ	171
172	ⅢＡ４ａ　Ⅰ～Ⅱ層	注口土器			横位沈線	５ａ	172
173	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	注口土器			浮き彫り的三叉文系文様？	５ａ	173
174	ⅣＡ２ａ　Ⅳ層	注口	略完形		口唇部突起　口縁部連続刻目　浮彫（Ｃ字状・Ｘ字状文）　横長列点文	５ａ	174
175	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	口～体部	ＬＲ	口唇部刻　横位沈線　段違いの刻目	５ｂ	175
176	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口～体～底部	ＬＲ	口唇部Ｂ突起連続刻目　口縁部連続刻目２段	５ｂ	176
177	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	完形	ＬＲ	羊歯状文　焼成後穿孔２	５ｂ	177
178	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	浅鉢	略完形	ＲＬ	装飾口唇　羊歯状文　連珠文　平行沈線	５ｂ	178
179	ⅢＡ２ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	浅鉢	略完形	ＬＲ	平行沈線　連珠文	５ｂ	179
180	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	Ｌ	平行沈線　羊歯状文？	５ｂ	180
181	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	鉢	略完形	ＬＲ	口唇部連続小刻目　横位沈線　連珠文	５ｂ	181
182	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＬＲ	羊歯状文　平行沈線　横長列点文	５ｂ	182
183	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	鉢	口～体部	ＬＲ	口唇部Ｂ突起　平行沈線　連珠文状連続刻目	５ｂ	183
184	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	Ｌ？	口唇部Ｂ突起　口縁部連続刻目	５ｂ	184
185	ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部Ｂ突起　羊歯状文　横位沈線	５ｂ	185
186	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部		羊歯状文　平行沈線	５ｂ	186
187	ⅣＡ２ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＬＲ	連珠文　横位沈線	５ｂ	187
188	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	台付鉢	体～脚部	ＬＲ	体部下部平行沈線　脚部連珠文	５ｂ	188
189	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	平口縁　スス付着	５ｃ	189
190	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	完形	Ｌ	小波状縁　口縁部無文帯	５ｃ	190

第９表　野尻Ⅲ遺跡土器観察表(6)

番号	出土地点	器種	部位	原体	文様の特徴	分類	番号
191	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	鉢	体～底部	ＬＲ	地文　横位沈線（以下研磨）	５ｃ	191
192	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ　平口縁	５ｃ	192
193	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	体～底部	ＬＲ・ＲＬ	非結束羽状縄文	５ｃ	193
194	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＬＲ	地文のみ　口唇部連続小刻目	５ｃ	194
195	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	台付鉢	体～脚部	ＬＲ	体部下部平行沈線　連続刻目	５ｃ	195
196	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部		無文　Ｂ突起　口縁上端刻目	５ｄ	196
197	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	浅鉢	口～体部		無文	５ｄ	197
198	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	浅鉢	口縁部		無文	５ｄ	198
199	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	浅鉢	口縁部		口縁部平行沈線	５ｄ	199
200	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	浅鉢	口縁部		口縁部平行沈線	５ｄ	200
201	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	台付鉢	脚部		脚部無文	５ｄ	201
202	ⅢＡ３ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	浅鉢	口縁部	ＲＬ	口縁上部連続刻目　平行沈線　雲形文	６ａ	202
203	ⅢＡ３ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	浅鉢	口縁部	ＲＬ	平行沈線　連続刻目　雲形文	６ａ	203
204	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	浅鉢	口～体部	ＬＲ	横位沈線　雲形文	６ａ	204
205	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	浅鉢	口縁部	Ｌ？	平行沈線　雲形文	６ａ	205
206	ⅣＡ２ａ　Ⅳ層	浅鉢	口縁部		口縁上部連続刻目　平行沈線３	６ａ	206
207	ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＲＬ	口唇部突起　雲形文	６ａ	207
208	ⅣＡ１ａ　Ⅰ～Ⅱ層	皿	体部	ＬＲ	平行沈線　雲形文	６ａ	208
209	ⅣＡ１ａ　Ⅰ～Ⅱ層	皿	体部	ＬＲ	平行沈線　雲形文	６ａ	209
210	ⅣＡ２ａ　Ⅳ層	皿	体部	ＬＲ	平行沈線　雲形文	６ａ	210
211	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	浅鉢	体部	ＬＲ	雲形文	６ａ	211
212	ⅣＡ２ａ　Ⅳ層	壺	体部		雲形文	６ａ	212
213	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	注口土器		ＬＲ	横位沈線　雲形文	６ａ	213
214	ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	注口土器		ＬＲ	横位沈線　雲形文	６ａ	214
215	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部Ｂ突起連続小刻目　平行沈線　連続刻目	６ｂ	215
216	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＲＬ	口唇部突起連続小刻目　横位沈線	６ｂ	216
217	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＲＬ	口唇部連続小刻目　口唇部連続刻目　平行沈線	６ｂ	217
218	ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部突起　頸部突起	６ｂ	218
219	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＲＬ	口唇部連続小刻目　口唇部連続刻目２　平行沈線	６ｂ	219
220	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部	ＬＲ	口唇部連続小刻目　口唇部連続刻目　平行沈線	６ｂ	220
221	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部		口唇部連続刻目　平行沈線	６ｃ	221
222	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	鉢	口～頸部	ＬＲ	口唇部連続刻目　平行沈線	６ｃ	222
223	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	鉢	口縁部		口縁部突起　平行沈線　口縁内面沈線１（スス付着）	６ｃ	223
224	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	壺	口～頸部		口唇部突起　頸部連続刻目　平行沈線	６ｃ	224
225	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	壺	口縁部	ＬＲ？	横位沈線３	６ｃ	225
226	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	壺	完形		平行沈線	６ｃ	226
227	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	深鉢	口縁部	ＲＬ	平口縁　口縁部無文帯　横位沈線	６ｄ	227
228	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	台付鉢？	体部	ＬＲ	横位沈線	６ｄ	228

第10表　野尻Ⅲ遺跡土器観察表(7)

番号	出土地点	器種	部位	原体	文様の特徴	分類	番号
229	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	台付鉢	体～脚部	ＬＲ	脚部横位沈線	６ｄ	229
230	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	皿	口縁部		無部	６ｅ	230
231	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	浅鉢	口縁部		口唇部段	６ｅ	231
232	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	壺	口～体部		口縁部横位沈線　無文	６ｅ	232
233	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	壺	頸部		無文　粗雑な２本の隆帯と橋状の突起（刻み有り）	６ｅ	233
234	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	壺	頸～体部		頸部連続刺突　体部無文	６ｅ	234
235	ⅢＡ３ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	ミニチュア土器	底部		地文のみ		235
236	ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	ミニチュア土器	底部		地文のみ		236
237	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	ミニチュア土器	体～底部	ＬＲ	地文のみ		237
238	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	ミニチュア土器？	底部		無文		238
239	ⅢＡ５ａ～ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	ミニチュア土器？	底部		無文		239

第11表　土製品観察表１：土偶

番号	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(ｇ)	部位	つくり	文様等	時期
240	ⅢＡ３ａ～ⅢＡ４ａ　Ⅳ層	63	40	20	58.6	脚部又は胴部	中空	ＲＬ縄文　平行沈線	縄文時代後期中～後葉

第12表　土製品観察表２：土製円盤

番号	出土地点	長径(mm)	短径(mm)	厚さ(mm)	重さ(ｇ)	文様等	周辺加工
241	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	53		9	27.8	ＬＲ縄文	打欠

第13表　野尻Ⅲ遺跡　石器・石製品観察表

番号	器　　種	出　土　地　点	長さmm	幅mm	厚さmm	質量g	石　　質	備　　考
242	石鏃	ⅡＡ３ｂ～ⅡＡ４ｂ　Ⅰ～Ⅱ層	44	15	6	3.0	頁岩（産地不明）	
243	石匙	ⅢＡ５ａ　Ⅳ層	44	60	10	20.1	頁岩（産地不明）	
244	剥片	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	40	39	11	8.3	頁岩（産地不明）	２次加工あり
245	剥片	ⅢＡ２ａ　Ⅳ層	38	37	7	6.8	頁岩（北上山地）	２次加工あり
246	剥片	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	24	30	5	2.6	赤色頁岩（北上山地）	２次加工あり
247	剥片	ⅣＡ２ａ　Ⅳ層	30	57	7	10.9	頁岩（産地不明）	２次加工あり
248	凹石	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	194	188	42	1952.7	頁岩（産地不明）	
249	磨製石斧	ⅢＡ３ａ　Ⅳ層	83	44	23	148.5	ひん岩（北上山地）	
250	ペンダント型石製品	ⅣＡ１ａ　Ⅳ層	55	33	11	17.9	凝灰岩（奥羽山脈）	
251	円盤状石製品	Ⅳ層一括	43	43	8	23.5	頁岩（産地不明）	

Ⅴ　まとめ

ここでは今回の調査成果の概要について整理し、まとめとする。

1．遺跡の立地

野尻Ⅲ遺跡は、平糠川左岸の河岸段丘上に立地し、標高は270m前後である。現況は水田、畑地で、調査面積は1,125㎡、調査区の東側を平糠川が北流している。今回の調査は内容確認調査であり、遺構の検出状況およびその図化、ならびに遺物の出土状況の把握がその内容である。

2．検出された遺構

今回の調査で検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡１棟、土坑17基、柱穴状土坑19基である。

(1)　竪穴住居跡

石囲炉を伴うものが１棟検出されている。

〈位置〉調査区の西側、ⅢＡ１ａ区とⅢＡ２ａ区にまたがって位置している。

〈平面形〉ほぼ円形

〈規模〉2.96×2.74m

〈炉〉中央やや西よりに６個の礫を60×50cmの楕円形に配している。

〈時期〉遺構に伴う遺物が出土していないため詳細は不明であるが、周辺から出土した遺物から判断して縄文時代後期後葉～縄文時代晩期初頭と思われる。

(2)　土坑類

土坑は17基、柱穴状土坑は19基検出されており、以下のような特徴が見られる。

〈位置〉「ⅢＡ１ａ～ⅢＡ３ａ区」・「ⅣＡ１ａ～ⅣＡ４ｂ区」・「ＶＡ１ｂ～ＶＡ２ｂ区」と大きく３つの範囲に集中している。

〈層位〉「ⅢＡ１ａ～ⅢＡ３ａ区」の土坑類はⅤ層で検出され、「ⅣＡ１ａ～ⅣＡ４ｂ区」、「ＶＡ１ｂ～ＶＡ２ｂ区」の土坑類はⅧ層で検出されている。

〈時期〉いずれの土坑類にも遺物が伴わないため詳細は不明であるが、周辺から出土した遺物から判断して「ⅢＡ１ａ～ⅢＡ２ａ区」の土坑類は縄文時代後期後葉～縄文時代晩期初頭と思われる。また、「ⅣＡ２ａ～ⅣＡ３ａ区」、「ＶＡ１ｂ～ＶＡ２ｂ区」の土坑類は遺物が出土していないため詳細は不明であるが、層位から判断して「ⅢＡ１ａ～ⅢＡ２ａ区」のものより古くなると思われる。

3．出土遺物

今回出土した遺物は縄文土器、土製品、石器、石製品である。縄文土器は大コンテナ（T40：30×40×30cm）で約8.5箱出土している。時期は縄文時代中期後葉～縄文時代晩期中葉に属するものであるが、大部分は縄文時代後期後葉～縄文時代晩期初頭のものである。土製品は土偶の脚部もしくは胴部と思われるものが１点、土製円盤が１点のみである。一方、石器・石製品はあわせて大コンテナ約0.5箱と土器に比べて極端に出土量が少ない。

(1) 土器について

今回掲載した土器について簡潔にまとめると次のようになる。

・掲載点数（ミニチュア土器および土製品を除く）

縄文時代中期中葉～後葉…10点

縄文時代後期初頭～前葉…９点

縄文時代後期後葉～末葉…92点

縄文時代晩期初頭　　…52点

縄文時代晩期前葉　　…38点

縄文時代晩期中葉　　…33点

・器種

縄文時代中期中葉～後葉…深鉢

縄文時代後期初頭～前葉…深鉢・鉢・壺

（このうちNo.15は蛍沢式土器の影響が見られ、十腰内Ⅰ式よりやや古い時期のものと思われる。）

縄文時代後期後葉～末葉…深鉢・鉢・脚付皿・台付鉢・台付浅鉢・香炉・注口土器

縄文時代晩期初頭　　…深鉢・鉢・台付鉢・浅

縄文時代晩期前葉　　…深鉢・鉢・浅鉢・台付鉢・注口土器

縄文時代晩期中葉　　…深鉢・鉢・台付鉢・浅鉢・皿・壺・注口土器

ミニチュア土器およびそれに類すると思われるものは６点出土しているが、１点は破損が激しいため不掲載とした。掲載した５点の時期につてはNo.235が縄文時代晩期でNo.236～239は縄文時代後期と思われるが詳細は不明である。

(2) 石器・石製品について

出土した大コンテナ0.5箱のほとんどが剥片である。掲載したものの他にも二次加工の痕が確認できるものがあるが、完形品は見られない。何らかの理由によって製作途中で廃棄したものと思われるが詳細は不明である。石製品ではペンダント型の未製品と円盤状石製品が出土している。ペンダント型の未製品は孔が貫通しておらず、製作の途中で廃棄されたものと思われる。掲載した遺物の石質については赤色頁岩１（北上山地）、頁岩７（北上山地２，産地不明５）、凝灰岩１（奥羽山脈）、ヒン岩１（北上山地）となっている。詳細は第13表　石器・石製品観察表を参照していただきたい。

４．総括

ここでは調査結果を総括しておわりとしたい。

・１号竪穴住居跡を中心として半径５ｍ程の範囲内に遺構が集中しており、検出状況から判断するとⅢＡ１ａ区～ⅢＡ３ａ区の西側および東側に遺構が広がる可能性が考えられる。しかし、東側は段丘の縁の部分にあたり、平糠川にむかって比較的急に傾斜しているためむしろ西側の斜面側に広がる可能性の方が高いと思われる。

・ⅣＡ区、ＶＡ区で検出された土坑はその形状から陥し穴と思われ、この地域が狩猟域として利用されていた可能性が考えられる。

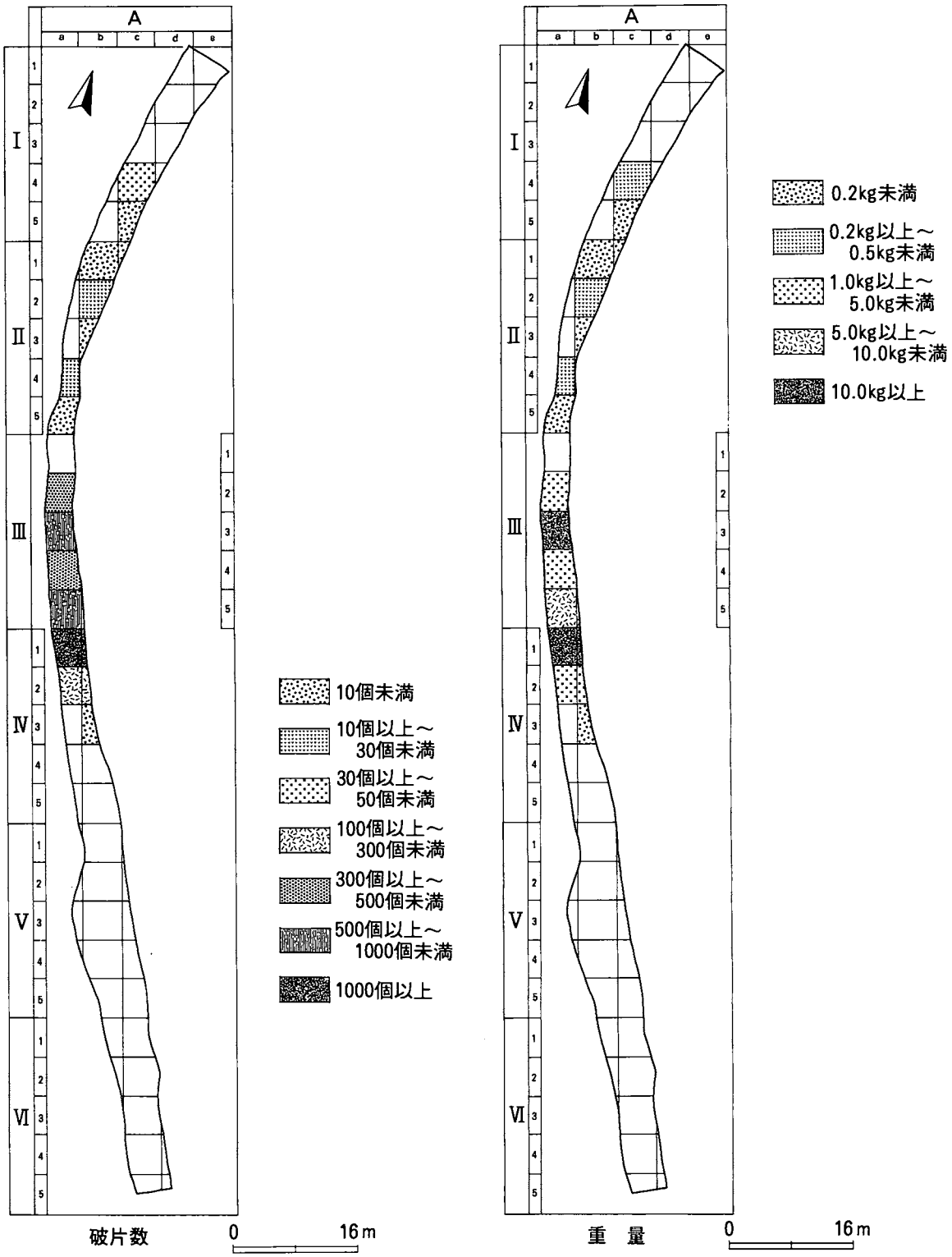
・「ⅢＡ２ａ～ⅣＡ１ａ区」という比較的限られた範囲から縄文時代後期後葉～縄文時代晩期初頭にかけての土器が、ある程度まとまって出土しており（出土破片数の約92.5％、全破片重量の約90.7％）、この区域の周辺、特に西側に位置する斜面側を中心に集落等が存在する可能性もある。

5．おわりに

野尻Ⅲ遺跡およびその周辺地域は縄文時代に狩猟域、住居域として利用されていた可能性が考えられるが、それは現在の地名からもうかがわれる。一戸町文化財調査報告書第35集「一戸町の遺跡（Ⅳ）」では『アイヌ語で「平」は「ヘイ」といい「水溜まり」を意味し、「糠」は「ヌカ」といい「高地」を意味し、「平糠」とは「水のある高地」となり、また、「大志田」とはアイヌ語で「オホン・ツシタ」と読み、「神々の産所・鮭の産卵場」という意味になるそうですから、昔は平糠川にも鮭が上がって来て大志田付近で産卵していたことが想像されます。縄文人が最も好んで食べた魚である鮭が捕れたのであるとすれば、この地域は彼らにとって、まさに格好の地であったといえましょう。』としている。今回の調査面積に対して土器の出土量を考えると、生活に必要な水と貴重なタンパク源に恵まれたこの地で生活していた当時の人々の豊かな暮らしの様子を垣間見たような気がする。しかし、一方で同報告書によると当地域に存在する遺跡のほとんどが縄文時代後期～縄文時代晩期の遺跡であり、『古代の遺物の分布は一戸地区とは比較にならないほど少ない』とのことで、縄文時代晩期以降の当地域の変遷を考える上で大いに興味深い点である。今後、周辺遺跡の調査が行われ、より多くの資料が得られることによって詳細が明らかになるものと思われる。

〈参考・引用文献〉

(1) 一戸町教育委員会　「一戸町の遺跡（Ⅳ）―― 平成５年度町内遺跡詳細分布調査報告書 ――」　一戸町文化財調査報告書第35集
(2) 一戸町教育委員会　「蒔前　―― 岩手県蒔前遺跡出土資料の図録 ――」　一戸町文化財調査報告書第17集
(3) 岩手県立博物館「岩手の土器 ―― 県内出土土器の集成 ――」　1982
(4) 「縄文土器大成（晩期）」　講談社　1981
(5) 「縄文土器大観」　小学館　1989
(6) 「いわて未来への遺産　遺跡は語る　旧石器～古墳時代」　岩手日報社　2000
(7) 村越　潔　著　「亀ヶ岡式土器」　ニュー・サイエンス社　考古学ライブラリー18　1983
(8) 藤沼　邦彦　著「考古学論叢　亀ヶ岡式土器の文様の描き方 ―― 雲形文を中心として ――」　纂修堂
(9) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター「上鷹生遺跡発掘調査報告書」　岩文埋文報告書第253集
(10) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター「曲田Ⅰ遺跡発掘調査報告書」　岩文埋文報告書第87集
(11) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター「大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書　第２次～第５次調査」　岩文埋文報告書第225集
(12) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター「大芦Ⅰ遺跡発掘調査報告書」　岩文埋文報告書第306集
(13) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター「川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書」　岩文埋文報告書第317集
(14) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター「峠山牧場Ⅰ遺跡Ｂ地区発掘調査報告書」　岩文埋文報告書第320集
(15) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　「相ノ沢遺跡発掘調査報告書」　岩文埋文報告書第332集
(16) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　「長倉Ⅰ遺跡発掘調査報告書」　岩文埋文報告書第336集
(17) 宮城県教育委員会「田柄貝塚Ⅰ　土器」　宮城県文化財調査報告書第111集



第25図　土器出土量分布図

第14表　野尻Ⅲ遺跡土器数量表

グリット名	層　　位	※掲載完形数	掲載破片数	出土破片数	破片全重量(g)
ⅠA4c	Ⅳ層			30	223
ⅠA4c～ⅠA5c	Ⅳ層		2	9	66
ⅡA1b	Ⅰ層			3	35
ⅡA2b	Ⅰ層			19	246
ⅡA3b	Ⅰ層			4	67
ⅡA3b～ⅡA4a	Ⅰ～Ⅱ層			29	224
ⅡA4a	Ⅳ層			29	245
ⅡA5a	Ⅳ層			6	38
ⅢA2a	Ⅳ層	2	22	507	4649
ⅢA2a～ⅢA3a	Ⅳ層	1	2		
ⅢA2a～ⅢA5a	Ⅳ層		1		
ⅢA2a～ⅣA1a	Ⅳ層	1	2	27	161
ⅢA3a	Ⅳ層	3	35	911	1548
ⅢA3a～ⅢA4a	Ⅳ層	2	42	959	9619
ⅢA3a～ⅢA5a	Ⅳ層			1	56
ⅢA3a～ⅣA1a	Ⅳ層		14	662	6345
ⅢA4a	Ⅰ～Ⅱ、Ⅳ層		13	348	3471
ⅢA5a	Ⅰ～Ⅱ、Ⅳ層		19	731	7667
ⅢA5a～ⅣA1a	Ⅳ層		3	225	843
ⅣA1a	Ⅰ～Ⅱ、Ⅳ層	3	62	1466	14735
ⅣA2a	Ⅰ層		10	192	2080
ⅣA3b	Ⅱ層			8	95
表採				41	515
Ⅳ層一括				96	2136

　　の範囲で出土破片数の約92.5%、出土破片重量の約90.7%を占める。

※完形数には略完形の土器も含む。

Ⅵ. 分析・鑑定結果

野尻Ⅲ遺跡出土土器付着赤色顔料分析結果

岩手県立博物館　咲　山　まどか
赤　沼　英　男

野尻Ⅲ遺跡出土赤色塗彩物質の自然科学的調査結果

岩手県立博物館　　咲　山　まどか、赤　沼　英　男

野尻Ⅲ遺跡から出土した赤色塗彩物質の分析結果を報告する。

1　分析資料

分析した資料は、縄文時代晩期の竪穴住居跡南約10ｍの地点から出土した赤色塗彩土器（鉢もしくは浅鉢の体部）である。遺跡内からは同様形式の土器が出土しているが、赤色塗彩が確認されたのは今回分析を行った資料のみである[1)]。

2　分析方法

分析は粉末Ｘ線回折分析法および蛍光Ｘ線分析法によった。粉末Ｘ線回折分析法は資料にＸ線を照射し、資料から回折されるＸ線スペクトルパターンから、各回折線の強度と散乱角より求めた面間隔を用いて、化合物を同定する分析法である。蛍光Ｘ線分法は資料にＸ線を照射し、含有される元素が発する２次的なＸ線（特性Ｘ線）を測定して含有元素を同定する。非破壊で分析が可能なため、資料採取が困難な文化財の分析に適している。資料に塗彩された赤色物質は極微量のためミクロスパーテルで削り取り、メノウ乳鉢で粉末にした後粉末Ｘ線回折分析装置用無反射ガラス試料板に充填し分析に供した。回折図形の標準としては、ＪＣＰＤＳカードのデータを使用した。次に蛍光Ｘ線分析装置の30mmφ試料マスクにポリプロピレンを張り、その上に粉末Ｘ線回折分析装置用無反射ガラス試料板から取りだした試料をセットして定性分析をした（図１）。粉末Ｘ線回折分析法の測定条件は表１に示す。

3　分析結果

図２のＸ線回折スペクトルパターンによれば、ベンガラ（Hematite:Fe_2O_3）の回折角度の２θ＝24.14°，２θ＝33.08°，２θ＝35.56°，２θ＝49.48°，２θ＝54.09°にピークが確認された。また、石英（Quartz: SiO_2）の回折角度の２θ＝20.85°，２θ＝26.65°にもピークが確認された。

図３の蛍光Ｘ線スペクトル図では鉄（Fe）のＫα線（２θ＝57.50°）が5.63kcps、Ｋβ線（２θ＝51.71°）が0.94kcps、チタン（Ti）のＫα線（２θ＝86.11°）、Ｋβ線（77.25°）がそれぞれ1.81kcps、0.32kcps、バリウム（Ba）のＬα線（２θ＝87.20°）、銅（Cu）のＫα線（２θ＝45.00°）、亜鉛（Zn）のＫα線（２θ＝41.81°）が0.1kcps以下のレベルで検出された。上記の結果に基づけば、赤色塗彩物質の発色剤はベンガラ（赤鉄鉱：Fe_2O_3）と推定される。

１）財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　菅原靖男氏による。

表１　粉末Ｘ線回析分析ならびに蛍光Ｘ線分析の測定条件

粉末Ｘ線回析分析	蛍光Ｘ線分析
対陰極：Cu 管電圧：40kV 管電流：40mA	対陰極：Cr 印加電圧：電流：50kV-50mA 分光結晶：Lif・Ge・TAP

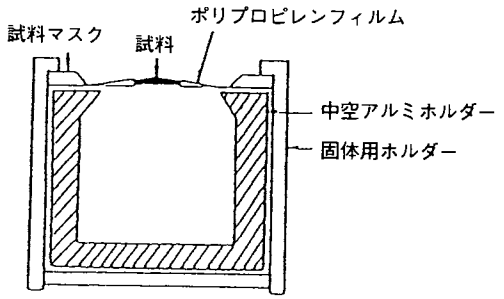


図１　微小試料の定性分析法

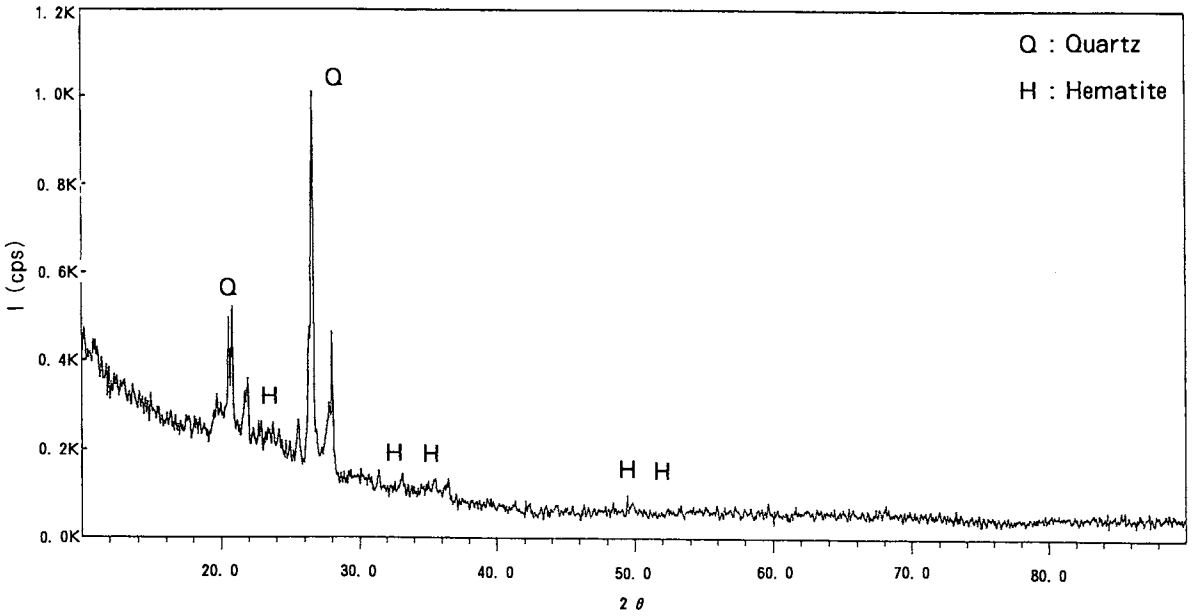


図２　資料の粉末Ｘ線回析スペクトル

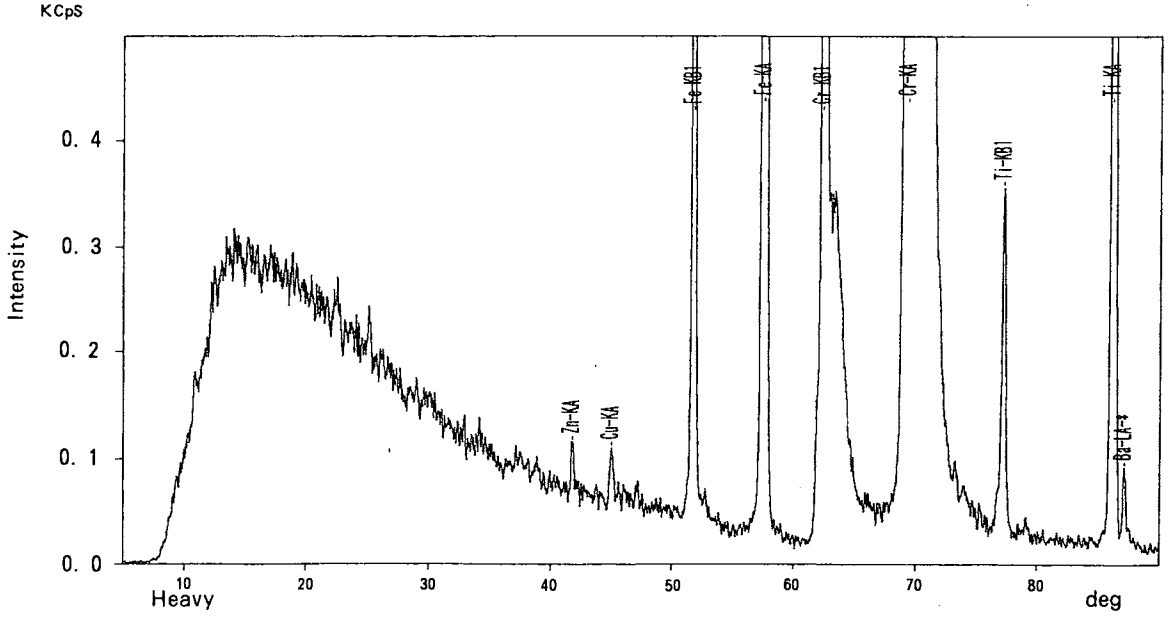


図３　資料の蛍光Ｘ線スペクトル

写　真　図　版

昭和43年頃の野尻Ⅲ遺跡周辺の様子（写真上が西）写真内↑が遺跡の位置

昭和50年頃の野尻Ⅲ遺跡周辺の様子（写真上が西）写真内↑が遺跡の位置

写真図版１　遺跡周辺の様子

調査前風景（南側）

調査前風景（北側）

調査区全景

調査区全景

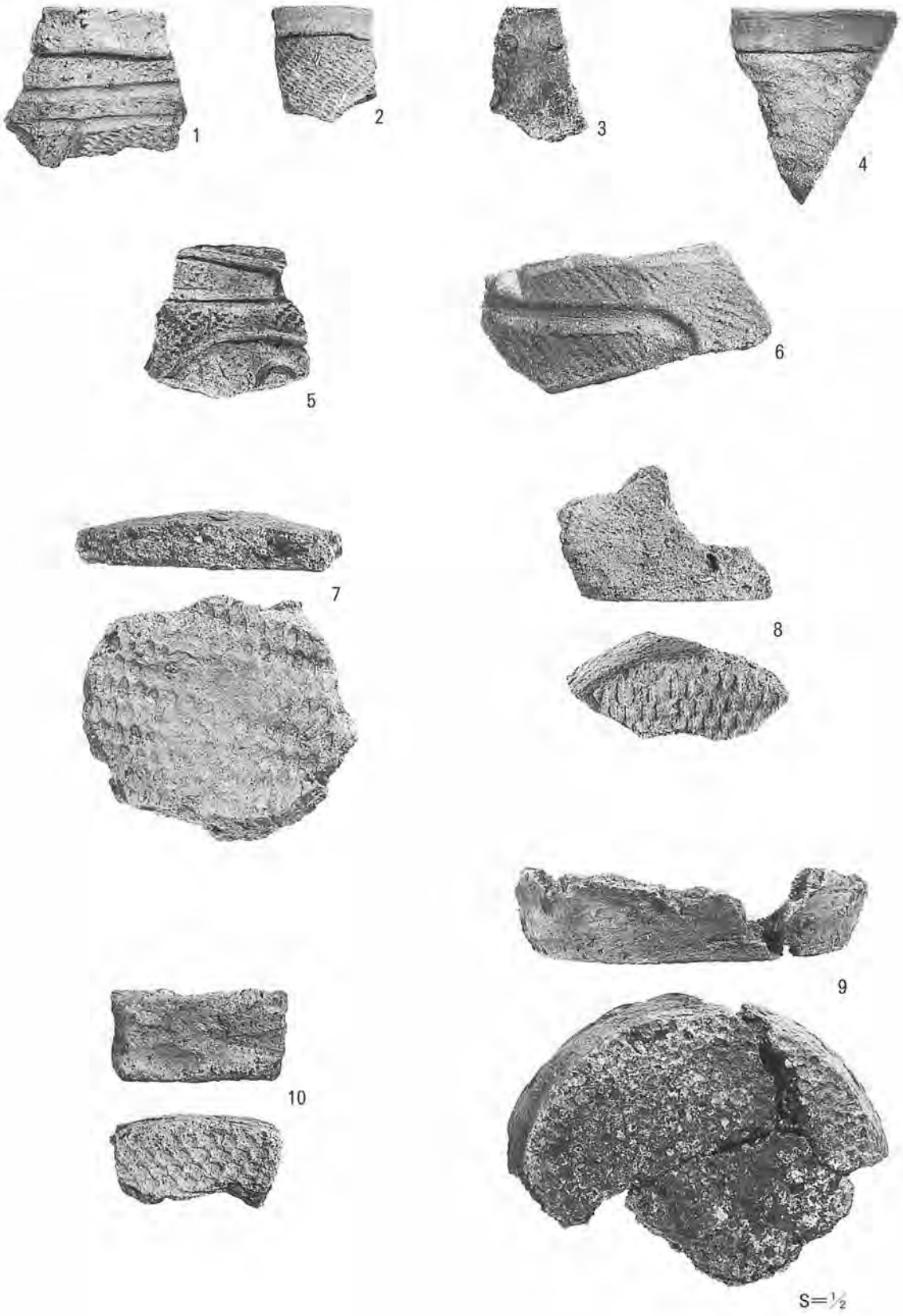
1号竪穴住居跡（東から）

石囲炉検出状況（東から）

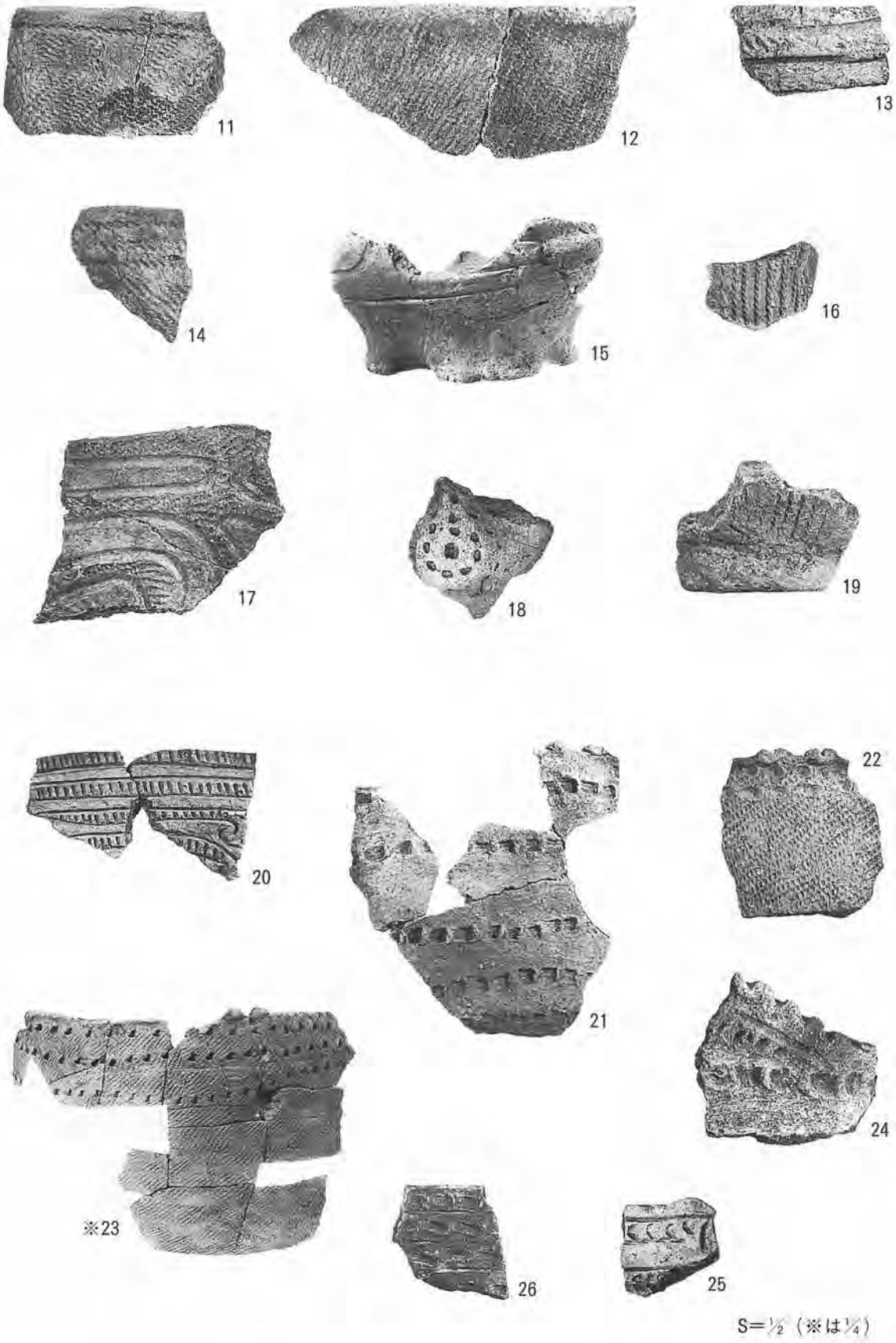
遺物出土状況

遺物出土状況

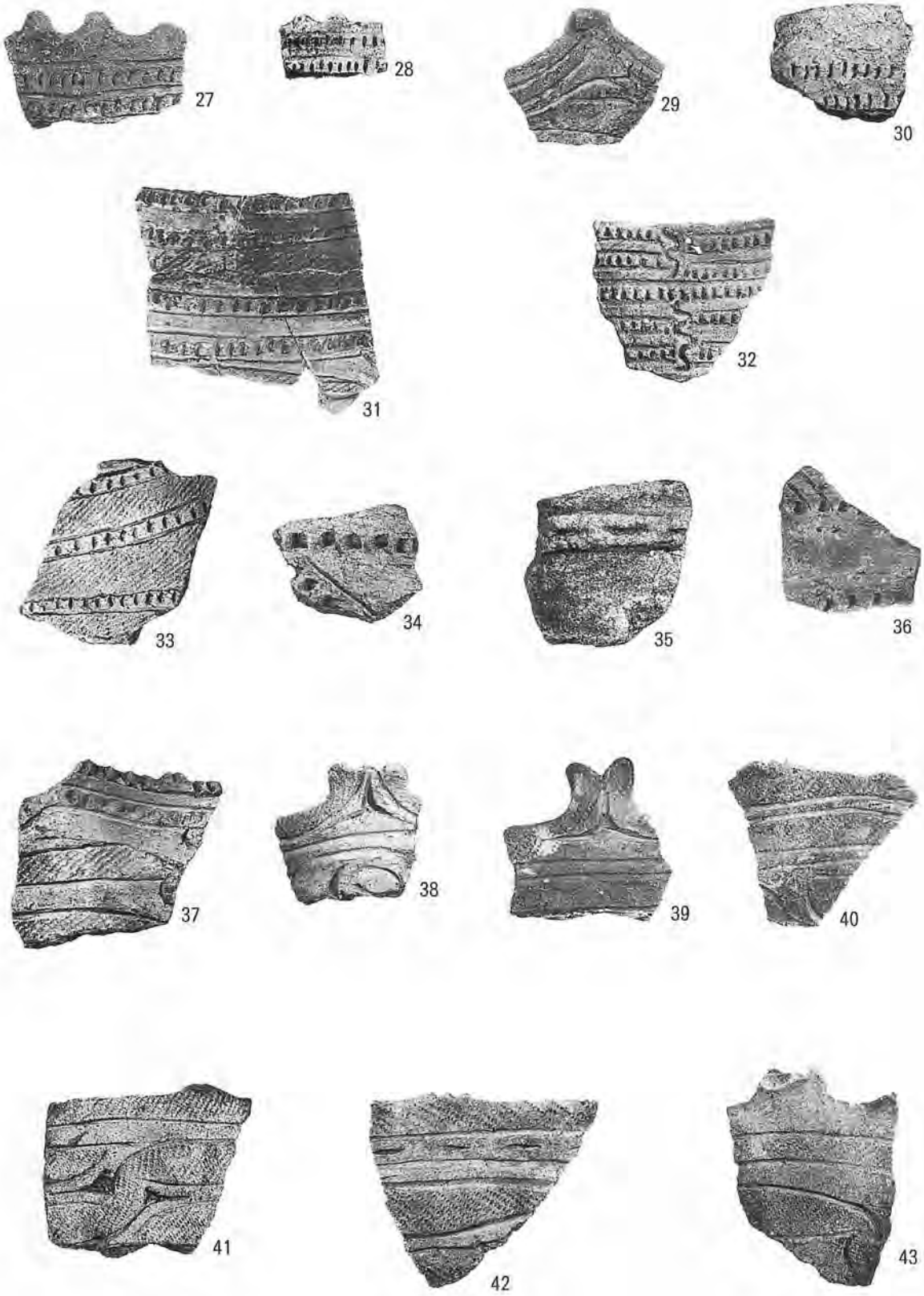
写真図版2　検出遺構・遺物出土状況



写真図版 3　遺物包含層出土土器(1)

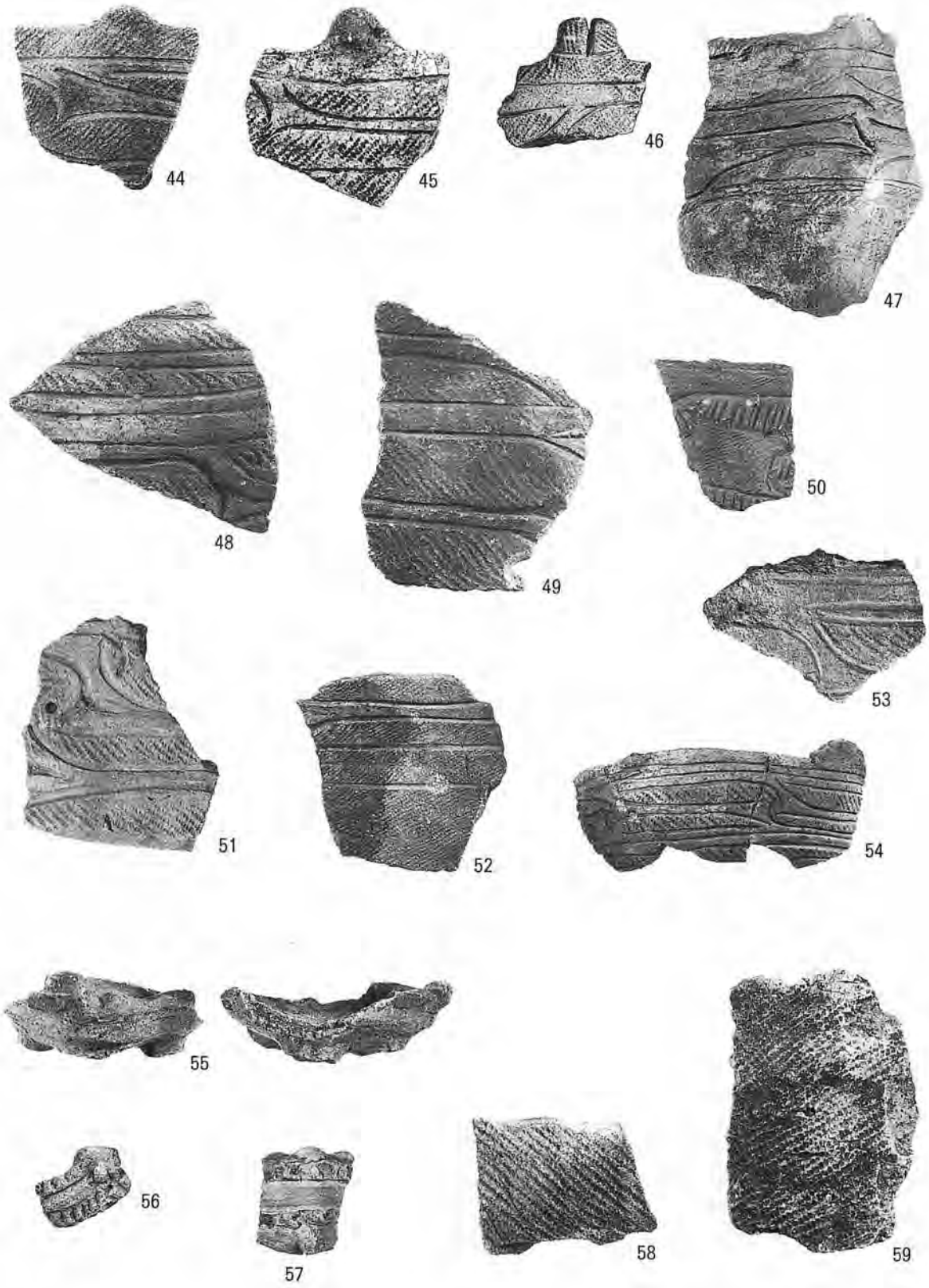


写真図版４　遺物包含層出土土器(2)

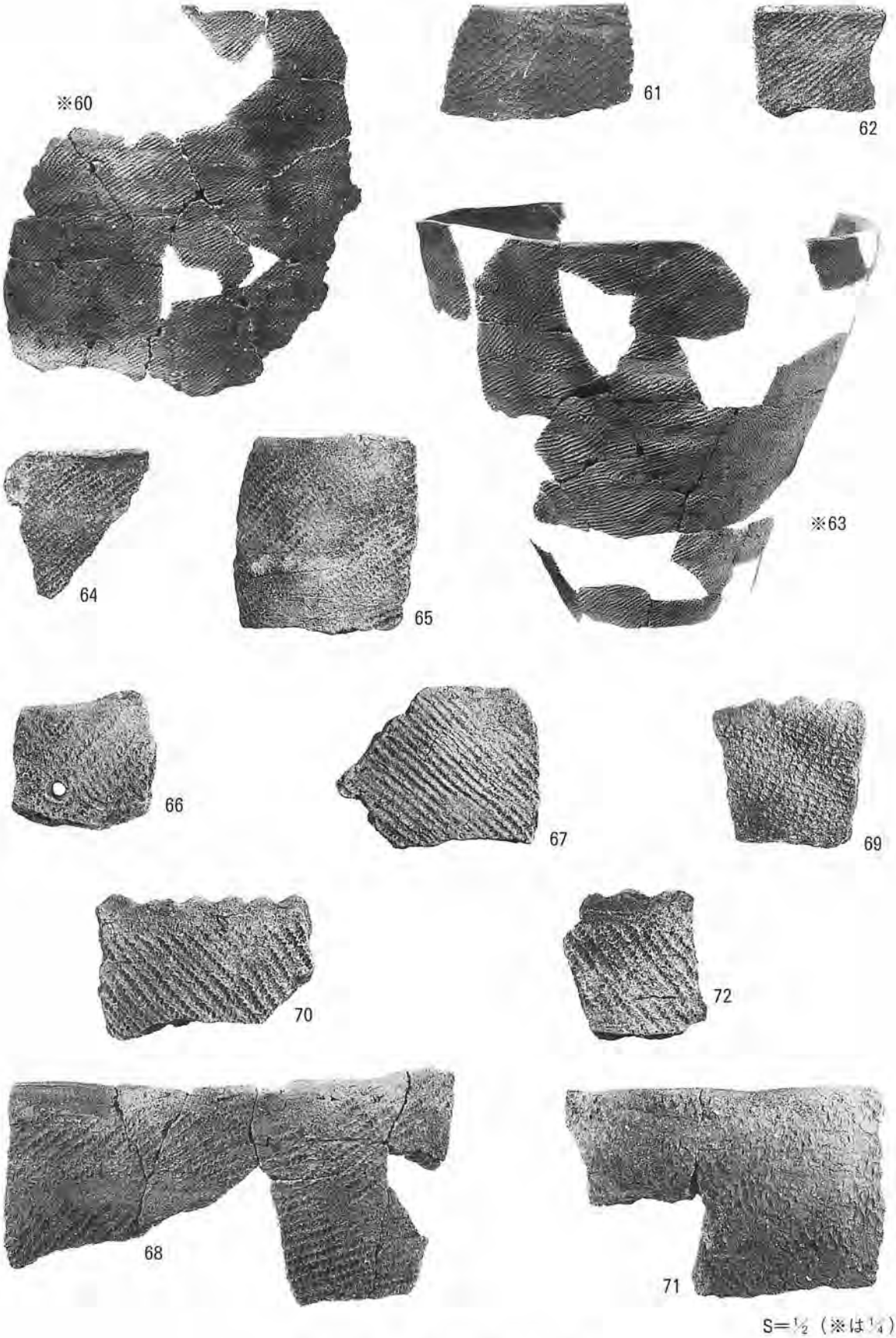


S=½

写真図版５　遺物包含層出土土器(3)

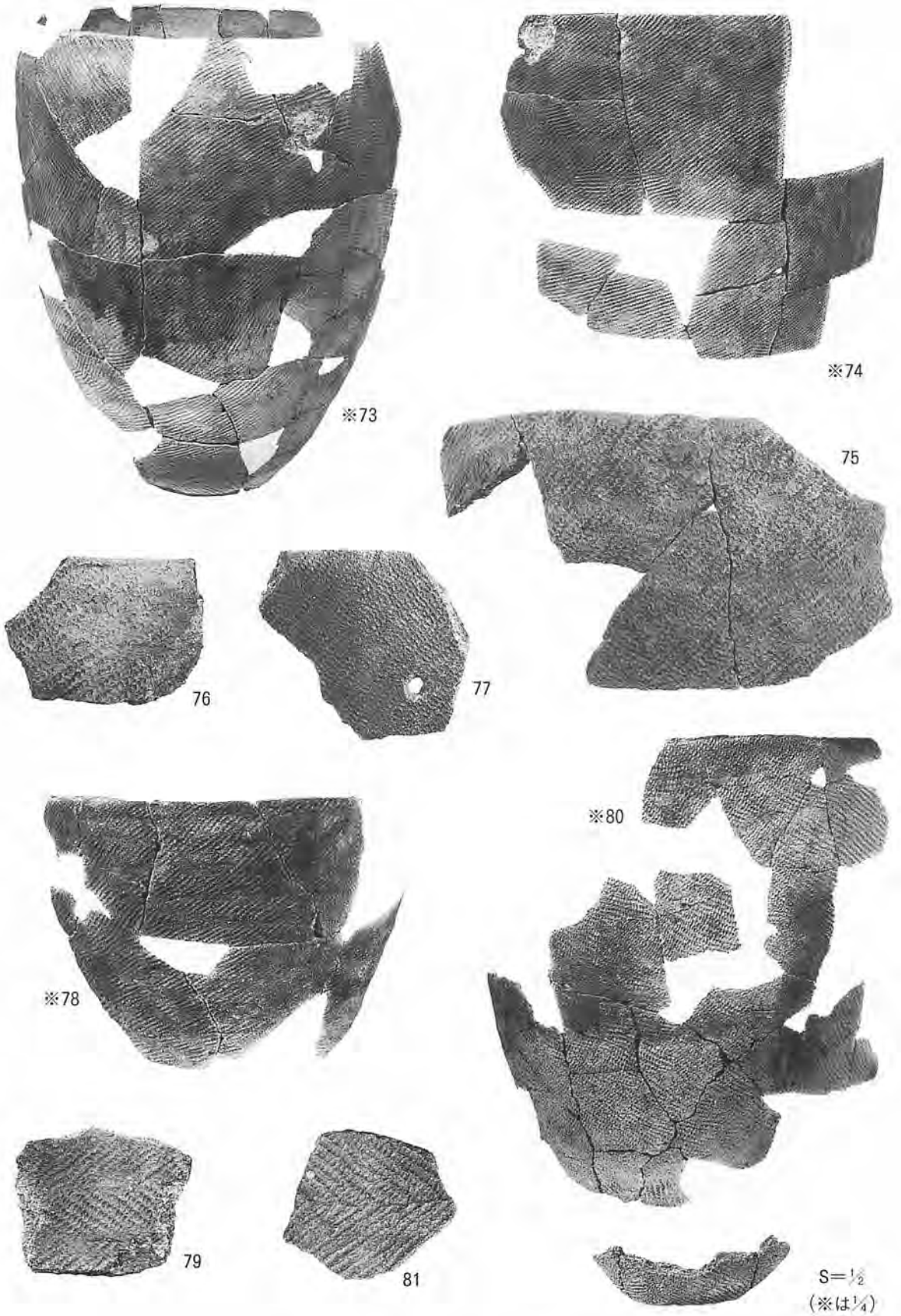


写真図版 6　遺物包含層出土土器(4)

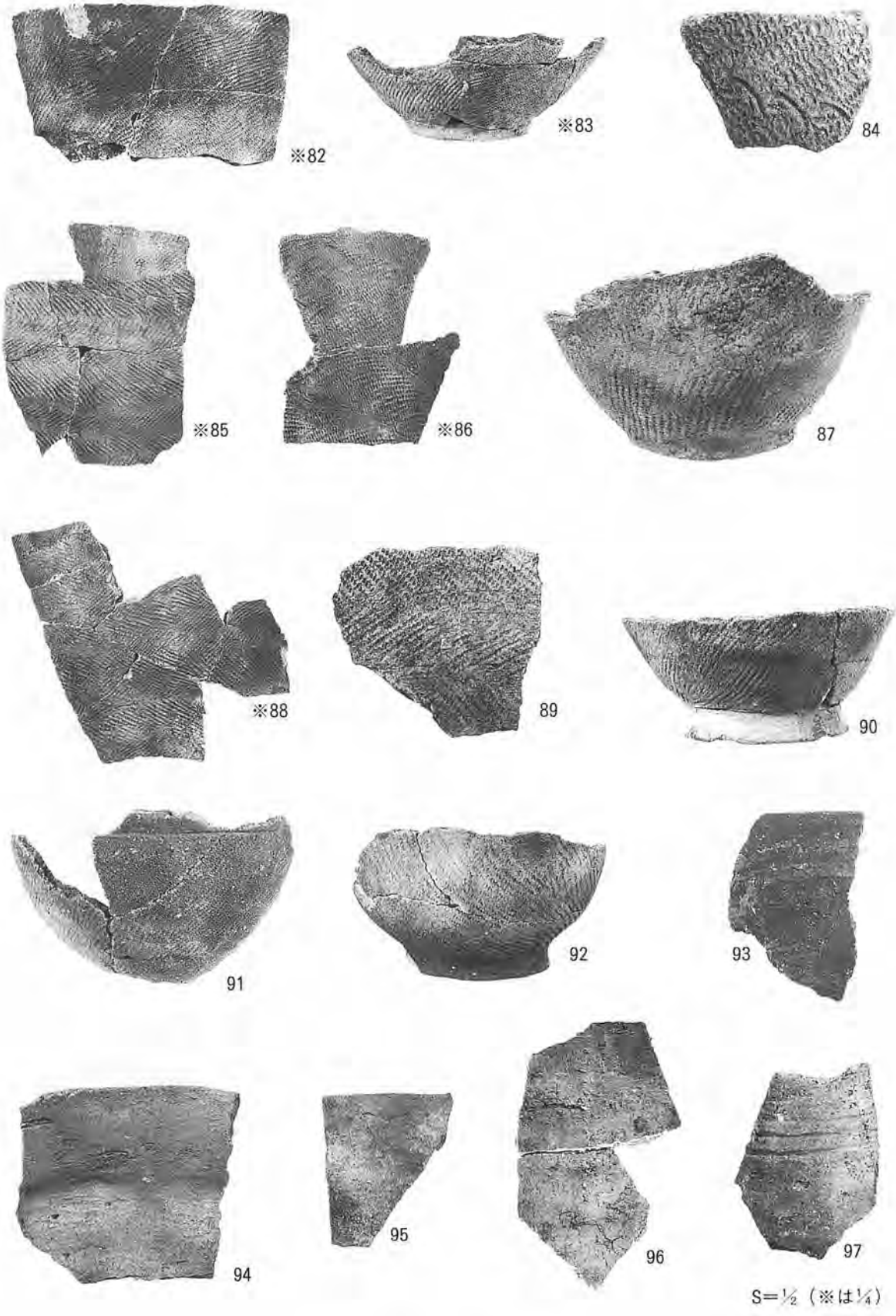


S=½（※は¼）

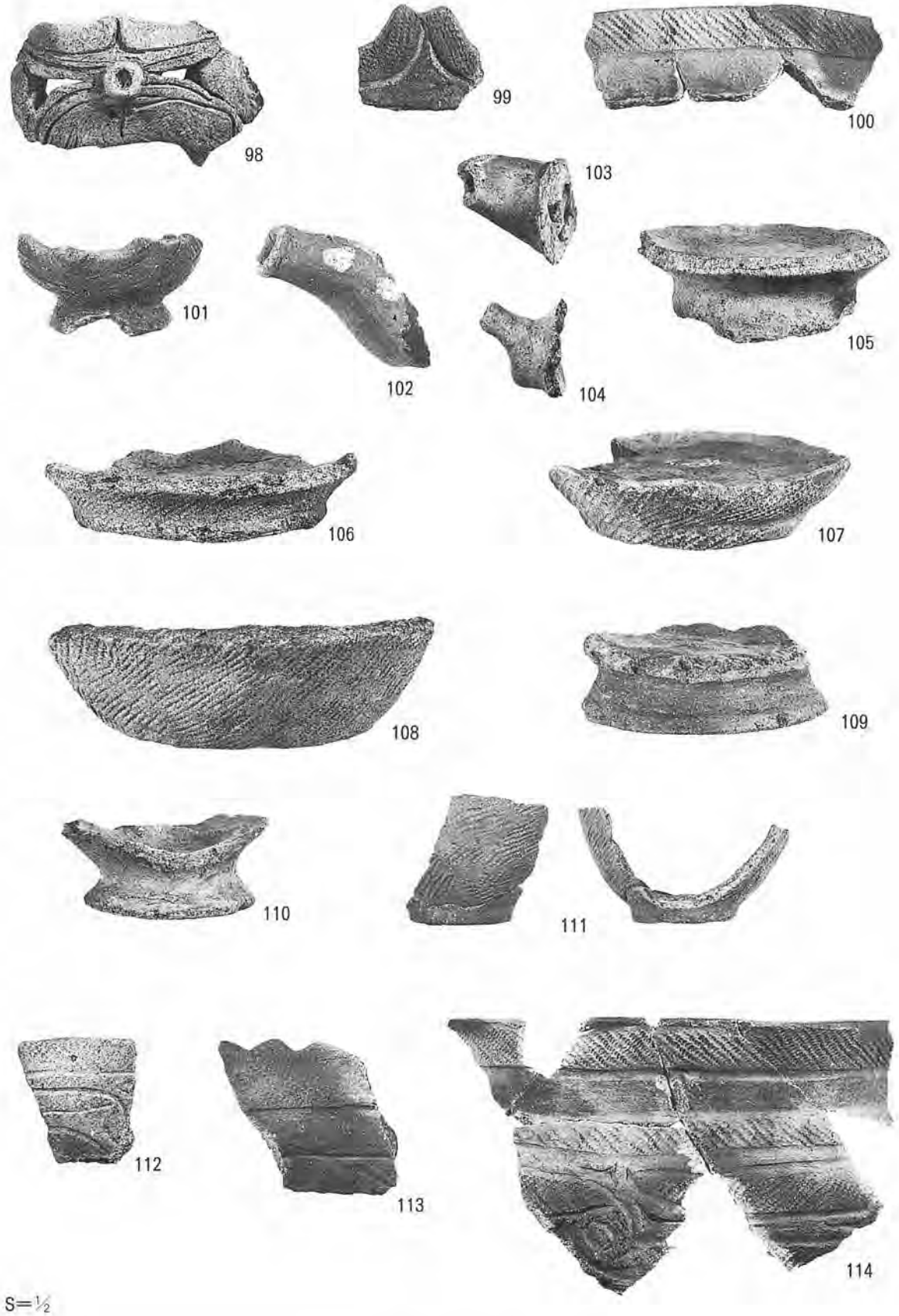
写真図版７　遺物包含層出土土器(5)



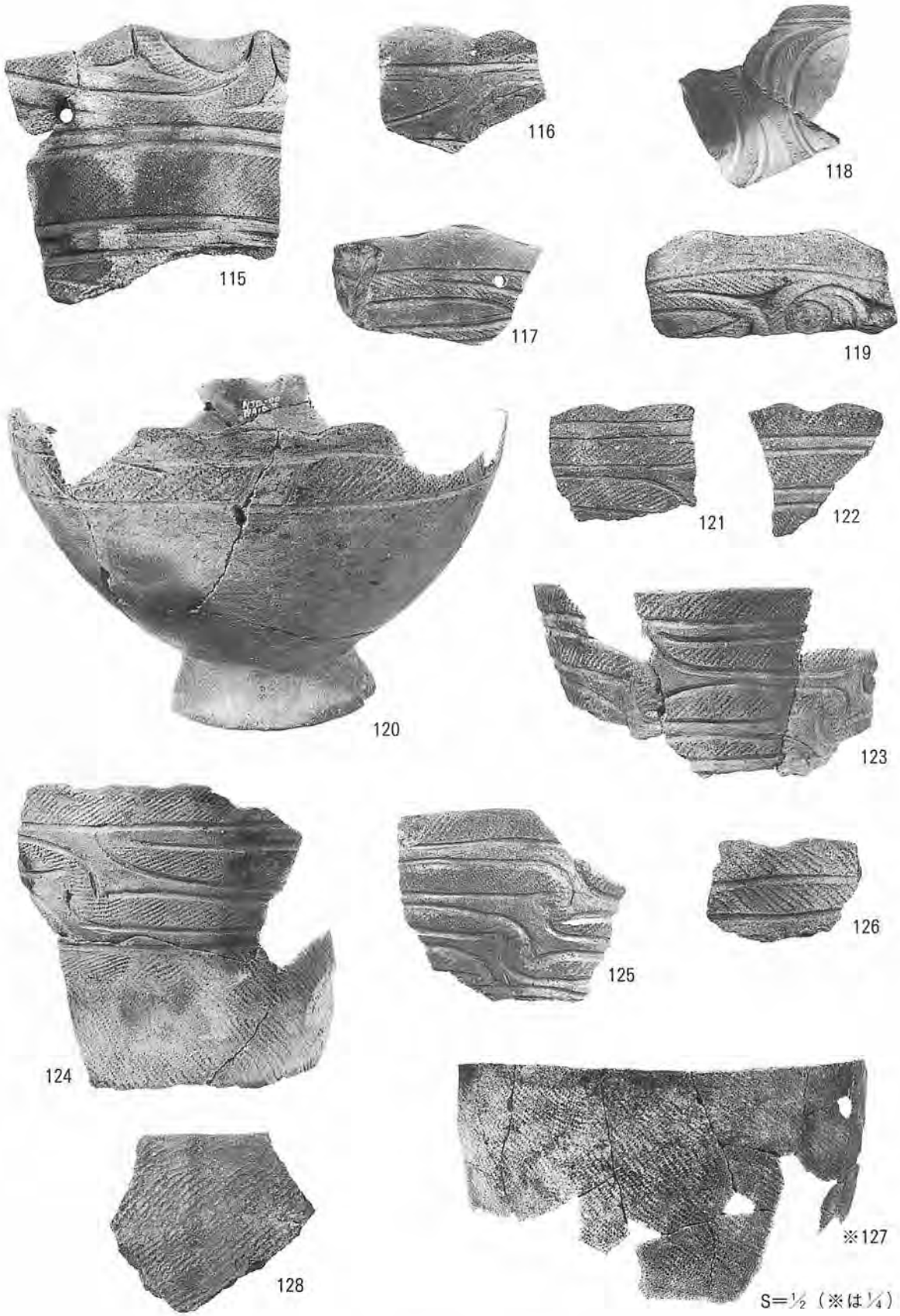
写真図版 8　遺物包含層出土土器(6)



写真図版 9　遺物包含層出土土器(7)

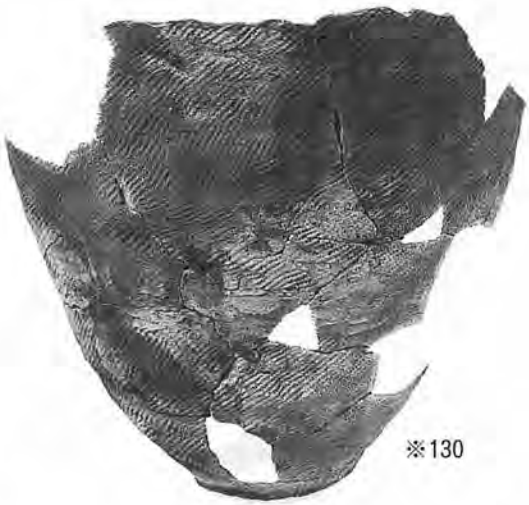


写真図版10　遺物包含層出土土器(8)



写真図版11　遺物包含層出土土器(9)

129

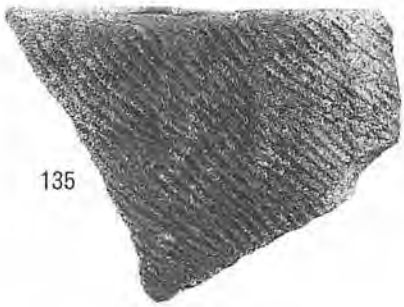

※130

※131

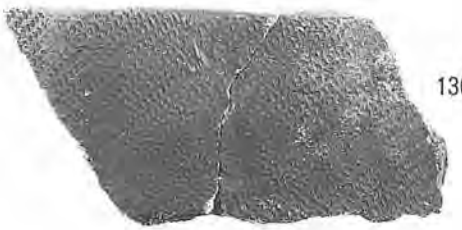
132

133

134

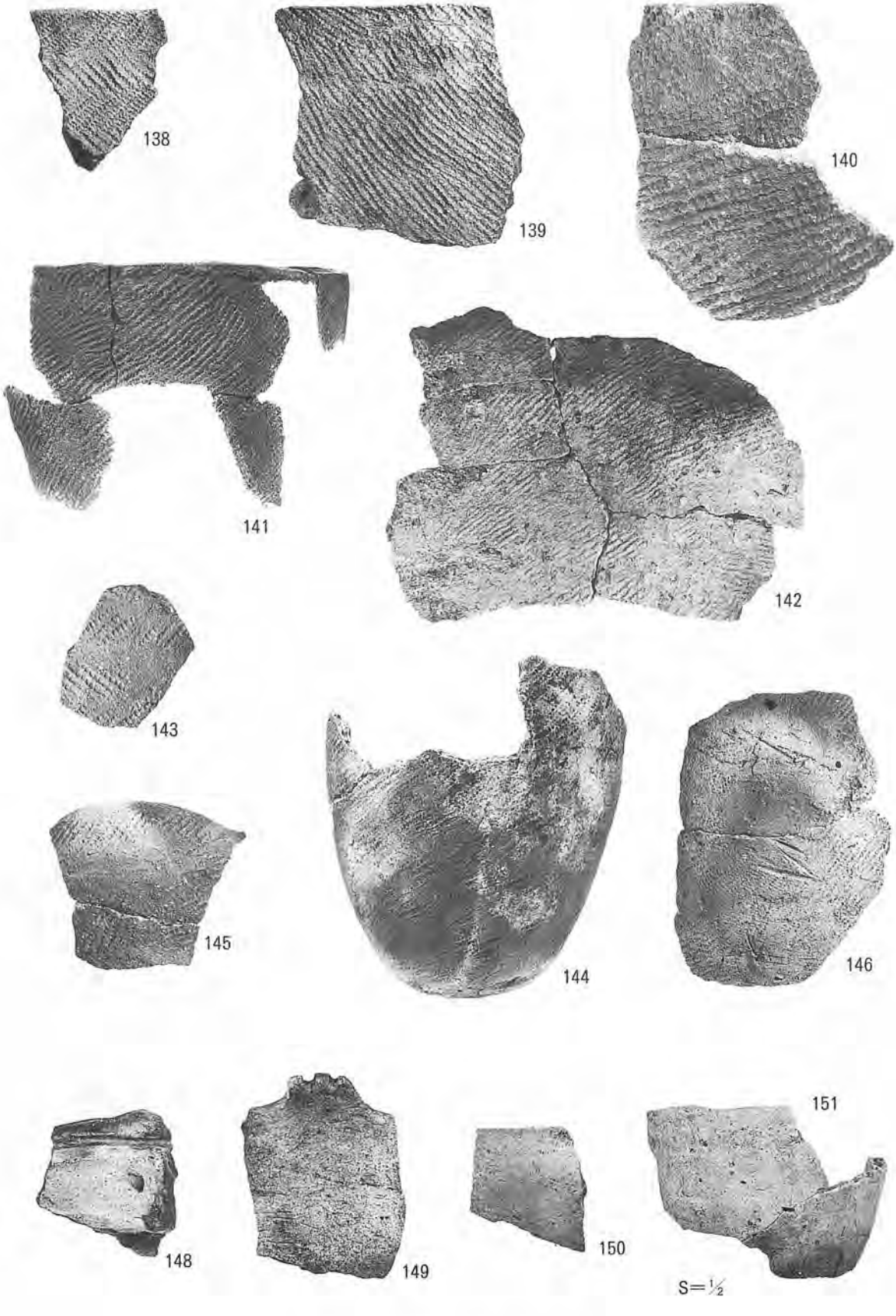

135

137

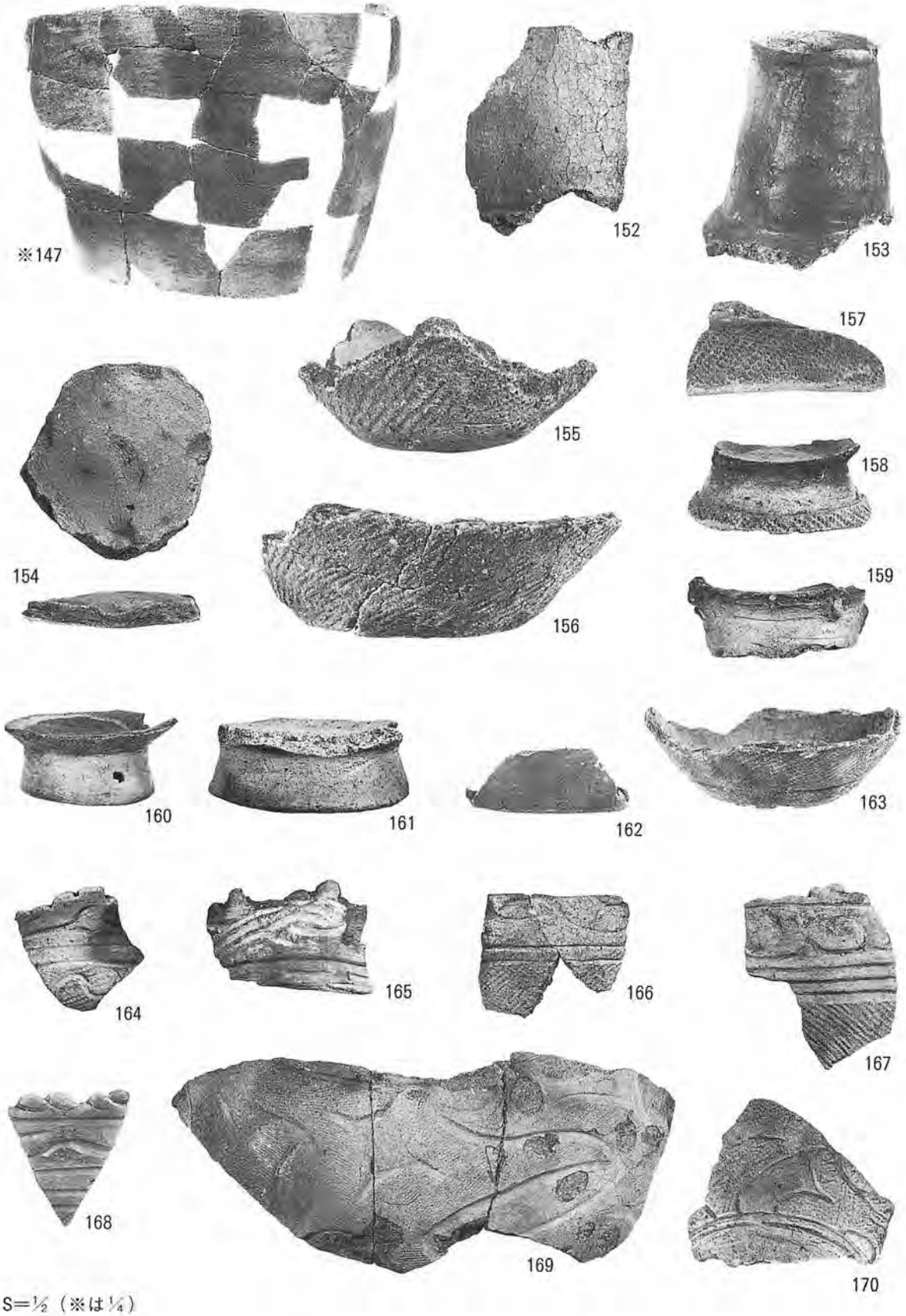

136

S=½（※は¼）

写真図版12　遺物包含層出土土器(10)

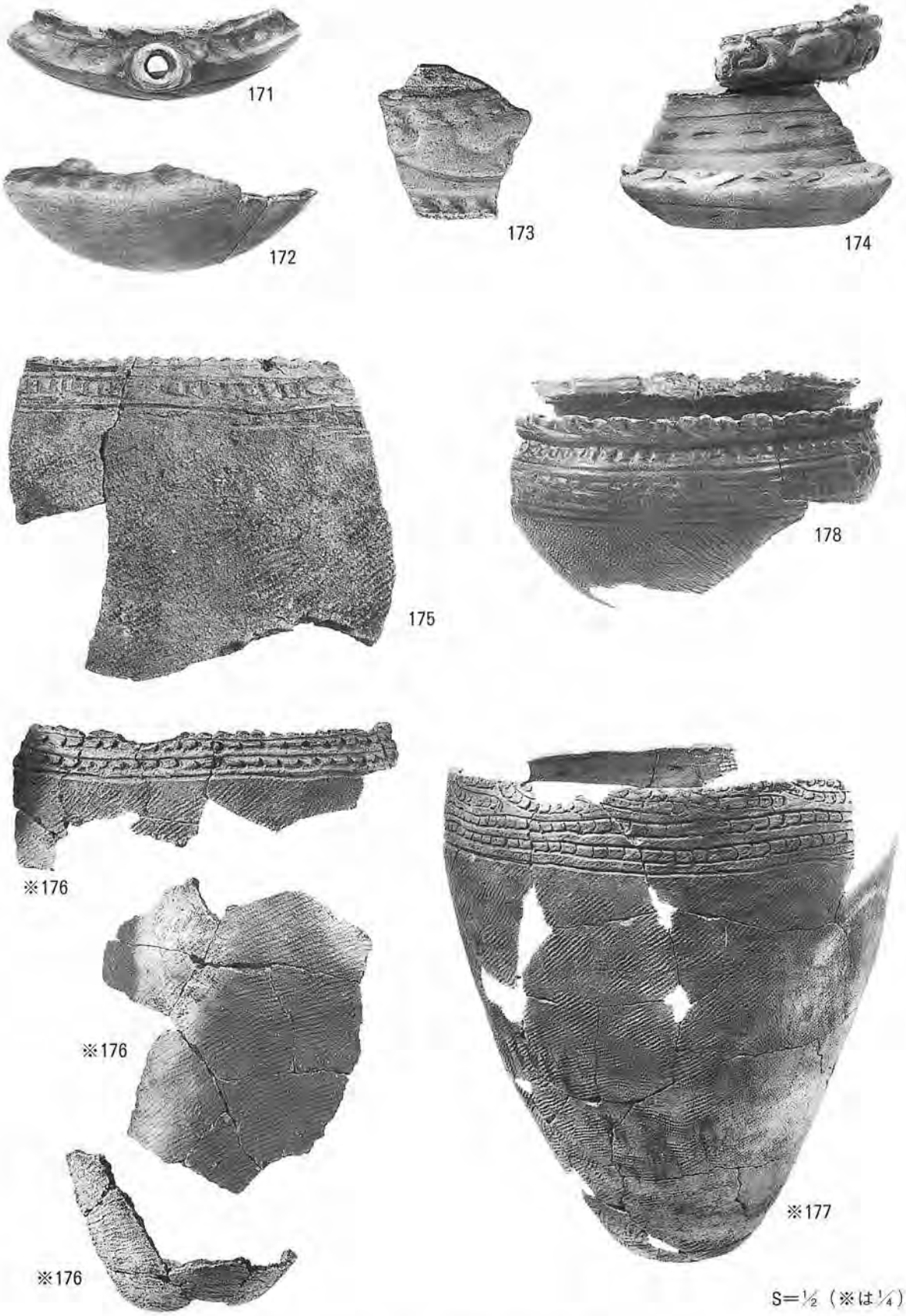


写真図版13　遺物包含層出土土器(11)

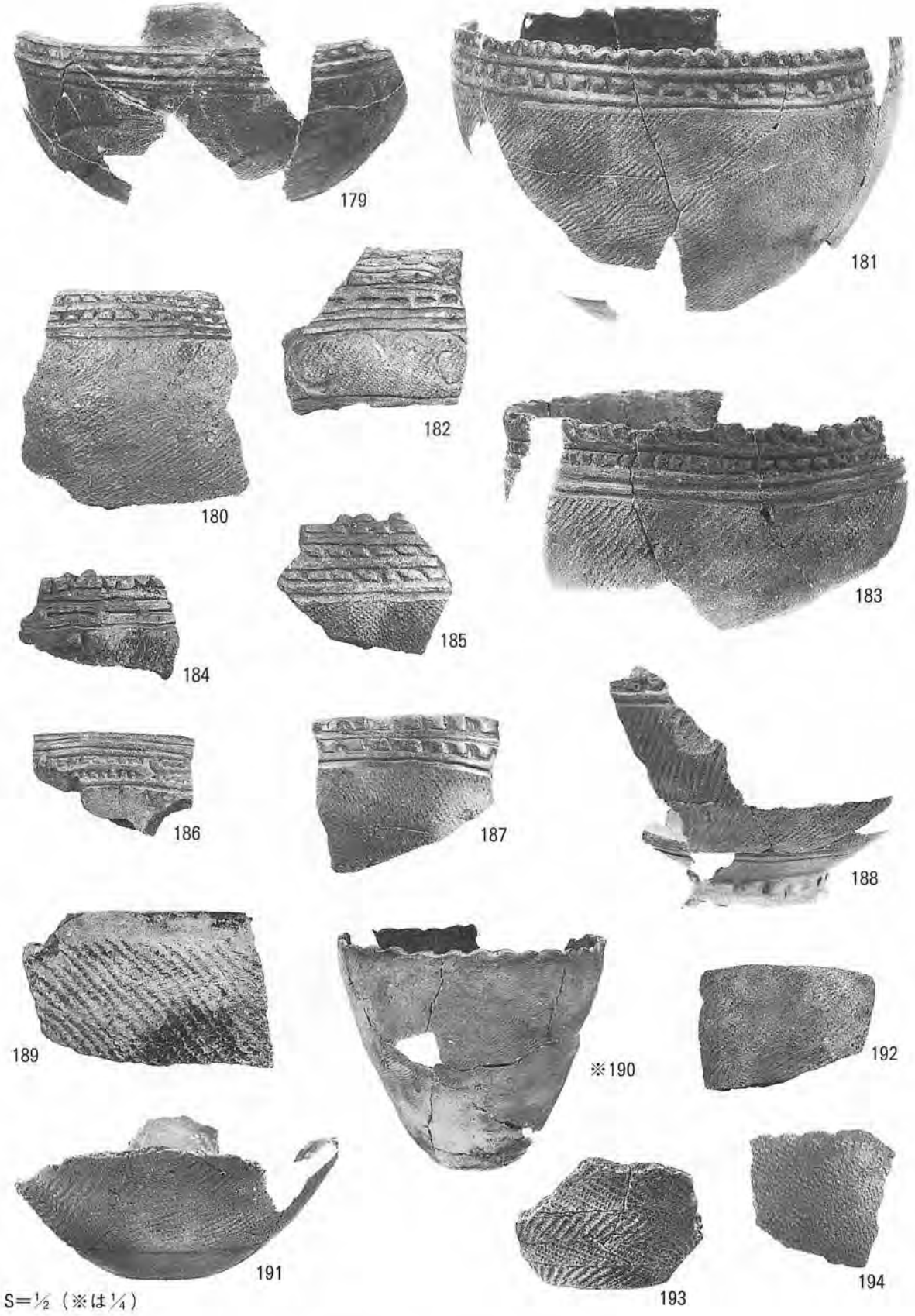


S=½（※は¼）

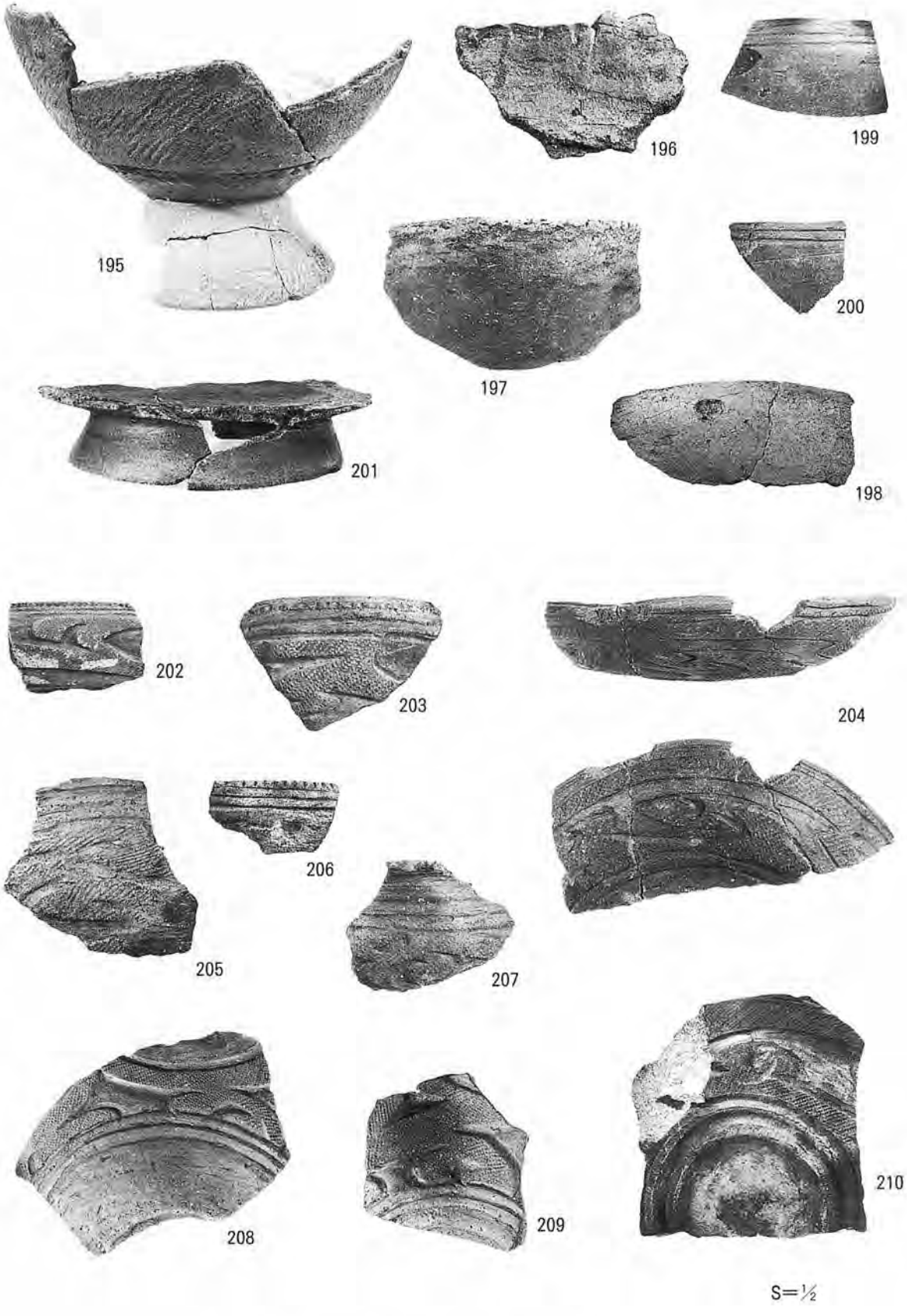
写真図版14　遺物包含層出土土器(12)



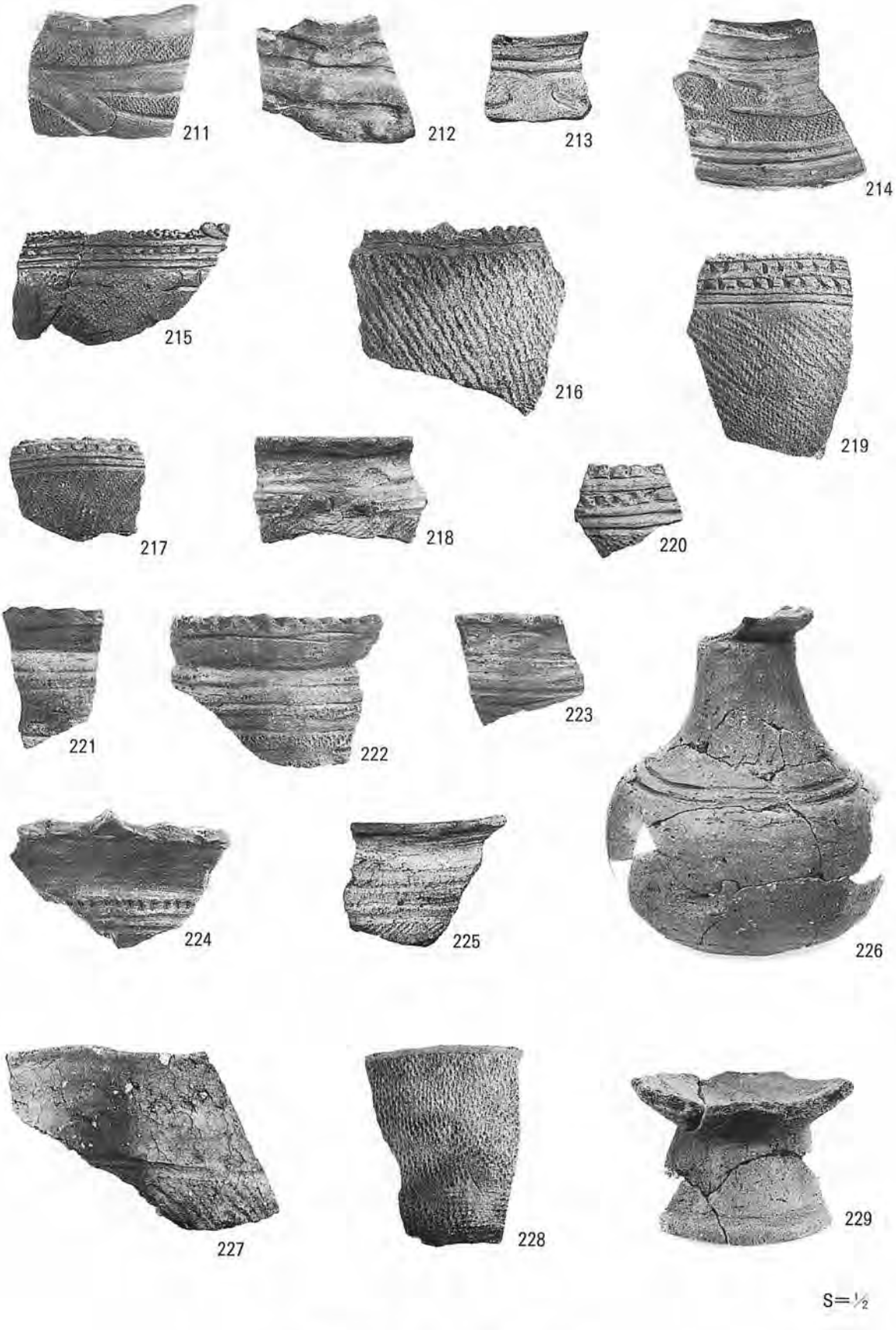
写真図版15　遺物包含層出土土器(13)



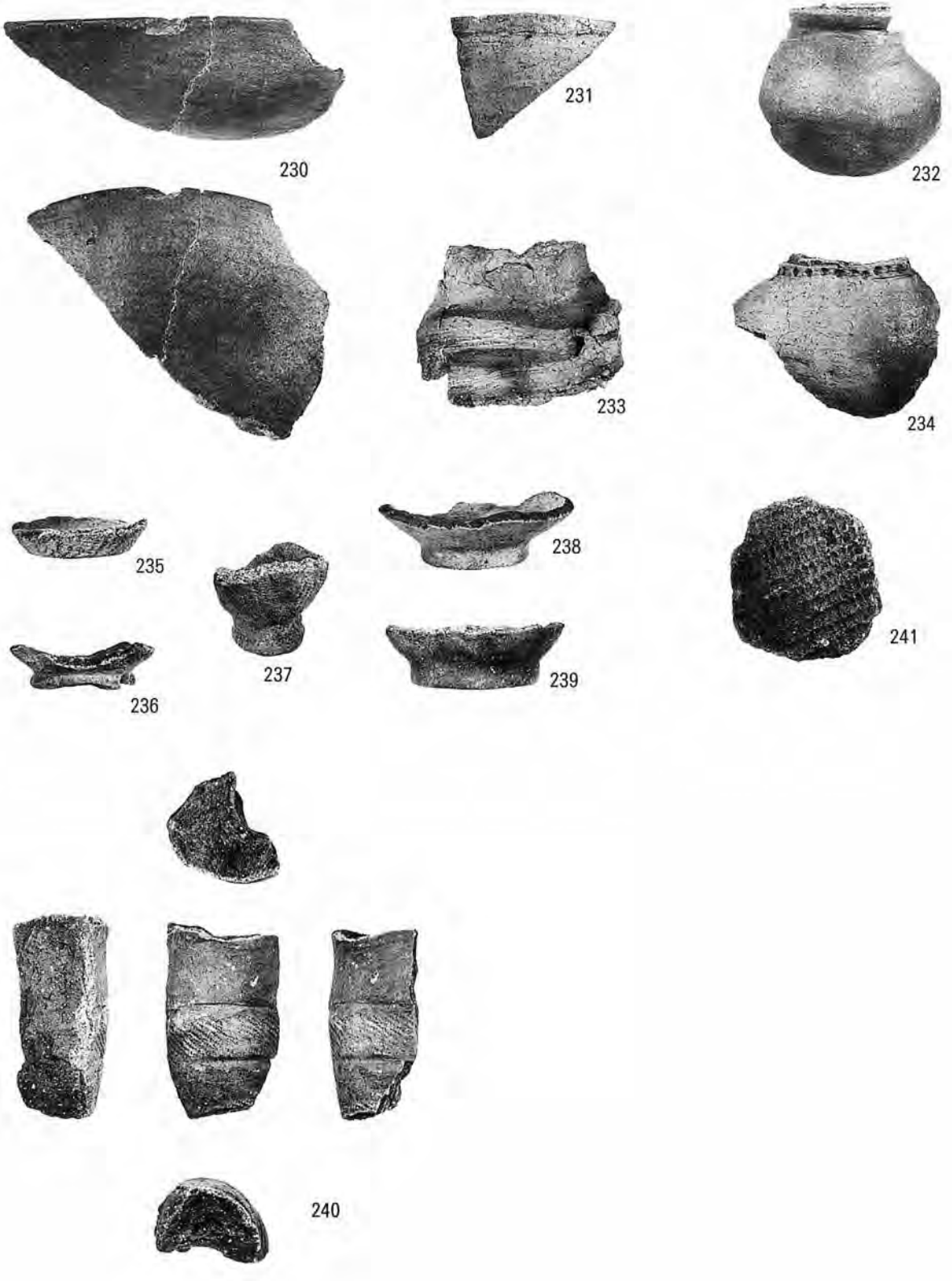
写真図版16　遺物包含層出土土器(14)



写真図版17　遺物包含層出土土器(15)

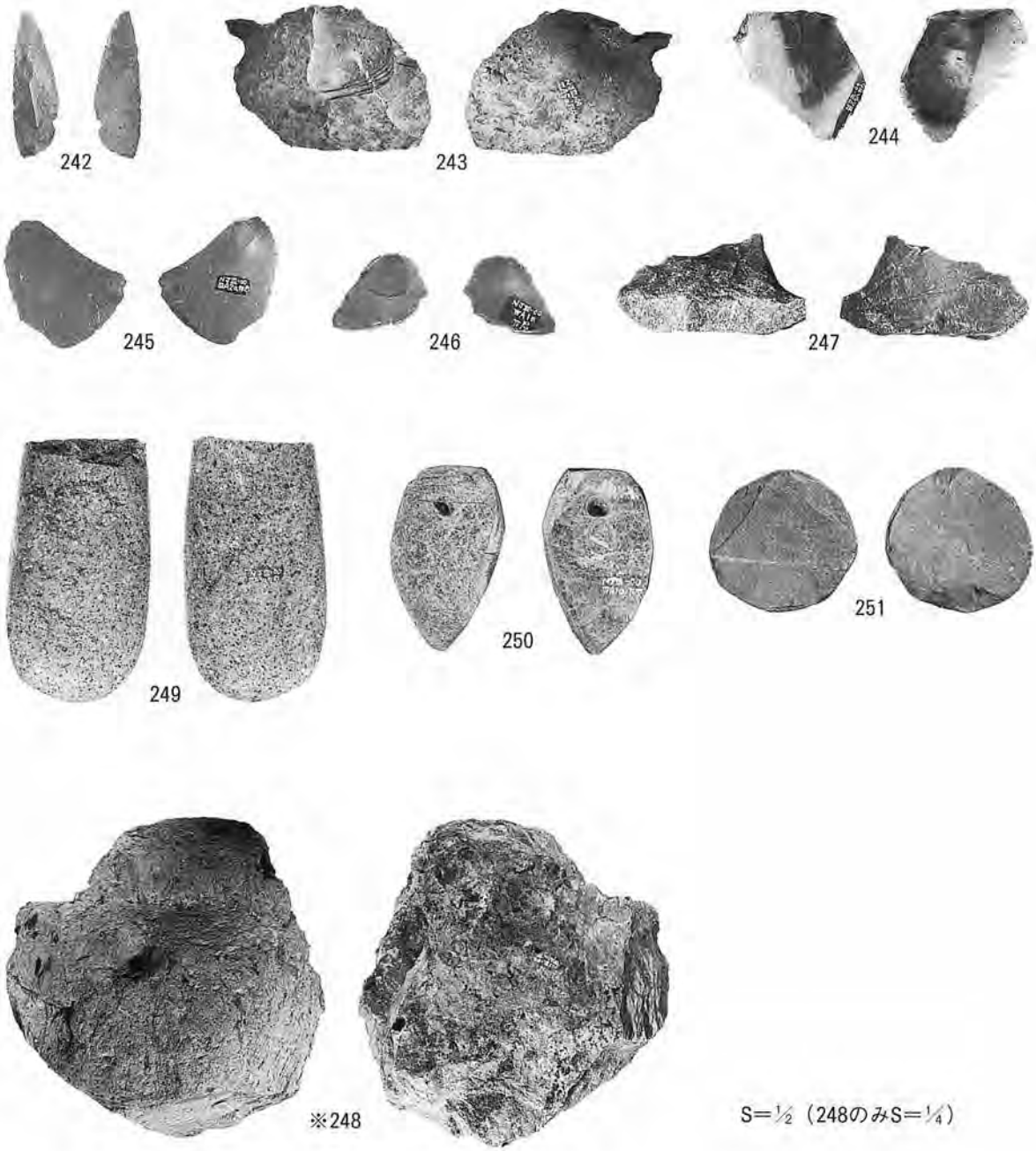


写真図版18　遺物包含層出土土器(16)



S=½

写真図版19　遺物包含層出土土器(17)・土製品



S=½（248のみS=¼）

写真図版20　遺物包含層出土石器・石製品

報告書抄録

ふりがな	のじりさんいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	野尻Ⅲ遺跡発掘調査報告書
副書名	一般農道整備事業（野尻地区）関連発掘調査
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第389集
編著者名	菅原靖男・村木　敬
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡１１－１８５　ＴＥＬ０１９－６３８－９００１
発行年月日	西暦2001年10月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
野尻Ⅲ遺跡（のじりいせき）	岩手県二戸郡（いわてけんにのへぐん） 一戸町平糠字（いちのへちょうひらぬかあざ） 野尻22番（のじりばん）ほか	03524	JE-0302	40° 07′ 17″	141° 19′ 02″	2000.8.1 ～ 8.31	1,125m²	一般農道整備事業（野尻地区）に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野尻Ⅲ遺跡	散布地	縄文時代 中期中葉～後葉 後期初頭～前葉 後期後葉～末葉 晩期初頭～中葉	竪穴住居１棟 土坑17基 柱穴状土坑19基	・縄文土器（大コンテナ約8.5箱） 深鉢・鉢・台付鉢・浅鉢・皿・注口土器・香炉 ・土製品（２点） 土偶（脚部or胴部） 土製円盤 ・石器（大コンテナ約0.5箱） 石鏃・石匙・凹石・磨製石斧・円盤状石製品	遺構の検出作業と遺物の出土状況の把握のみを行い、遺構の精査は行っていない

平成13年度 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

【職　員】

所長	伊藤民也	副所長	高橋正儀

［管理課］

課長	韮沢正吾	嘱託	高橋照雄
課長補佐	山崎善光	〃	佐々木光重
〃	山岸直美	〃	加藤美代子
主査	立花多加志	〃	湯沢邦子

［調査第一課］

課長	佐々木勝	課長	高橋與右衛門
課長補佐	佐々木清文	課長補佐	中川重紀
〃	高橋義介		
文化財専門員	小山内透	文化財専門員	金子佐知子
文化財調査員	中田迪	文化財調査員	阿部眞澄
〃	飯森秀文	〃	飯坂一重
〃	赤石登	〃	阿部徹
〃	吉田充	〃	濱田宏
〃	亀大二郎	〃	安藤由紀夫
〃	小原眞一	〃	高木晃
〃	佐々木信一	〃	佐藤淳一
〃	小笠原健一郎	〃	星雅之
〃	金野進	〃	菅原靖男
〃	小松則也	〃	半澤武彦
〃	岩渕計	〃	杉沢昭太郎
〃	鳥居達人	〃	溜浩二郎
〃	金子昭彦	〃	中村直美
〃	羽柴直人	〃	西澤正晴
〃	千葉正彦	〃	八木勝枝
〃	長村克稔	〃	(阿部勝則)
〃	星幸文		
〃	佐藤あき子		
〃	菊池貴広		
〃	村上拓		
〃	本多準一郎		
〃	村木敬		
〃	北村忠昭		
〃	高瀬克範		
〃	丸山浩治		
〃	島原弘征		
〃	中村絵美		
期限付調査員	小林弘卓	期限付調査員	吉川徹
〃	江藤敦	〃	北田勲
〃	菊池賢	〃	吉田里和
〃	井上信介	〃	原美津子
〃	川又晋	〃	齋藤麻紀子
〃	吉田真由美	〃	駒木野智寛
〃	坂部恵造		
〃	木村ひかり		

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第389集

野尻Ⅲ遺跡発掘調査報告書

一般農道整備事業（野尻地区）関連発掘調査

印刷　平成13年10月25日
発行　平成13年10月31日

発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11―185
TEL (019)638－9001・9002
FAX (019)638－8563

印刷　小松茂印刷所
〒020-0025　盛岡市大沢川原2丁目5-37
TEL (019) 623-6073

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2001